



御崎遺跡

尾原ダム建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書VII

2009年3月

国土交通省中国地方整備局
奥出雲町教育委員会



御崎遺跡

尾原ダム建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書VII



2009年3月

国土交通省中国地方整備局
奥出雲町教育委員会



序

斐伊川・神戸川総合開発工事事務所では、斐伊川・神戸川の抜本的な治水対策（3点セットと呼ばれる治水対策）の1つである、斐伊川上流部の尾原ダムと神戸川上流部の志津見ダムの建設事業を進めています。

尾原ダム建設事業の実施に際しては、島根県教育委員会、奥出雲町教育委員会をはじめ関係各位のご協力をいただき、埋蔵文化財の保護にも十分に留意すべく必要な調査の実施、記録保存につとめるものとし、平成11年から計画的に発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成19年度から着手した「御崎遺跡」の調査結果をまとめたものです。

本報告書が郷土の歴史教育や地域社会の諸活動のために広く活用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査並びに報告書のとりまとめに關係された皆様に深く感謝申し上げます。

平成21年3月

国土交通省中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
所長 中川 哲志

序

奥出雲町教育委員会は、国土交通省 中国地方整備局 豊伊川・神戸川総合開発工事事務所の委託を受け、平成 11 年度から尾原ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を行っております。本書は、平成 19・20 年度に実施した御崎遺跡の発掘調査記録であります。

ダム建設地が位置するここ豊伊川の上流は、かつて「肥乃河上」と称され、神話の舞台の地として広く知られ、古くからの遺跡がその数を増しつつあります。

今回の調査で、本書に記録した御崎遺跡は、河上部と河下部に分かれており河上部からは、池状遺構、溝状遺構、掘立柱建物跡 2 基、河下部からは、弥生時代の堅穴住居跡 1 基等が発見されました。

これらの成果は、今後の当地方の歴史解明と歴史学習に活用され、文化遺産の保護に役立つものと期待しております。

終わりに、本調査にあたり国土交通省 中国地方整備局 豊伊川・神戸川総合開発工事事務所、島根県文化財課をはじめ、関係の皆様方の格別のご理解、ご協力を賜りましたことに厚くお礼申し上げます。

平成 21 年 3 月

奥出雲町教育委員会

教育長 若 槻 慎 二

例　　言

1. 本書は、奥出雲町教育委員会が、国土交通省中国地方整備局美伊川・神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて2007（平成19）年度と2008（平成20）年度に実施した尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 本書で扱う遺跡は次の通りである。

島根県仁多郡奥出雲町三成 777-1 他 御崎遺跡

3. 調査組織は次の通りである

調査主体 奥出雲町教育委員会

調査主体者 奥出雲町教育委員会 教育長 岩瀬慎二

◇2007（平成19）年度 現地調査

事務局 川本健一（教育課長）、石井 堅（教育課長補佐）、森山 昇（生涯学習第2係長）、平田昭憲（社会教育主事）

調査員 野津 旭

調査補助員 杉原清一、藤原友子、家熊 猛、井上賢治、福田市子

（以上、奥出雲町埋蔵文化財調査室）

◇2008（平成20）年度 現地調査及び報告書作成

事務局 川本健一（教育課長）、石井 堅（教育課長補佐）、森山 昇（生涯学習係長）、平田昭憲（社会教育主事）

調査員 野津 旭

調査補助員 福田市子、舟木千晴（以上、奥出雲町埋蔵文化財調査室）

4. 発掘作業（発掘作業員雇用・重機借り上げ・発掘用具調達等）について、奥出雲町教育委員会から社団法人中國建設弘済会へ委託して実施した。担当者は次の通りである。

社団法人中國建設弘済会島根県支部

【2007（平成19）年度】

〔現場担当〕 佐野靖郎、板倉次郎、佐野木信義（技術員）

〔事務担当〕 萩原久美子、簗 俊治（事務員）

【2008（平成20）年度】

〔現場担当〕 宮谷公平、祝部祥子、持田明典（技術員）

〔事務担当〕 萩原久美子（事務員）

5. 発掘作業については、以下の方々に参加していただいた。

福間新子、石田安夫、山本雅臣、長谷川一登、長谷川トミコ、藤原廣義、藤原幸子、
松田ユ子、内田佳江、菅田利江、陶山優子、三島要吉、森合茂男、恩田豪吉、山田忠一、
山根知雄、藤原厚子

6. 発掘調査及び報告書作成にあたって、下記の方々・諸機関有益な御指導・助言と御協力をいただいた。記して謝意を表する。

◇調査指導（順不同、敬称略、所属・役職名は平成20年時）

島根県教育庁文化財課、島根県埋蔵文化財調査センター、池淵俊一（島根県教育庁文化財課）、
蓮岡法暉（島根県文化財保護審議会委員）、中村唯史（島根県立三瓶自然館）、東山信治（島
根県埋蔵文化財調査センター）

◇調査協力（順不同、敬称略）

伊藤徳広、内田律雄、西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）、渡部裕美（山口市教育委
員会）、（株）内田工務店、（株）トーワエンジニアリング

7. 採岡中の北は測量法による平面直角第III座標系X軸方向を指し、座標系XY座標は世界測地
系（第3図に括弧書きで日本測地系数値を入れている）による。レベル高は海拔高を示す。

8. 航空写真と、3D レーザースキャナー計測及び図化業務は、（株）トーワエンジニアリングが
行った。第35・36・39～43図は（株）トーワエンジニアリングの測量図に一部、加筆・修正した
ものを用いている。P54の3D画像(1)、P62の3D画像(2)はその3Dレーザー測量による3次
元モデル画像である。

自然科学分析は下記に依頼及び委託し、その結果・報告書については第6章に掲載した。

・年代測定：（株）地球科学研究所

・土壤分析：増永二之、佐藤邦明（島根大学生物資源科学部）

9. 第2図は、国土地理院発行のS-1/25000地形図、「湯村」と「下横田」を合成して使用した。

10. 本書に掲載した遺構、遺物の実測、トレース、整理作業等は主に調査員が行ない、井上、藤
原厚、松田、菅田の協力を得た。遺物実測、トレースの一部を（株）トーワエンジニアリングに
委託した。遺構写真は現場担当調査員が、遺物写真は野津が撮影した。

11. 本書の編集、執筆は福田・舟木の協力を得ながら野津がおこなった。

12. 本書掲載の出土遺物及び、図面、写真などの資料は奥出雲町教育委員会で保管している。

本文目次

第 1 章 調査に至る経緯と経過	1
第 2 章 位置と環境	3
第 1 節 位置と地形	3
第 2 節 周辺の遺跡	3
第 3 章 調査の概要	8
第 1 節 調査区の配置	8
第 2 節 遺跡の層序	8
第 3 節 調査の概要	8
第 4 章 I 区の調査	11
第 1 節 1 層出土遺物	11
第 2 節 2 層の遺構・遺物	12
第 3 節 3 層の遺構・遺物	27
第 4 節 4 層以下の遺構・遺物	46
第 5 章 II 区の調査	78
第 1 節 遺構	78
第 2 節 包含層出土遺物	89
第 6 章 自然科学分析	107
第 1 節 御崎遺跡埋蔵文化財調査に伴う土壤分析結果報告書	107
第 2 節 放射性炭素年代測定結果報告書	109
第 7 章 まとめ	114

挿 図 目 次

第 1 図	御崎遺跡位置図	2	第 40 図	SD01 石・遺物出土状況(1)	57
第 2 図	周辺の遺跡	4	第 41 図	SD01 石・遺物出土状況(2)	58
第 3 図	御崎遺跡区割図	9	第 42 図	SD01 石・遺物出土状況(3)	59
第 4 図	トレンチ 2・トレンチ 8 上層図	10	第 43 図	SD01 石・遺物出土状況(4)	60
第 5 図	I 区 1 層出土遺物	11	第 44 図	SD01 実測図	61
第 6 図	I 区 1 層下面遺構配置図	13	第 45 図	SD02 実測図	64
第 7 図	SK02・SK03 遺構・SK01・SK05 遺構・遺物実測図	14	第 46 図	SD02 遺物出土状況	65
第 8 図	SK04・SX12・SK26 遺構実測図	15	第 47 図	SD06 実測図・遺物出土状況(1)	66
第 9 図	I 区 2 層遺構配置図	17	第 48 図	SD06 遺物出土状況(2)	67
第 10 図	SX07 実測図	18	第 49 図	SD01 出土遺物実測図(1)	68
第 11 図	SK15・SK17・SK18 遺構 ・出土遺物実測図	20	第 50 図	SD01 出土遺物実測図(2)	69
第 12 図	SX40・SX41・SX46・SX47・SX48・SX49 ・SX51・SX55・SK14・SK16・SK23 実測図	21	第 51 図	SD01 出土遺物実測図(3)	70
第 13 図	SX38・SX39・SX42・SX43・SX44 実測図	22	第 52 図	SD01 出土遺物実測図(4)	71
第 14 図	I 区 2 層出土遺物出土状況	24	第 53 図	SD01 出土遺物実測図(5)	72
第 15 図	I 区 2 層出土遺物	25	第 54 図	SD02 出土遺物実測図(1)	73
第 16 図	I 区 2 層出土遺物(2)	26	第 55 図	SD02 出土遺物実測図(2)	74
第 17 図	I 区 3 層遺構配置図	28	第 56 図	SD06 出土遺物実測図	75
第 18 図	SB01 実測図	30	第 57 図	ハイカ層・耕土中出土遺物実測図	76
第 19 図	SB02 実測図	31	第 58 図	II 区 2 層遺構配置図	79
第 20 図	SB03 実測図	32	第 59 図	SK21 実測図	80
第 21 図	SD04 実測図	33	第 60 図	SK21 出土遺物実測図	80
第 22 図	SD05 実測図	34	第 61 図	SX53 実測図	81
第 23 図	SD06 実測図	35	第 62 図	SK20 実測図	82
第 24 図	SX08・SX15・SX20・SX27 遺構 ・SX07 遺構・遺物実測図	37	第 63 図	SX52 実測図	83
第 25 図	SX28・SX29・SX32・SX33・SX36 実測図	38	第 64 図	SK19 実測図	83
第 26 図	SK06・SK07・SK08・SK09・SK10 ・SK13 実測図	40	第 65 図	SK22 実測図	80
第 27 図	SK11・SK12 実測図	42	第 66 図	SD03 実測図	83
第 28 図	土器群 1 実測図	43	第 67 図	S101 実測図	85
第 29 図	SB01・SB05 出土遺物実測図	45	第 68 図	KD01 実測図	86
第 30 図	I 区 3 層出土遺物実測図(1)	47	第 69 図	SK25 実測図	86
第 31 図	I 区 3 層出土遺物実測図(2)	48	第 70 図	SX57 実測図	86
第 32 図	I 区 3 層(3)・土器群 1 出土遺物実測図	49	第 71 図	SX59 実測図	86
第 33 図	I 区 3 層出土遺物実測図(4)	50	第 72 図	SK24 実測図	87
第 34 図	I 区 3 層中～下層遺構配置図	51	第 73 図	SK24 出土遺物実測図	88
第 35 図	SG01・河原石実測図	52	第 74 図	SD07 遺構・遺物実測図	90
第 36 図	SG01 実測図	53	第 75 図	排溝塗跡実測図	91
第 37 図	SG01 出土遺物実測図	54	第 76 図	排溝塗跡出土遺物実測図(1)	92
第 38 図	I 区 4 層遺構配置図	55	第 77 図	排溝塗跡出土遺物実測図(2)	93
第 39 図	SD01 遺構挿図	56	第 78 図	II-2 区 3 層下面遺構配置図	94

第85図	II-2区3層出土遺物実測図(5)	102	第88図	II-2区3層出土遺物実測図(8)	105
第86図	II-2区3層出土遺物実測図(6)	103	第89図	自然科学分析サンプル採取遺構図	113
第87図	II-2区3層出土遺物実測図(7)	104			

表 目 次

表1 周辺の遺跡	5	表4 遺構観察表(SX)	119
表2 SB・SI・SG・SD 計測表	117	表5 遺物観察表	121
表3 遺構観察表(SK)	118		

図 版 目 次

全景写真	御崎遺跡調査終了時(真上から)	116
図版1	御崎遺跡全景(北西から) 上:調査前 下:調査後	
図版2	T2断面写真 T8断面写真	
図版3	SK01 SK02 SK03	
図版4	SK04・SX12集石状況 SK04・SX12完掘状況 SK05完掘状況 SK26検出状況	
図版5	SK14完掘状況 SK15完掘状況 SK16半裁状況 SK17完掘状況 SK18完掘状況	
	SK18完掘状況 SX38半裁状況 SX39半裁状況 SX40完掘状況	
図版6	SB07完掘状況 SX41完掘状況 SX42完掘状況 SX43半裁状況	
	SX44完掘状況 SX46完掘状況 SX47完掘状況	
図版7	SX48完掘状況 SX49完掘状況 SX51完掘状況	
図版8	SB01完掘状況 SB02完掘状況	
図版9	SB03 SB04完掘状況	
図版10	SB05完掘状況 SB06完掘状況	
図版11	SX07半裁状況 SX28半裁状況 SX15完掘状況 SX29半裁状況 SX20完掘状況	
	SX32完掘状況 SX27半裁状況 SX33半裁状況 SX36完掘状況	
図版12	SK06石出土状況 SK07石出土状況 SK08完掘状況 SK09半裁状況 SK10完掘状況	
図版13	SK13半裁状況 SK11石出土状況 SK12石出土状況 上器群1検出状況	
図版14	SG01完掘状況(北側から) SG01出土遺物 SG01完掘状況	
図版15	SD01検出状況 SD01出土遺物 SD01完掘状況	
図版16	SD02検出状況 SD02遺物出土状況 SD02完掘状況	
図版17	SD06検出状況 SD06遺物出土状況 SD06完掘状況	
図版18	SK21・SK22 SX53 SX20	
図版19	SK19半裁状況 SD03検出状況 SX52完掘状況	

図版 20	S101 完掘状況	KD01 完掘状況	SD07 完掘状況	SD07 遺物出土状況
図版 21	SK24 遺物出土状況	排滓場跡検出状況	楕円津出土状況	
図版 22	SX57 半裁状況	SX58(S101柱穴)環掘状況	SX59 篠掘状況	
図版 23	調査指導	体験学習	作業風景	
図版 24	II-1 区完掘状況	II-2 区完掘状況		
図版 25	I 区 1 層出土遺物	SK01 出土遺物	SK05 出土遺物	
図版 26	SK15・SK17・SK18 出土遺物	I 区 2 層出土遺物(1)		
図版 27	I 区 2 層出土遺物(2)			
図版 28	SX07 出土遺物	SB01 出土遺物	SB05 出土遺物	
図版 29	I 区 3 層出土遺物(1)			
図版 30	I 区 3 層出土遺物(2)			
図版 31	I 区 3 層出土遺物(3)	SG01 出土遺物		
図版 32	SD01 出土遺物(1)			
図版 33	SD01 出土遺物(2)			
図版 34	SD01 出土遺物(3)			
図版 35	SD01 出土遺物(4)			
図版 36	SD02 出土遺物(1)			
図版 37	SD02 出土遺物(2)			
図版 38	SD06 出土遺物(1)			
図版 39	SD06 出土遺物(2)			
図版 40	ハイカ層出土遺物	排水中出土遺物		
図版 41	SK21 山土遺物	SK24 出土遺物		
図版 42	SD07 出土遺物	排滓場跡出土遺物		
図版 43	II 区黒色土出土遺物(1)			
図版 44	II 区黒色土出土遺物(2)			
図版 45	II 区黒色土山土遺物(3)			
図版 46	II 区黒色土山土遺物(4)			
図版 47	II 区黒色土出土遺物(5)			
図版 48	II 区黒色土出土遺物(6)			
図版 49	II 区黒色土出土遺物(7)			
図版 50	II 区黒色土出土遺物(8)			
図版 51	II 区黒色土出土遺物(9)			

挿絵目次

3D 画像(1)	54
3D 画像(2)	62

第1章 調査に至る経緯と経過

御崎遺跡は、先年の島根県埋蔵文化財調査センターの範囲確定調査により、散布地として約3300 m²が調査対象とされた地で、斐伊川が三成の街を抜け、大きく西へ曲り蛇行を繰り返す最初の右岸で、矢谷集落の南端に位置する。

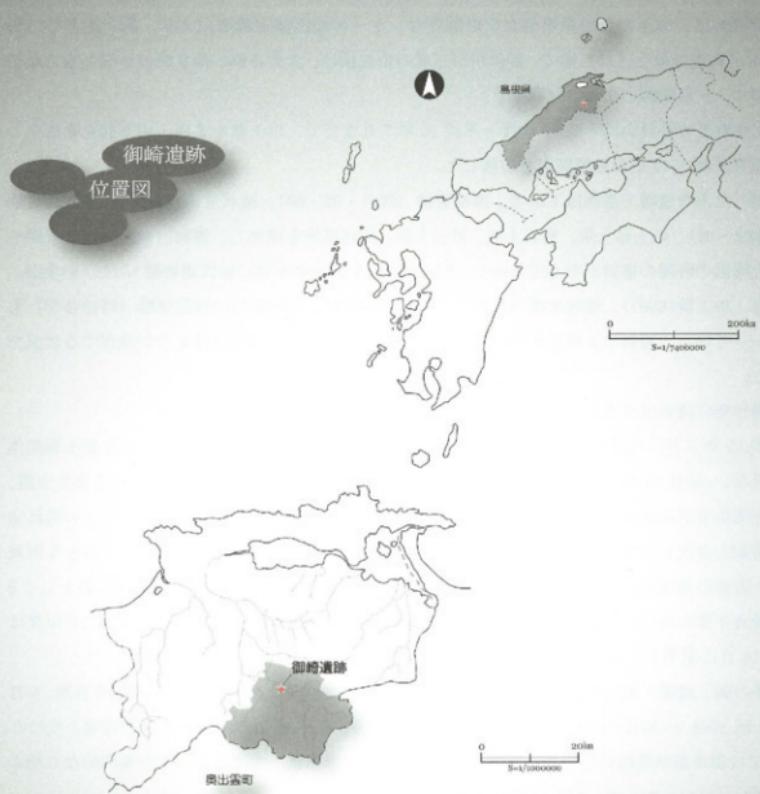
奥出雲町教育委員会は平成19年度と平成20年7月まで、川上部をI区、川下部をII区とした該調査区域3300 m²の発掘調査を実施した。

検出した主な遺構・遺物はI区で、溝状遺構(SD01・02・06)、池状遺構(SG01)、掘立柱建物跡(SB01~07)、粘土貼土坑、集石土坑、ピット群、流路跡等を検出し、遺物は弥生時代終末期～古式土師器の時期の遺物が中心であった。II区では弥生時代終末期の堅穴建物跡(S101)を検出。その他、加工段(KD01)、溝状遺構(SD07)、土坑、旧河原跡、精練鍛冶の排滓場跡(再結合溝)も見つかっている。遺物は3層黒色土に縄文時代後期中葉～中・近世陶磁器までが混在する状況であった。

現場作業の流れは次のようにある。

平成19年5月には空中撮影を行なった。そして、5月14日よりI区を重機により表土掘削作業を行ない、同月21日より人力掘削による本格的な調査を開始した。掘下げ後間もなく弥生土器、古式土師器等が確認され遺構の存在を思わせたが、何れも遺物包含層はレベル上位からの流れ込みで時期も混在しており、遺構の時期を特定するのが非常に困難であった。6月に入るとI区東側より近世の遺構等が相続いで見つかった。8月には仁多中学校3年生3人が、職場体験として5日間調査作業を行なった。11月に入るとI区と併行してII区の調査を開始した。平成19年度は12月14日に現場を一旦終え、次年度に900 m²分調査を行なうこととした。

冬季の間、遺構・遺物の記録・成果を把握、集計し、次年度は4月8日から現場を再開。5月にはI区SD01とSG01の3Dレーザー測量図化を行なう。6月19日には現地で調査指導を受けた。25日には調査最終段階の空中撮影を行ない、7月にはII区黒色土中の再結合溝を専門的な立場から見てもらった。そして、7月17日に作業を終了した。



第1図 御崎遺跡位置図

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

御崎遺跡は島根県仁多郡奥出雲町三成に所在し、世界測地系 X=-87950m, Y=75900m (日本測地系で X=-88289m, Y=76130m) 地点が遺跡のほぼ中心にあたる。そしてこれは北緯 $35^{\circ} 12' 04''$ 、東經 $133^{\circ} 00' 10''$ に相当する。

本遺跡は、斐伊川が三成の街を抜けると大きく西へ曲り、交互に狭隘な谷地形の両岸を削りながら強く折曲した流れとなっているところで蛇行を繰返す最初の右岸、矢谷集落南端の水田(I区)と畑地(II区)に所在する。遺跡は川からの比高 3~10m 程にあり、標高は 221~228m である。水田の中央部は近年の圃場整備により、上下二段に大きく改変されているが、遺跡東部分は圃場整備が為されておらず、棚田となっていた。なお、棚田に接する山は矢谷古城山城跡である。

第2節 周辺の遺跡

奥出雲町御崎遺跡(1)は船通山に源を発する斐伊川本流の右岸に位置する。斐伊川は出雲地方のほぼ中央を北流し、下流部では山陰地域最大級の沖積平野を形成し、宍道湖へ至る。この流れの中・上流域の遺跡の様相は、近年の尾原ダム建設に伴う発掘調査によって新たな資料が増加し、多くの事が明らかになってきている。以下、周辺の遺跡について概観する。

【旧石器時代】 奥出雲市、奥出雲町周辺でこれまで確認されていなかったが、近年、原田遺跡(14)で後期旧石器時代の遺物・遺構が数多く発見され一躍注目を集めている。4千点もの石器と 60 基の礎群、1 基の上坑等が確認されている。

【縄文時代】 元々、斐伊川中・上流域は縄文時代の遺跡が多く分布する地域である。この地域で最も古い縄文土器は、原田遺跡や川平Ⅰ遺跡(4)、寺宇根遺跡(85)から出土した早期の押型文土器である。前期の土器は北原本郷遺跡(13)、川平Ⅰ遺跡、寺宇根遺跡で、中期の土器は、平田遺跡(21)や垣ノ内遺跡(5)で出土している。川平Ⅰ遺跡では縄文時代早期以降の土坑も検出されている。縄文時代後期には、平田遺跡、下鴨倉遺跡(22)、暮地遺跡(17)、林原遺跡(16)などで多数の土器や土坑、土器埋設遺構、土偶が見つかっているほか、寺宇根遺跡では 8 の字状の配石遺構や県内でも希少な装身具である双脚状石製品が見つかっている。晩期の遺跡も多く、家の後Ⅱ遺跡(12)、原田遺跡等で配石土坑・堅穴建物・土器埋設遺構の他、線刻彫や石棒といった呪具や勾玉が出土している。土器埋設遺構は、これまで埋壺と呼称してきた暮地遺跡などでも知られていたが、尾原ダム建設に伴う発掘調査によって検出数が増加し、斐伊川中流域で特徴的な遺構となりつつある。

【弥生時代】 縄文時代の遺跡と比べると数そのものが少ないが、平田遺跡では、終末期の堅穴建物跡から 4 基の鍛冶炉が検出され、鐵器工房であろうとされている。垣ノ内遺跡では中期後葉

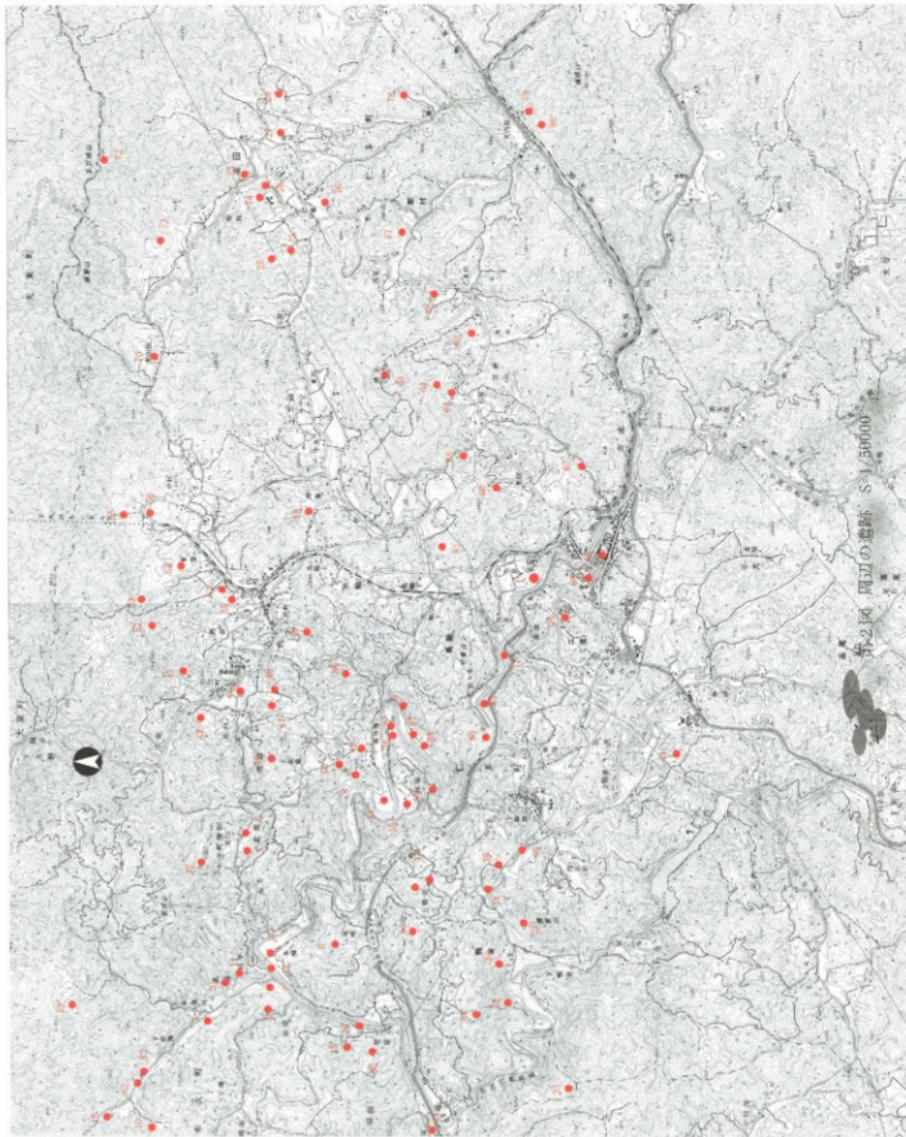


表1 周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	御崎遺跡		35	光善寺古墳	古墳	69	三成前治里小路遺跡	製鉄遺跡
2	尾白Ⅰ遺跡	散布地	36	芝原遺跡	製鉄遺跡	70	奥山田遺跡	散布地
3	尾白Ⅱ遺跡	房塚跡	37	六觀古墳群	古墳	71	牛軒岩屋古墳	古墳
4	川平Ⅰ遺跡	住居跡・散布地	38	比久尼原横穴群	横穴	72	鍋灰山城跡	城跡
5	蛭ノ内遺跡	集落跡	39	どけや古墳	古墳	73	宮の前遺跡	散布地
6	挿ヶ岬遺跡	製鉄遺跡	40	在店城跡	城跡	74	鶴木遺跡	散布地
7	家の後Ⅰ遺跡	散布地	41	八頭塚横穴群	横穴	75	カネツキ免耕跡	製鉄遺跡
8	殿ヶ迫横穴墓群	横穴	42	佐佐・原姫跡	製鉄遺跡	76	仁多郡街跡	郵便跡
9	時仏山横穴墓	横穴	43	金子松原跡	製鉄遺跡	77	コフケ横穴	横穴
10	下布施横穴墓群	横穴	44	中山遺跡	散布地	78	金床横穴	横穴
11	宮ノ脇遺跡	散布地	45	円満寺遺跡	寺院跡・散布地	79	仏和魚式部墓	古墳
12	家の後Ⅱ遺跡	散布地	46	佐白城跡	城跡	80	大内原Ⅰ基盤跡	塙跡
13	北原本郷遺跡	散布地	47	上山施塚横穴群	横穴	81	須原遺跡	古墳・横穴・植物跡
14	原田遺跡	集落跡・古墳	48	上布施遺跡	散布地	82	ゴマボリ跡跡	製鉄遺跡
15	前田遺跡	散布地	49	すげた横穴群	横穴	83	寺田Ⅰ遺跡	製鉄遺跡
16	林原遺跡	散布地	50	水手城跡	城跡	84	小原上遺跡	城跡
17	草戸塚跡	散布地・住居跡	51	林原古墳	古墳	85	寺半原遺跡	塙地・住居跡
18	桔木ヶ谷鉢遺跡	製鉄遺跡	52	三出平古墳	古墳	86	福屋遺跡	散布地
19	上坂ノ内たら跡	製鉄遺跡	53	穴觀音古墳	古墳	87	家の脇Ⅰ遺跡	散布地
20	家の上遺跡	鰐蛇遺跡・製鉄遺跡	54	門屋遺跡	散布地	88	家の脇Ⅱ遺跡	散布地
21	平田遺跡	散布地・製鉄遺跡	55	庄田跡跡	製鉄遺跡	89	鬼ヶ谷遺跡	散布地
22	下勝倉遺跡	散布地	56	豊の前古墳	古墳			
23	三沢塚跡(鷲倉城跡)	城跡	57	長嶋寺遺跡	散布地			
24	丸子山古墳群	古墳	58	金原か跡	製鉄遺跡			
25	カネツキ免耕跡	散布地	59	下鷲倉大師跡跡	製鉄遺跡			
26	需樂寺古墳	古墳	60	須我井山城跡	城跡			
27	高田庵寺	寺院跡	61	右原遺跡	住居跡			
28	石屋古墳	古墳	62	善勝寺跡	寺院跡			
29	下布施麓の上鉢跡	製鉄遺跡	63	開善寺跡	寺院跡			
30	右塗遺跡	散布地	64	善勝寺跡	寺院跡			
31	下布施山城跡	城跡	65	村尾吉宗宅向横穴	横穴			
32	尾白横穴群	横穴	66	若原城跡	城跡			
33	戈の原遺跡	散布地	67	黒田遺跡	散布地			
34	松木山城跡	城跡	68	郡屋敷古墳	古墳			

～古墳時代前期の堅穴建物跡や掘立柱建物跡が合計 16 棟確認され、加飾性の強い「塙町系」の土器群が検出された。また、北原本郷遺跡では中期前葉～古墳時代初頭の堅穴建物跡が見つかっており、集落構造を復元しする資料が増加している。墓地遺跡では中期後葉の堅穴建物跡が 2 棟検出され、うち 1 棟は焼失建物であった。

【古墳時代】 周辺の斐伊川中流域には古墳時代や中期の古墳は明確ではないが、後期には横穴式石室をもつ古墳が見られるようになる。原田古墳は、墳形や規模は不明であるが、横穴式石室から双龍環頭大刀、馬具一式、翡翠製勾玉などの玉類や鉄器、多数の須恵器が出土し、畿内との密接な関係が窺われる。このほか横穴式石室をもつ円墳、穴観 1 号墳（37）や前方後方墳で横穴式石室をもつ穴観 2 号墳（37）がある。この地域の横穴墓は平面縱長長方形で、断面が丸みのある三角形のものが多い。下布施横穴墓群（10）では装飾大刀を副葬した横穴墓が確認されている。**殿ヶ迫横穴墓群**（8）、**時仏山横穴墓**（9）も発掘調査され、前者では被葬者の骨折した脚部に刷木をした痕跡を確認した横穴墓があり、後者では被葬者が伏臥伸展位で埋葬された状態で見つかっている。集落遺跡としては古墳時代前期初頭の垣ノ内遺跡や平田遺跡が挙げられる。垣ノ内遺跡では後期から再び集落が営まれ、9 世紀まで継続する。**家ノ脇 II 遺跡**（88）では後期の集石と土器溜りが確認されており、水辺の祭祀跡もしくは土器廃棄場所と考えられる。

【奈良・平安時代】 寺田 I 遺跡（83）、原田遺跡では鍛冶遺構が、横ヶ堀遺跡（6）では平安時代の製鉄関連遺物が確認されている。寺田 I 遺跡では鋳造関係の遺物も出土しており、遺構や遺物のあり方から官営的な工房の可能性があるとされる。また、亀ヶ谷遺跡（89）では平安時代後期の製鉄跡が検出されている。家の上遺跡（20）、円満寺遺跡（45）では土馬や手捏土器が見つかっており、これらは水に関わる祭祀跡と考えられる。

【中・近世】 集落遺跡としては、家の上 II 遺跡や宮ノ脇遺跡（11）から中世の掘立柱建物跡が確認された。また前田遺跡（15）では室町時代の貿易陶磁がまとめて出土し、集落の性格を考える上で注目される。寺院跡である円満寺遺跡からは青白磁梅瓶や青磁が出土している。この周辺は三沢氏が勢力をもっていた地域で、居城である三沢城（23）はよく知られている。独立丘陵に近い形態の鴨倉山（要害山）に位置する山城である。水ノ手城跡（50）、下布施氏館跡（31）では発掘調査で大堀切や郭、通路状遺構が確認された。中世前半の製鉄遺跡は上垣内たたら跡（19）、枯木ヶ谷鉛遺跡（18）、等で、本床状遺構のみの製鉄炉地下構造が確認されている。原田遺跡では中世の板屋型羽口をもつ精錬鍛冶炉が検出されている。近世になると奥出雲町では絲原家、卜藏家、櫻井家など有力鉄山氏のもと、大規模な高殿たたらが営まれ、鉄生産は飛躍的に増大する。原田遺跡では製鉄に関連したと考えられる掘立柱建物跡が確認されている。**尾白 II 遺跡**（3）では近世以降の炭窯が確認されており、この中には、鉛で使用される大炭を生産した可能性のあるものも見られる。北原本郷遺跡では斐伊川の舟番所の可能性が指摘される建物跡も検出されている。

《参考文献》

- 仁多町教育委員会 『伊賀武社境内横穴墓』2001
- 島根県教育委員会 『増補改訂島根県遺跡地図 I (出雲・隱岐編)』2003
- 島根県教育委員会 『尾白Ⅰ遺跡・尾白Ⅱ遺跡・家ノ脇Ⅱ遺跡3区・川平Ⅰ遺跡 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』2003
- 島根県教育委員会 『家の後Ⅰ遺跡・垣ノ内遺跡 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』2003
- 島根県教育委員会 『家ノ脇Ⅱ遺跡・原田遺跡1区・前田遺跡4区 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4』2004
- 島根県教育委員会 『北原本郷遺跡1 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7』2005
- 島根県教育委員会 『原田遺跡(2) 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8』2006
- 島根県教育委員会 『原田遺跡(4) 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12』2008
- 仁多町教育委員会 『殿ヶ追横穴墓群 西尾社遺跡 鬼ヶ谷遺跡 シベ石遺跡 時弘遺跡 時弘山横穴墓 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』2001
- 仁多町教育委員会 『暮地遺跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書III』2004
- 本次町教育委員会 『平田遺跡 本次町文化財調査報告書 第4章』2004
- 奥出雲町教育委員会 『円鏡寺遺跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』2006
- 奥出雲町教育委員会 『福屋遺跡 水ノ手城跡上井平地区 小堀上遺跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V』2006
- 奥出雲町教育委員会 『寺宇根遺跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI』2008

第3章 調査の概要

第1節 調査区の配置(第3図)

御崎遺跡は斐伊川が三成街を抜け大きく西に曲がり蛇行を繰り返す最初の右岸標高約221～228mに立地する。尾原ダム建設に伴う河川改修工事に係る場所で、調査対象面積は3300m²である。

調査にあたっては地形を勘案し5m間隔で、I区では山側から川側へ1・2・3…、川上から川下へA・B・C…、II区では山側から川側へ1・2・3…、川上から川下へa・b・c…という基準点を設定した。1辺5mのグリッドは、I区では北東側の交点、II区では南東側の交点の名称で呼称（例えば3C）することとした。

第2節 遺跡の層序(第4図)

基本層序はI区は表土・耕作土→黒色土(遺物包含層)→真砂質土→(ハイカ層=部分的に)→川砂(礫)層となる。第4図に御崎遺跡I区のT2、II-2区のT8を掲載している。本報告書の層位はI区は、T2の1層=1層、2層=2層、3-3、4-4層=3層、4-1、4-3=4層としている。

II区は表土・耕作土→黒色土→川砂(礫)層となる。T8の13層が黒色土(遺物包含層)、11層上面にSI01他の遺構群が存在した。また黒色土中で再結合溝を確認した。II区は報告書上、この黒色土遺物包含層を3層、11層を2層とする。

第3節 調査の概要

調査前の状況は、I区は水田、II区は畑地であった。発掘調査は、表土と水田・畑客土を重機掘削した後グリッドを設定し、1層上面から人力による掘り下げを行った。

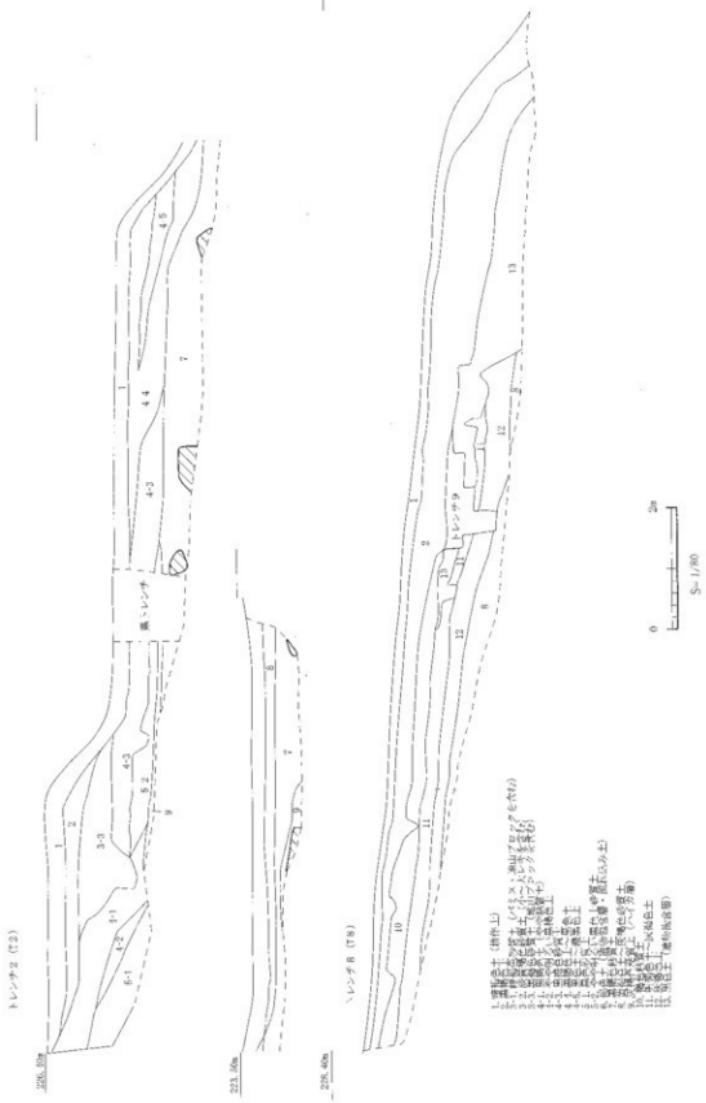
検出した主な遺構・遺物はI区2・3層で溝状遺構(SD01他)、池状遺構(SG01)、掘立柱建物跡(SB01～07)、粘土貼土坑、集石土坑、ビット群、流路跡を検出し、遺物は弥生時代終末期～古式上師器の時期の遺物が中心で、弥生時代中期土器、古墳時代後期の遺物も出土している。ただ、両層とも新旧遺物が混在しており、縄文後晩期土器や中・近世陶磁器も混じる。また、部分的に川砂上層中にハイカ層が認められ僅かながら面的な拡がりを確認した。

II区では弥生時代終末期の竪穴住居跡(SI01)を検出。その他、加工段、溝状遺構、土坑、IH河原跡、精練鍛冶の排滓場(再結合浮)も見つかっている。遺物は黒色土層に縄文時代後期中葉～中世陶磁器までが混在していた。遺物量的には弥生時代終末期～古式上師器の頃にピークがあり、次いで縄文時代後晩期、そして中世という割合である。

I・II区とも断割りTrを入れ下層に遺構・遺物は認められないが、I区では4層まで、II区では黒色土層までとした。

第3図 御崎遺跡区割り図 S=1/1000





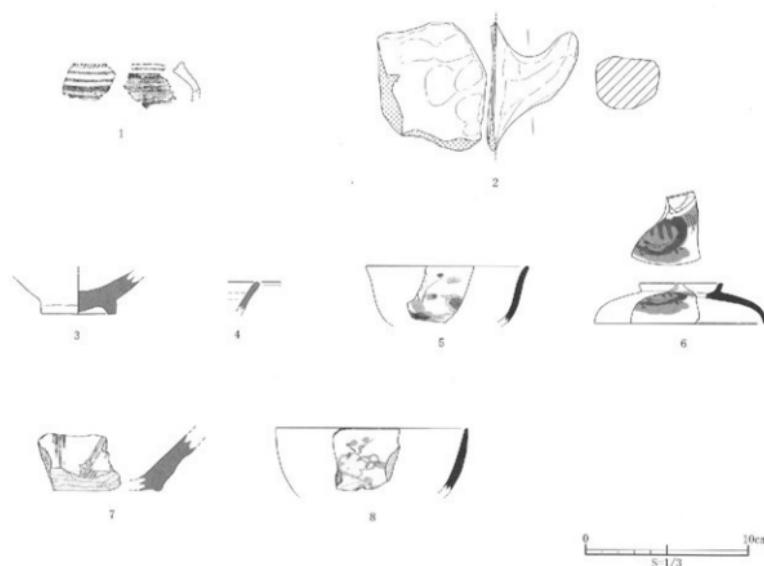
第4図 トレンチ2・トレンチ8土層図 S=1/80

第4章 I区の調査

第1節 1層出土遺物

1層とした遺物は重機掘削した土中に僅かに含まれたもの、または取り残した表面に散在していたもので、弥生土器～近世の陶磁器を含む（第5図）。

1は口縁端部に面を作り、2条の凹線を廻らせ外面には刻みと凹線を施す。IV-2様式の高杯若しくは台付き鉢と見られる。加飾性が高く塙町式の影響が見受けられる。2は土師器、甌の把手で、内外面ともナデ調整。指頭圧痕が顕著である。3は唐津の皿で17世紀以前のものである。オリーブ色の釉薬がかかる。4は李朝の皿。5・6・8はいずれも九州産の磁器で青花文がきれいにコバルトブルーに発色している。近世以降のもの。7は備前の播鉢で室町時代前～中期の品である。



第5図 I区1層出土遺物 S=1/3

第2節 2層の遺構・遺物

ここで遺構として取上げるものは、1層下面で検出された遺構群(第6図)と2層中から検出した遺構群(第9図)である。後者はトレンチ土層観察の際には分層しておらず十層認識のエラーであるかもしれないが、掘下げる過程で検出した遺構群である。また、後世の水田耕作における杭跡と考えられるものについては取上げていない。

(1) 遺構

SK01(第7図)

3Eグリッドに所在し、平面形は長径0.86m、短径0.84mとほぼ正円で、深さ0.4mを測る。断面形は舟形で縁には3~9cmほどの粘土張りをしてあった。上坑内には埋土とともに僅かながら炭と川石が集積された状態で見つかっている。

SK01出土遺物(第7図)

何れの遺物も埋土中からの出土である。1は土師器の頸部で屈曲し、外傾する単純口縁の甕である。2は地元産の陶器で碗若しくは壺型の器と思われる。回転糸切りの底部には墨書きが認められる。“川”であろうか。3は高台のつく香炉と思われる。2・3は19世紀の所産と考えられる。

SK02(第7図)

川側の6Jに位置し、平面形は隅丸五角形状で、長径1.10m、短径1.06m、深さ0.36mを測る。壁で20cmほど、底面で8cmほど粘土張りが為されている。埋土は黄褐色砂質土で遺物は無く時期は不明である。

SK03(第7図)

6Kに位置し、粘土張り部分の平面形は不整形で、長径1.31m、短径1.00m、深さ0.40mを測り、その内側平面形は隅丸方形をなし、上場で径0.52mである。埋土はSK01・SK02同様、黄褐色砂質土で川石が集積した状態であった。粘土張り部分は北側で厚く40~56cm、南側で25cmほどで、底面では8~14cmであった。遺物は無く時期は不明である。

SK05(第7図)

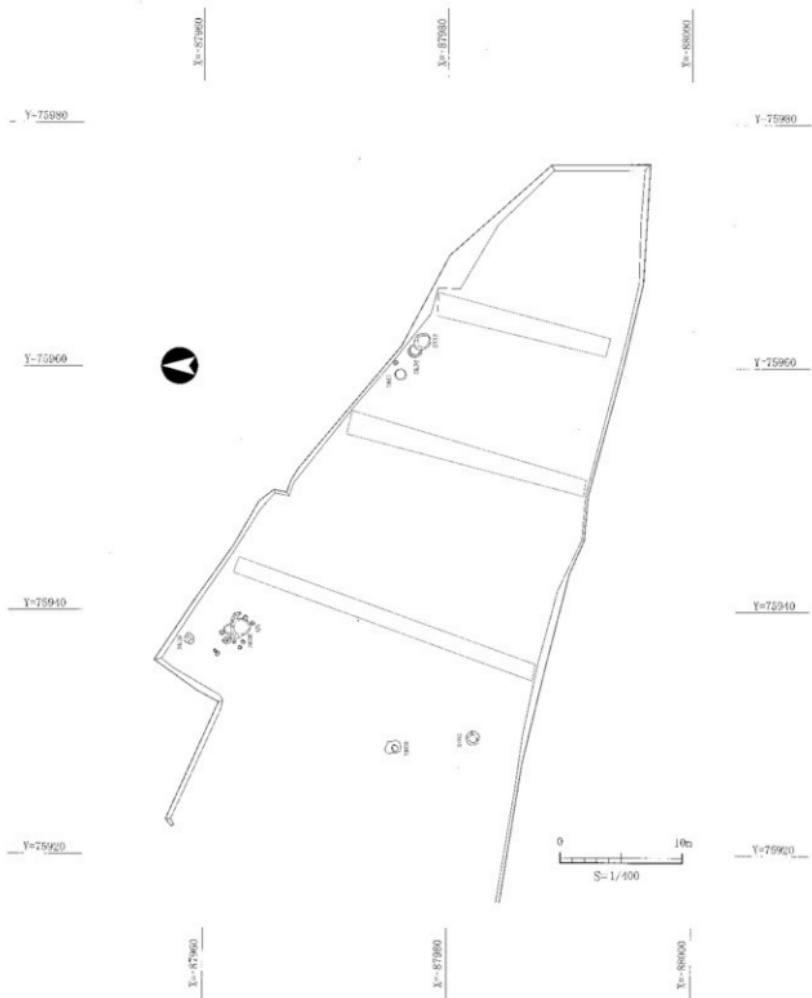
2Jに位置し、平面形は不整形を呈し、長径2.24m、短径1.60m、深さ0.74mを測る。底面はほぼ正円形をしており、直径0.80mである。2・3層に20cm以下の程度の川石を含む。遺物は2・3層中から陶磁器・スラグが出土している。遺物の年代から近世と考えられる。

SK05出土遺物(第7図)

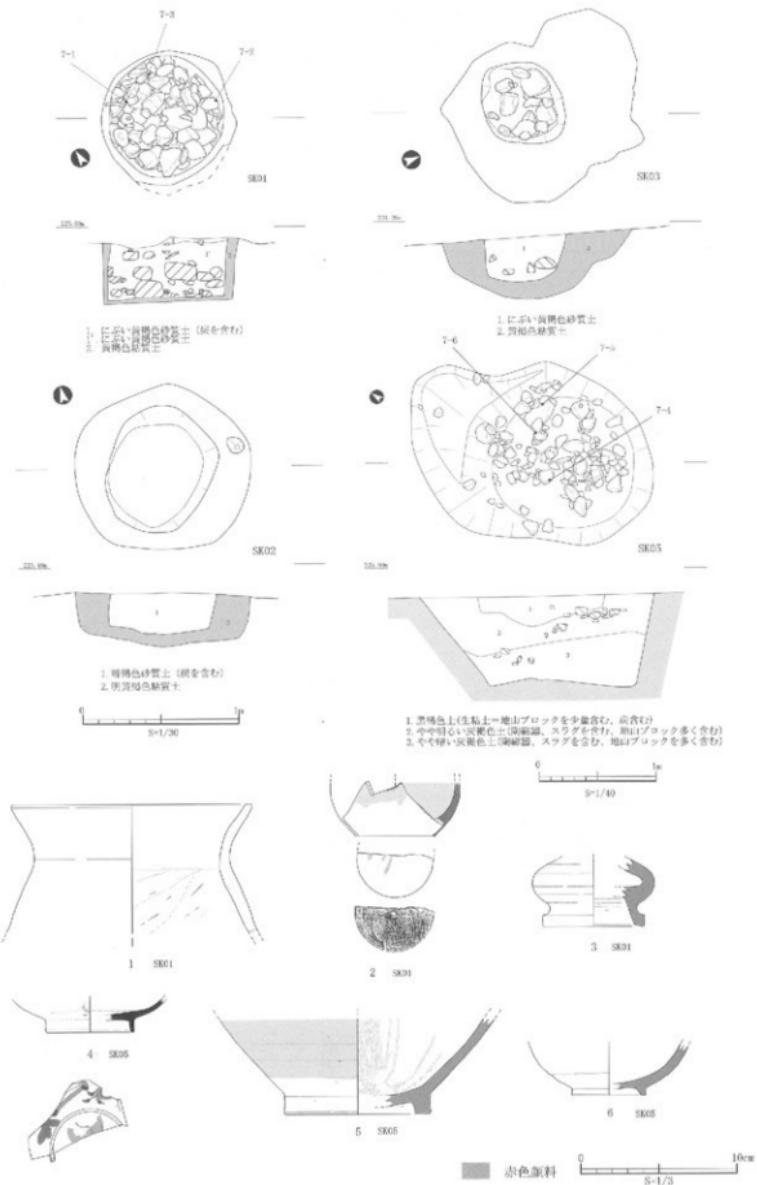
4は青花文を施す磁器である。5は陶器製擂鉢で江戸以降の大衆品である。6は布志名焼の所謂“ばてぼて茶碗”で19世紀の品である。

SK04・SX12(第8図)

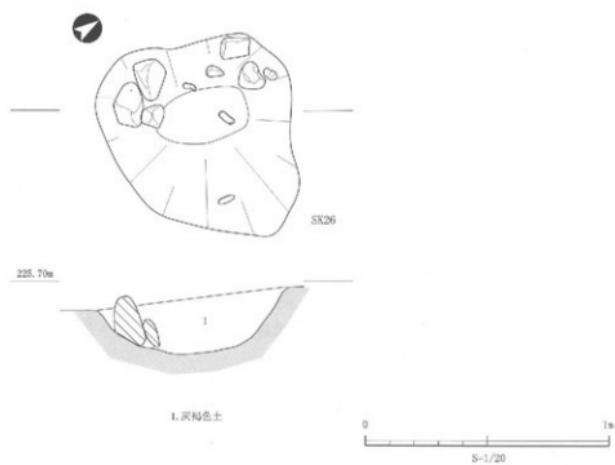
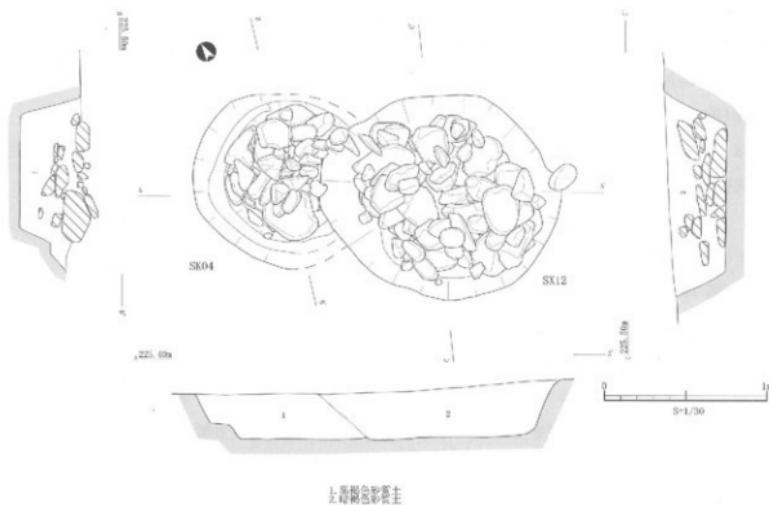
3EのSK01の南東隣りに位置し、切合う形で検出した。平面形はどちらもほぼ正円形をなすもので、SK04は径1.10m、深さ0.30mで壁中腹で僅かに平坦面をつくるものである。SX12は長径



第6図 I区1層下面造構配置図 S=1/100



第7図 SK02・SK03遺構・SK01・SK05遺構・遺物実測図
S=1/30(SK01 02 03)・S=1/40(SK05)・S=1/3(遺物)



第8図 SK04・SX12・SK26遺構実測図 S=1/30 1/20

1.48m、短径1.26m、深さ0.30mを測り、断面形は漏斗状にやや窄まり、底面は平底を呈する形状である。切合いは後者が前者に勝っている。どちらも川石を集積した状態で検出しているが遺物は無く時期は不明である。

SK26(第8図)

IKに位置し、平面形不整な三角形状を呈し、長径0.84m、短径0.79m、深さ0.22mを測る。土坑壁・床面と埋土中に川石が含まれていた。遺物は無く時期は不明である。

以下は2層中から検出した遺構である。

SB07(第10図)

2R・2S・3R・3S・3Tに位置する2間×4間の側柱建物で、平面規模は梁間4.12m、桁行8.11m、床面積32.96m²である。柱間隔は妻側2.05m、平側は不均等であった。柱穴は平面円形で、直径40~50cmとほぼ揃っている印象を受ける。検出面からの深さは15~40cmではらつきがあるが、浅い東側は後世の削平を受けているものと見られる。建物の主軸方向はE-36°→Sをとる。柱穴埋土はいずれの柱穴とも単層で、柱跡や抜き取りの痕跡は確認できていない。

出土遺物は無かった。

SK15(第11図)

3R・4Rに跨るように位置し、平面形は略長方形をなす。東西方向の角が僅かに突出する。規模は長径1.46m、短径0.92m、深さ0.24mを測る。埋土は茶褐色砂質土で若干の炭と1cm以下の砂粒を含む。遺物は埋土中に磁器、複合口縁片、カワラケ等が出土している。土坑は中世以降と考えられる。

SK15出土遺物(第11図)

11-1は磁器皿である。その他複合口縁片、カワラケ等出土しているが、図化できるものはなかった。

SK17(第11図)

2Rに位置し、平面形は不整形で長径1.79m、短径1.07m、深さ0.32mを測る。土坑中央部で二段掘り状となる。埋土中に焼石(角礫を含む)と炭が若干混じる。

SK17出土遺物(第11図)

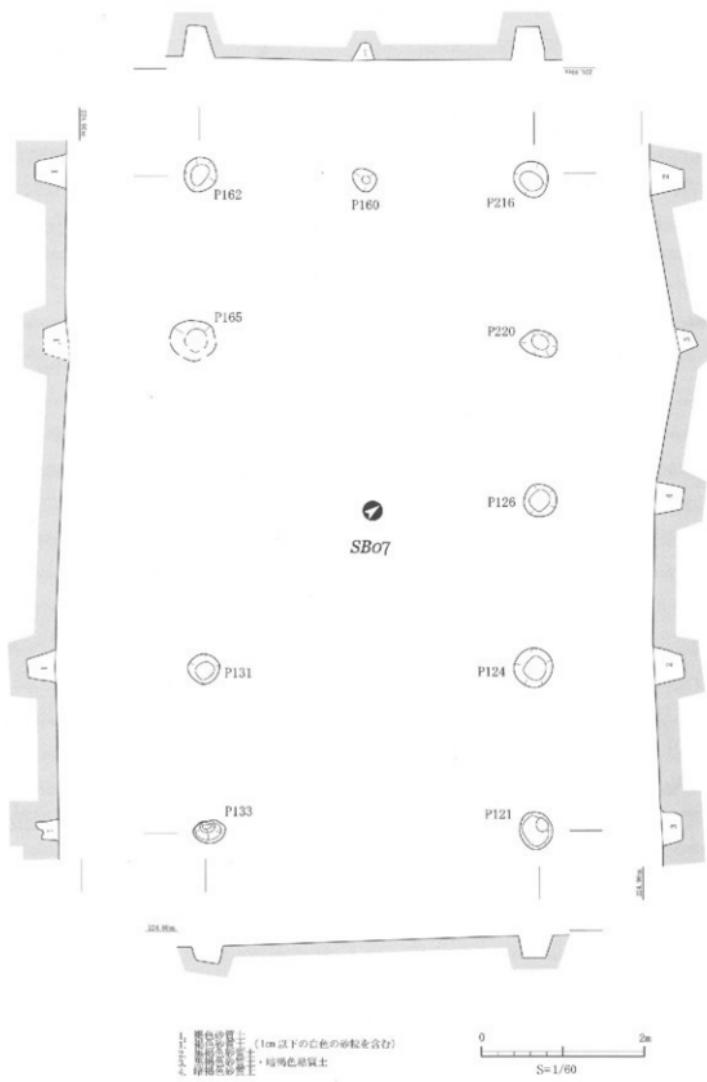
図示した11-2は内外面ナデ、黒褐色を呈す弥生土器の注口部分である。この他図示しなかったが江戸以降の播鉢片も出土している。

SK18(第11図)

3Tに位置し、平面形は不整な方形をなし南西側で僅かに突出する。長径1.66m、短径0.80m、深さ14cmを測り、中央部分でさらに落ち込みがある二段掘り状になっている。埋土には炭を多く含み、流れ込みと思われる繩文土器片が混入していた。底面近くで土壤分析用サンプルをとっている。詳細は第6章に譲る。



第9図 I区2層造構配置図 S-1/300



第10図 SB07実測図 S=1/60

SK18 出土遺物(第 11 図)

-1 は縄文土器で内面はナデ、外面の沈線区画内に擬似縄文を施す深鉢である。後期中葉と考えられる。

SX40・SX41(第 12 図)

どちらも 3R に位置し、SX40 は平面形不整形円形をなし、長径 0.84m、短径 0.42m、深さ 0.42m、SX41 は平面形不整形で、長径 0.80m、短径 0.54m、深さ 0.30m を測る。どちらも断面形は漏斗形で部分的に二段掘り状となる。別遺構として調査したが、本来は同一のプランであったのかもしれない。SX40 には検出表面から 15 cm ほどのレベルで 20 cm ほどの川石を検出している。土師器細片も混入していた。SX41 には遺物は無かった。SX40・SX41 は立地、埋土等を見ても同時期が当たられよう。古墳時代初頭以降と考えられる。

SX46(第 12 図)

3S で SX47 の東に位置し、平面形は卵形で長径 0.54m、短径 0.35m、深さ 0.25m を測る。埋土は SX47 同様暗褐色砂質土で、埋土中にスラグ小塊が含まれていた。

SX47(第 12 図)

3T で SX46 の西側に隣接し、平面形は南側に突出部がみられる長円形で、その南側に僅かな平坦面をもつ。長径 0.52m、短径 0.29m、深さ 0.25m を測る。埋土は単層で暗褐色砂質土で、遺物はなかった。

SX48(第 12 図)

4S に位置し平面形は角張った長円形で、長径 0.70m、短径 0.34m、深さ 0.21m を測る。埋土中から平石を検出している。表面から 10 cm の位置であったが、元々は表面にあった可能性もある。遺物は無く時期は不詳である。

SX49(第 12 図)

4T に位置し、平面形は不整な落花生形をなす細長い形状で、長径 1.10m、短径 0.30m、深さ 0.30m を測る。SX 内二箇所に小ピット状の落込みが認められるが、後世の水田耕作によるものであろうか。埋土は暗褐色砂質土で若干炭を含む。遺物は無かった。

SX51(第 12 図)

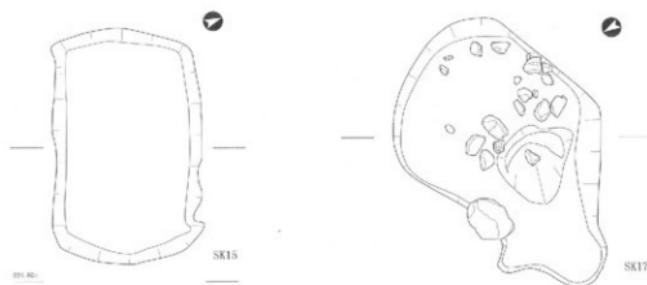
2V に位置し、平面形は落花生形で長径 0.80m、短径 0.55m、深さ 0.35m を測り、断面は二段掘り状をなしていた。遺物は無く、時期不詳である。

SX55(第 12 図)

2T に位置し、SK23 同様他の遺構より若干低めの検出である。平面形は不整形で、長径 0.56m、短径 0.36m、深さ 0.18m を測る。埋土は黒色土で 1 mm 程度の白色砂粒を僅かに含む。遺物は時期不明の細片が 1 点出土している。

SK14(第 12 図)

3Q に位置し、平面形不整形をなし、長径 1.20m、短径 0.68m、深さ 0.40m を測る。断面は中



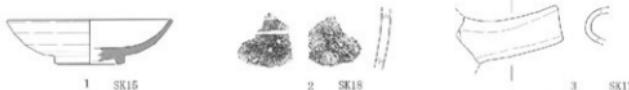
1. 黒褐色砂質土 (少量の炭と1cm以下の中粒を少量含む)

1. 黑褐色土 (褐土色、炭を少含む)



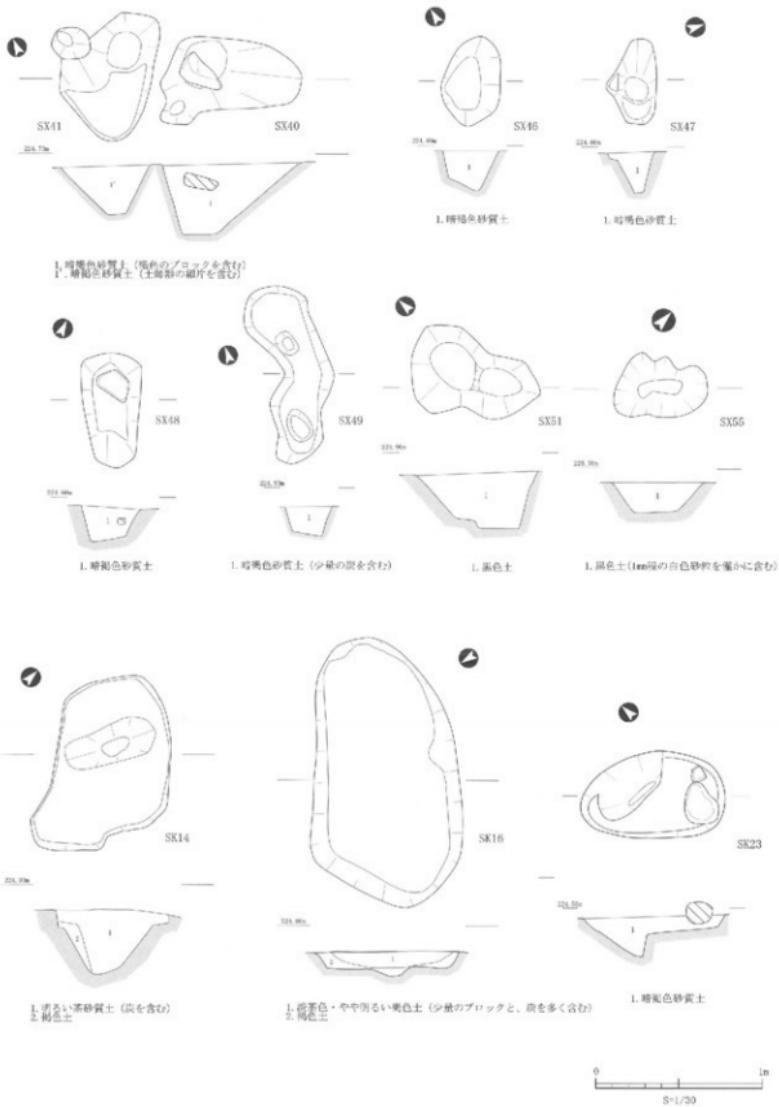
1. 増生砂質土
2. 砂赤褐色砂質土 (炭を含む)
3. 砂赤褐色土 (炭を含む)

0 1m
S-1/30

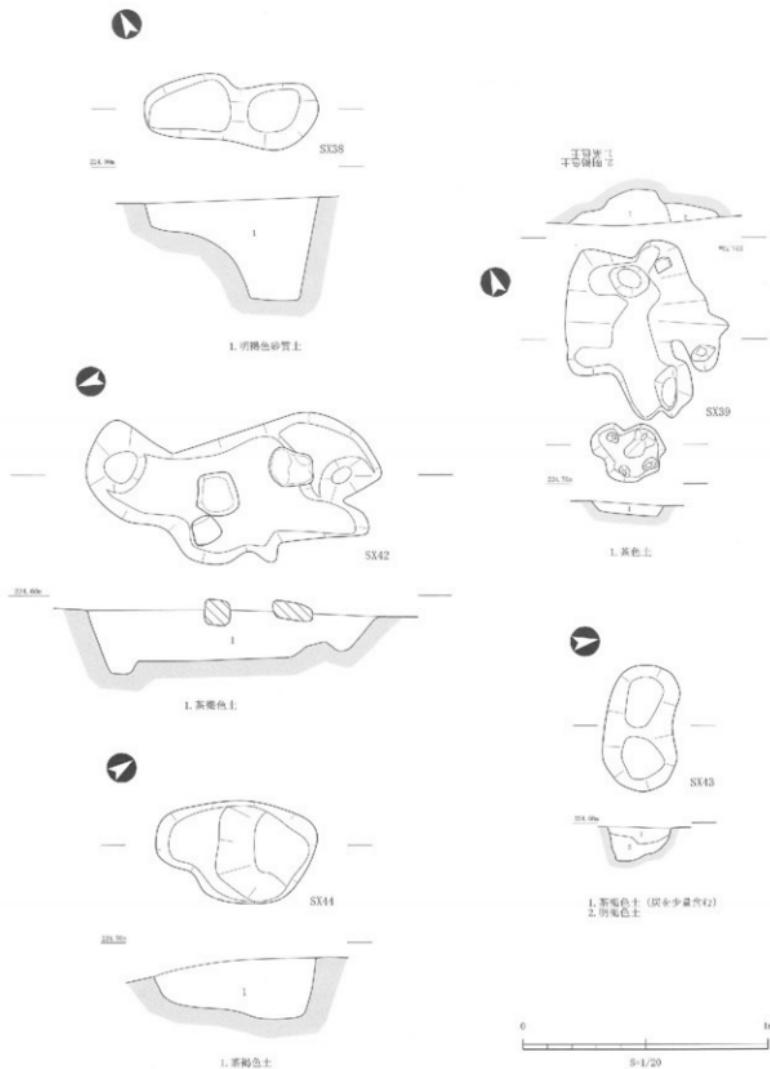


0 10cm
S-1/3

第11図 SK15・SK17・SK18遺構・出土遺物実測図 S=1/3 S=1/30



第12図 SX40・SX41・SX46・SX47・SX48・SX49・SX51・SX55
SK14・SK16・SK23実測図 S=1/30



第13図 SX38・SX39・SX42・SX43・SX44実測図 S=1/20

央部分で二段掘り状となる。埋土には僅かに炭を含む。埋土中から複合口縁片を検出している。遺構は弥生時代末期以降と考えられる。

SK16(第12図)

4QでSX44の西側に位置し、平面形長円形で、長径1.64m、短径0.88m、深さ0.32mを測る。検出表面からは非常に浅く中央部で僅かに凹む。図化できる遺物は無かったが、弥生後半壺片、磁器が出土している。

SK23(第12図)

3Uに位置し、他の2層中検出遺構より若干下からの検出であったが、ここで扱う。平面形は梢円形で、長径0.86m、短径0.54m、深さ0.25mを測り、断面形は北側で二段掘り状をなす。土坑内に20cm以下の川石2個を含む。当時表面からの落込みかもしれない。底面近くで土壤分析のサンプルをとっている。

SX38(第13図)

3Qに位置し、平面形は落花生形をなし、断面は緩やかな二段掘り状を呈す。規模は長径0.70m、短径0.26m、深さ0.42mを測る。埋土は明褐色砂質土層である。遺物は無く時期不詳である。

SX39(第13図)

掘込みは二つあるが、両方をSX39とする。4Qに位置し、平面形はいずれも不整形。北側で長径0.98m、短径0.62m、深さ0.14mを測る。土坑内に20cm以下の小ビットが認められる。いずれにも遺物は無かった。

SX42(第13図)

4R・4Sに跨るように位置し、平面形は不整形で長径1.18m、短径0.51m、深さ0.20mを測る。検出表面で20cmほどの整った平石が3個置かれていた。長軸端はさらに深い落込みがある。埋土は茶褐色土で、遺物は無かった。

SX43(第13図)

3Rに位置し、平面形は落花生形で長径0.52m、短径0.28m、深さ0.14mを測る。1層に若干炭が混じる。遺物はなく時期不詳である。

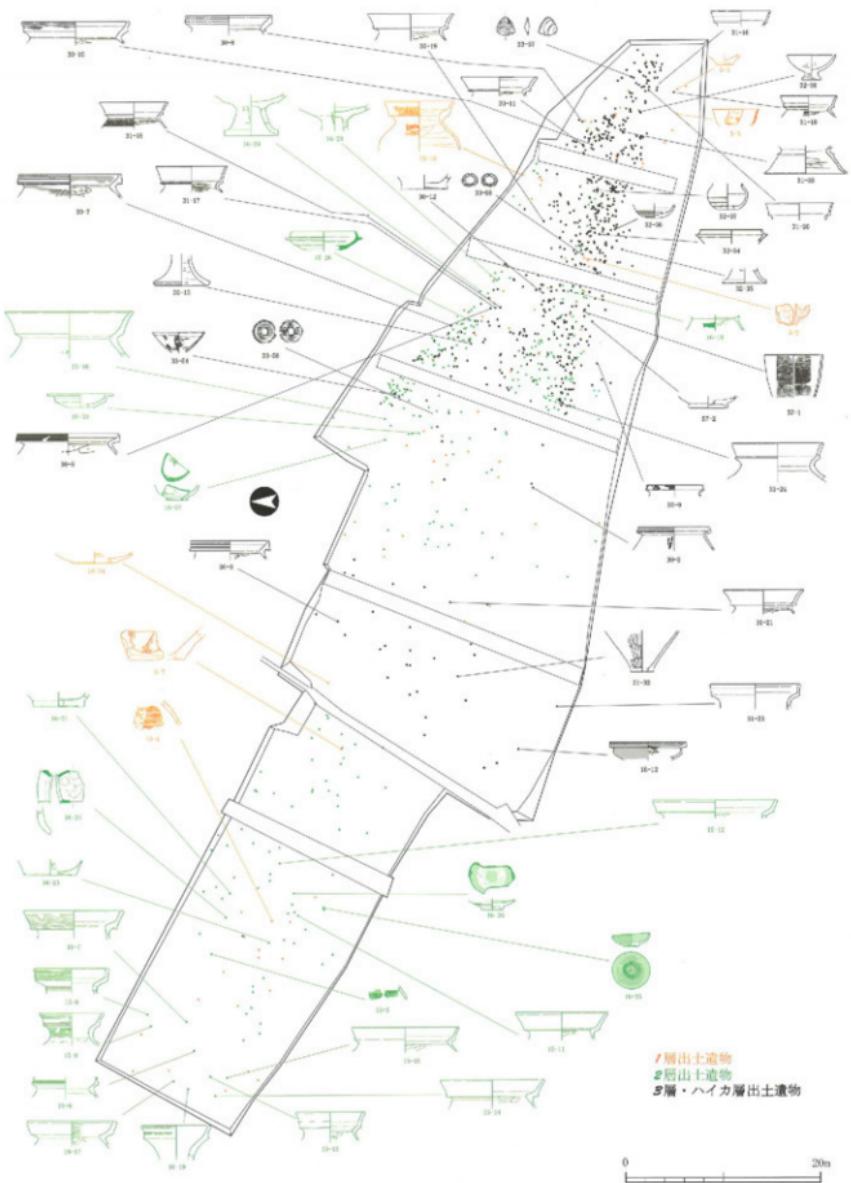
SX44(第13図)

4QのSK16の東、SX39の西に位置する。平面形は不整形で長径0.64m、短径0.42m、深さ0.25mを測る。断面形は南北方向に緩やかに二段掘り状となるものである。遺物は無く時期不詳である。

(2) 2層出土遺物(第15・16図)

1～5は縄文土器である。

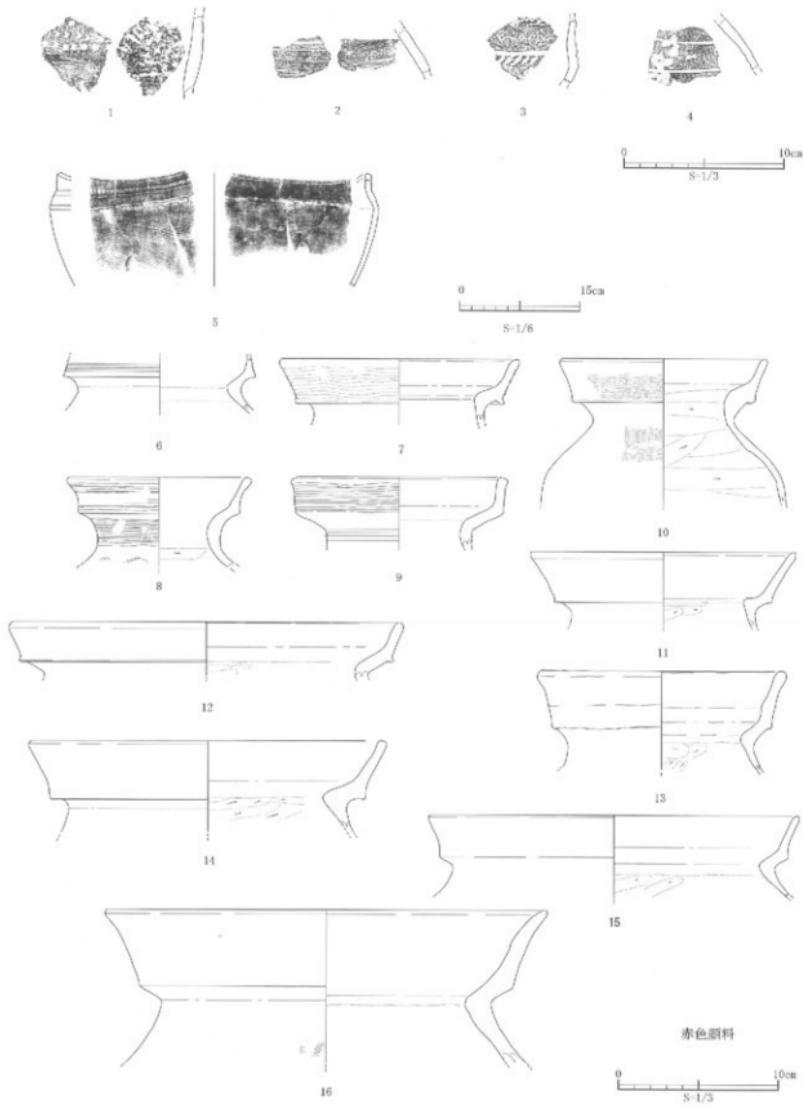
1は粗製深鉢片で、外面に半裁竹管文が見られる。2・4は細めの沈線間に擬似縄文を施す注口若しくは壺形の土器である。3は粗製深鉢胴部片で外面に沈線と刻みを有する。5は口径38.0cm



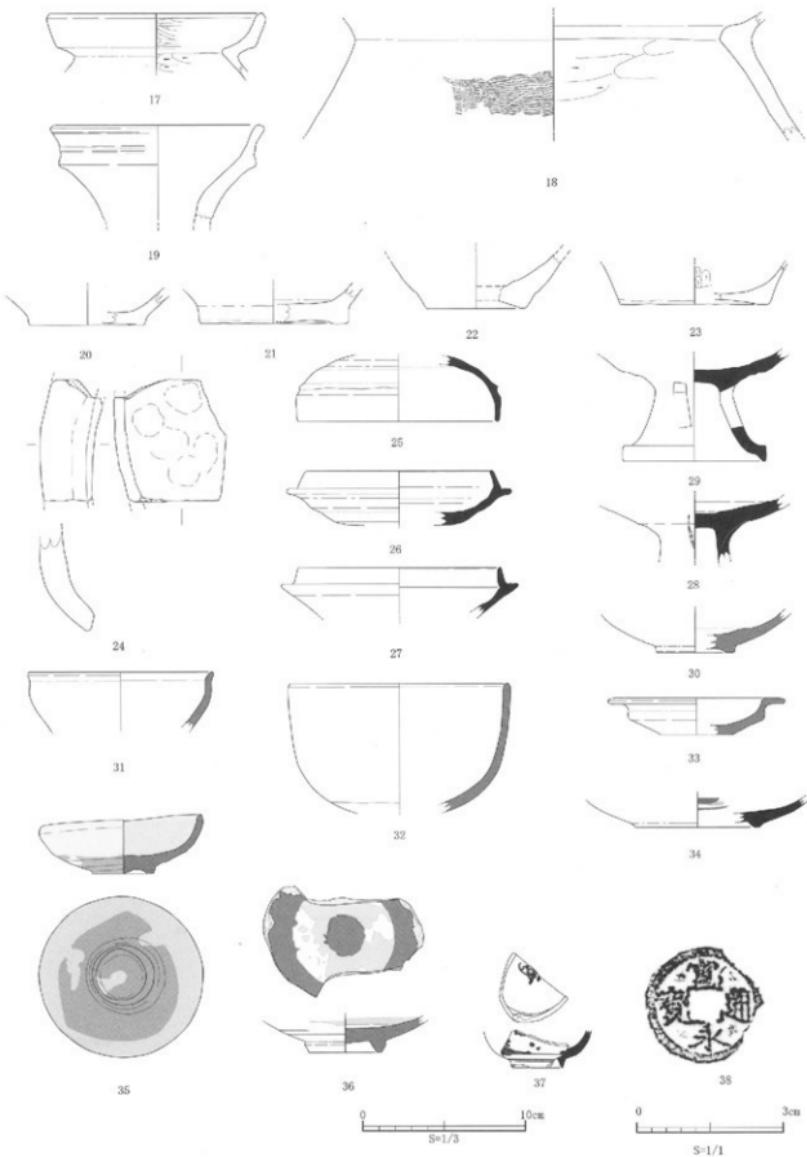
第14図 I区包含層遺物出土状況 S=1/500

1層出土遺物
2層出土遺物
3層・ハイカ層出土遺物

S=1/500



第15図 1区2層出土遺物(1) S=1/3 S=1/6



第16図 I区2層出土遺物(2) $S=1/3$ $S=1/1$

を測る精製の鉢で、内外面を磨く。口縁端部内面には沈線と擬似繩文を施し、外面には二組の沈線帯があり、上の沈線間には巻貝殻頂刺突が、下の沈線間には擬似繩文が見られる。1 は晩期黒上 BI、2~5 は後期中葉以降の回線文系土器である。

6~19 は弥生時代後半から古墳時代前半の七器である。

6~9 は擬凹線が複合口縁部分に施される甕または壺で、8・9 は頸部にも擬凹線が廻り、9 の外面には赤色顔料が塗布される。11~19 は複合口縁部分に擬凹線が見られないもの。いずれも内面頸部以下は削り、頸部以上はナデる。17 の内面の口縁から頸部までは磨き痕が顕著である。複合口縁部分の屈曲もかなり退化傾向にある。19 は器台若しくは壺の口縁部であろう。

20~23 は底部で、20・21 は平底、22・23 は上げ底である。積極的根柢はないが、胎土・色調等より、上記の 6~19 の遺物の時期の範疇であろう。

24 は土師器、壺の焚き口部分である。

25~29 は須恵器である。

25 は坏蓋で天井部は削る。内面口縁近くの段は消滅している。26・27 は坏身。立ち上がりは 26 はやや内傾気味、27 は反り気味である。28・29 は高杯で、いずれも 2 方向に透かしを有するが、台形状の透かしのもの(28)と線刻状のもの(29)がある。これらは出雲 4~5 期である。

30~37 は陶磁器である。30 は唐津の皿、31 は天目茶碗、32 は地元産の“ぼてぼて茶碗”。33 も布志名の皿で 19 世紀の品。34~37 は九州系のもので、34 は 17 世紀前半の古伊万里皿。35・36 は唐津の皿。37 は碗である。

38 は寛永通宝である。字体から古寛永の 1 期の品で 17 世紀中頃の年代が与えられる。

第 3 節 3 層の遺構・遺物

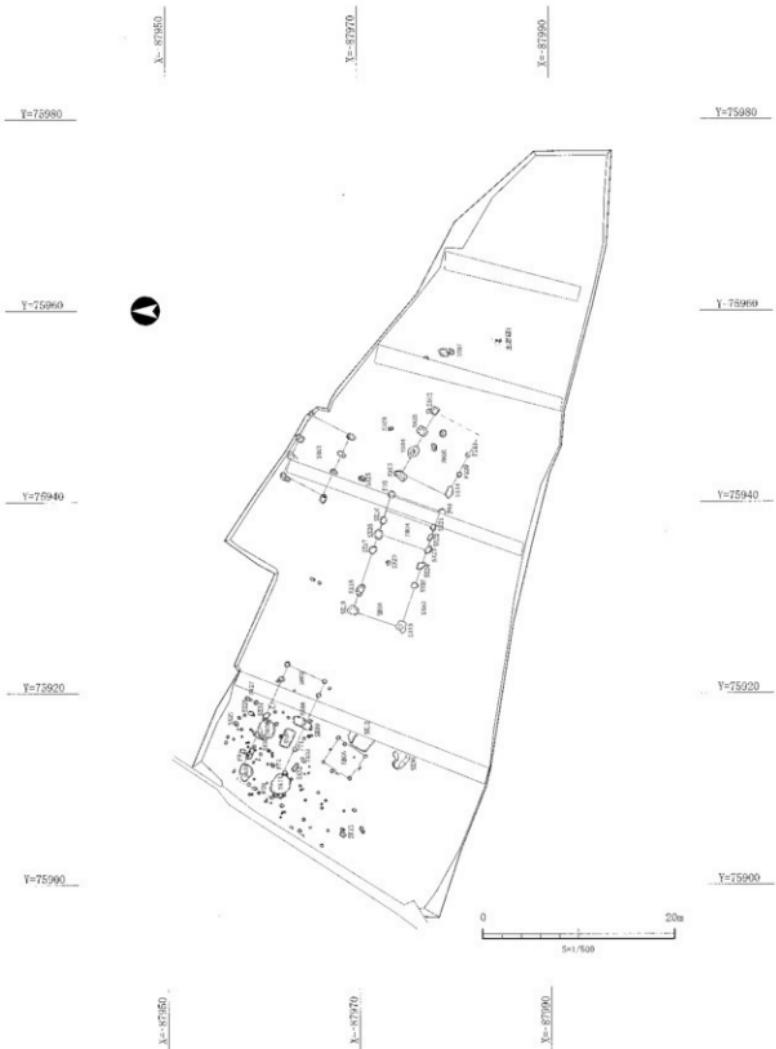
(1) 遺構(第 17・34 図)

3 層上面にも多くの上坑、ピット状の落込みが確認されたが、建物と確認できたものは僅かであった。列をなすものはあるが、ピット内埋土や規模から水田耕作の杭跡であろうと考えられるものについては取上げなかった。また、SB の各柱穴名は、検出時の名称をそのまま用いている。

さらにトレレンチによる上層観察では分層できず遺構面と認識していなかったが、3 層中～下層で SG01 を検出している。

SB01(第 18 図)

IH・2H・II・2I・2J に跨るように位置し、P04 の北半分は調査区外となっている 1 間×3 間の側柱建物で、平面規模は梁間 4.78m、桁行 6.94m、床面積 34.43 m²である。柱間隔は妻側 4.78 m、平側は不均等であった。柱穴は平面椭円形のものが多く、山川方向の断面形状(最深部が山よりで、川側は緩やかに傾斜する)は柱の建て方を示しているといえよう。検出面からの深さはもともとが傾斜地に建てていることもあり、15~50 cm でばらつきがあるが、両平側ではほぼ揃う。P04



第17図 3層造構配置図 S=1/500

は北半分が調査区外ということもあり最深部に到達していないと考えられる。建物の主軸方向はE-22°-Sをとる。P01には柱が残っており、埋土中に弥生土器の底部が含まれていた。P05・P06では柱の位置が特定できる土層が確認できた。P08の土層は柱の抜取痕の可能性がある。

SB01 出土遺物(第29図)

SB01の各ピットから出土した遺物はスラグ、土師器片、弥生土器片であった。このうち図化したのが、P01出土の29-6で弥生土器の底部である。上げ底の底部は底径5.4cmで、外面はハケメ、内面は削る。7は同じくP01の柱根である。樹種はクリと思われる。底面は加工痕が顕著であったが、側面は樹皮が残ったままであった。

SB02(第19図)

3M~3P・4M~4Pに跨って位置する1間×6間の側柱建物である。平面規模は梁間4.34m、桁行13.32m、床面積55.42m²である。柱間隔は妻側4.34m、平側は不均等であった。柱穴は平面形ほぼ円形のものが多く、径25~30cmのものが多い。検出面からの深さは直線上はほぼ揃う。P91は断面形が二段掘り状となる。建物の主軸方向はE-23°-Sをとる。柱の位置を特定、または抜取痕が判るような土層は見られなかった。SB02は同一面にあるSK06(年代測定している)に切られているのでSK06より時期は古い。戦国時代以前と考えられる。出土遺物は無かった。

SB03(第20図)

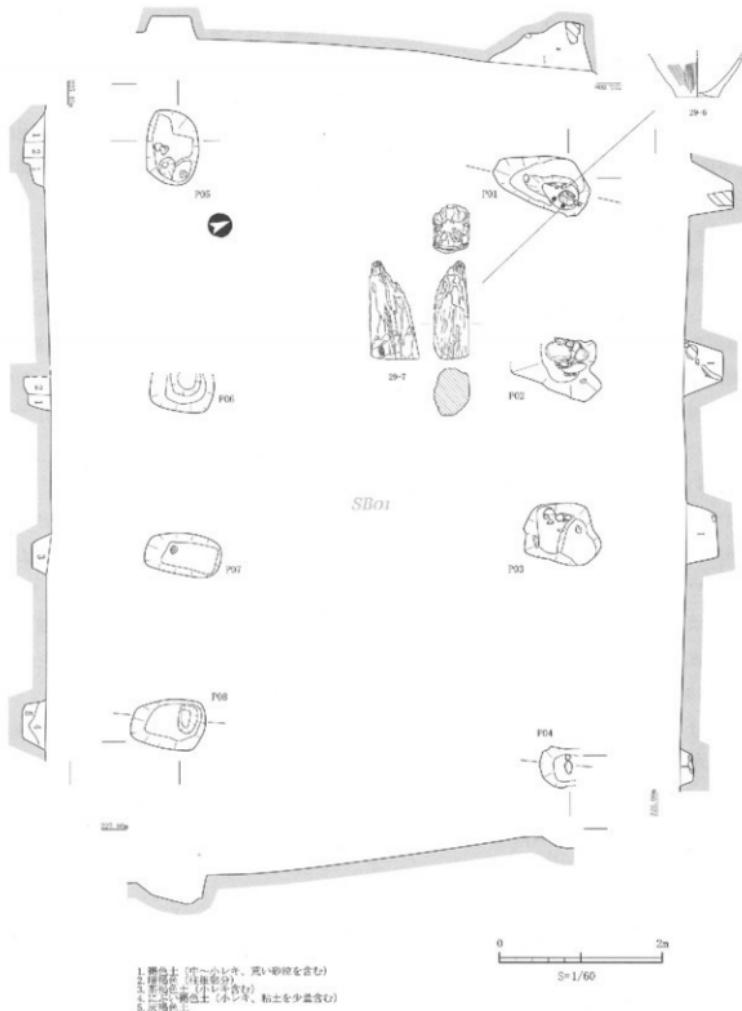
4I~4L・5I~5Lに跨って位置する1間×5間の側柱建物である。平面規模は梁間5.51m、桁行12.83m、床面積70.26m²である。柱間隔は妻側5.51m、平側は不均等であった。柱穴は平面形は様々で径65~120cmとばらつきがある。検出面からの深さにもばらつきが見られる。建物の主軸方向はE-19°-Sをとる。SX13は柱の位置を特定できるような上層が認められる。また、SX17の浅い底面には礎石とみられる平石が据えてあった。P3の埋土から古式土師器片が出土している。

SB04(第21図)

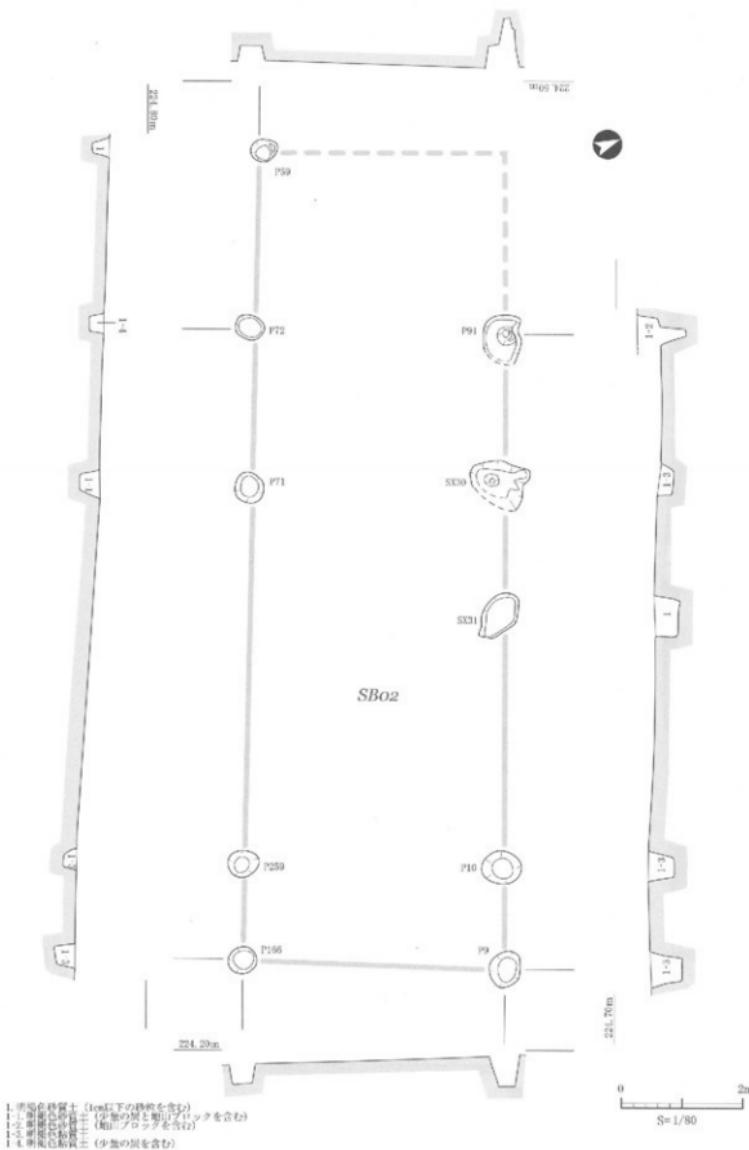
5I・5J・4Jに跨る1間×1間の側柱建物で、平面規模は2.46m×5.51mで、床面積は13.86m²であった。柱穴は平面形椭円形で径は65cmから1.1mとばらつきがある。検出面からの深さはほぼ揃う。建物の主軸方向はN-18°-E(E-16°-S)である。SX21には角礫が土坑内に埋上とともに入っていた。他の柱穴に柱の位置を特定、または抜取痕が認められるものはなかった。また出土遺物も無かった。

SB05(第22図)

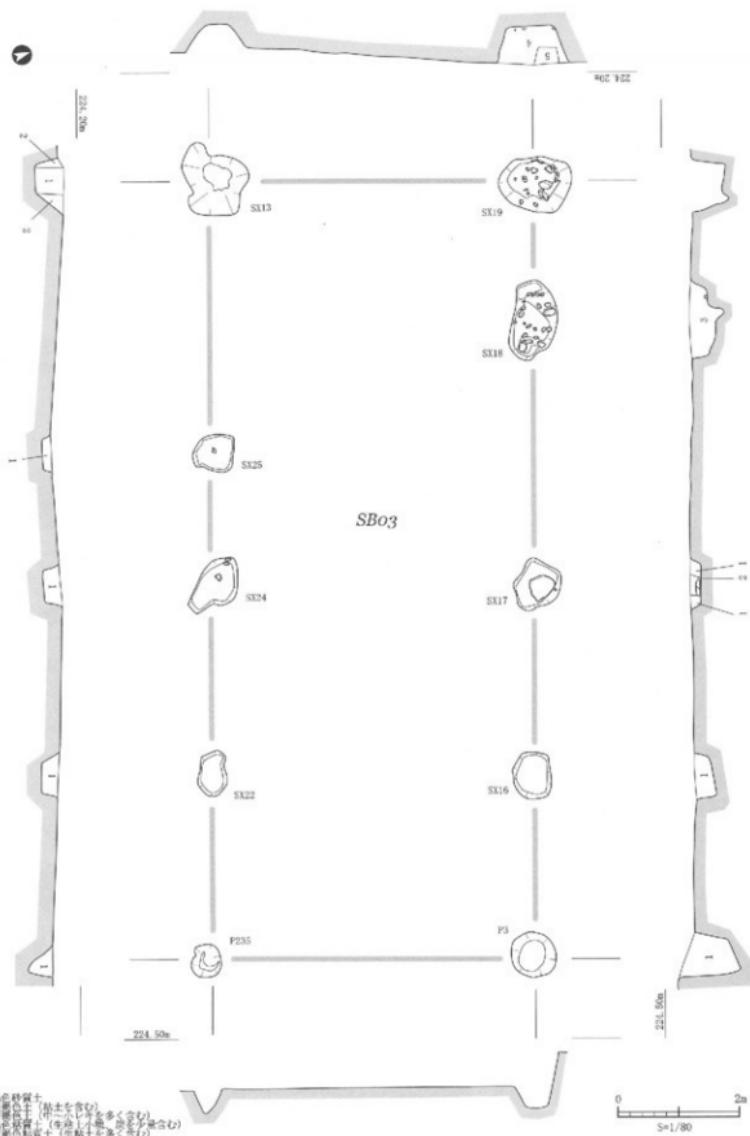
4G~4L・5H~5Lに跨る1間×3間の側柱建物で、平面規模は梁間5.50m、桁行7.55m、床面積39.38m²である。柱間隔は妻側は5.50m、平側は2.34mであった。柱穴は平面形は様々であるがP239とP241はほぼ円形で径55cmを測る。その他の柱穴は大きく、形状もばらつきがあり、径85cm~1.3mである。検出面からの深さにもばらつきがある。建物の主軸方向はE-27°-Sをとる。柱穴埋土からは、柱の位置、抜取痕等が認められるものはなく、遺物もなかった。柱穴内から古式土師器、陶器片、スラグが出土している。



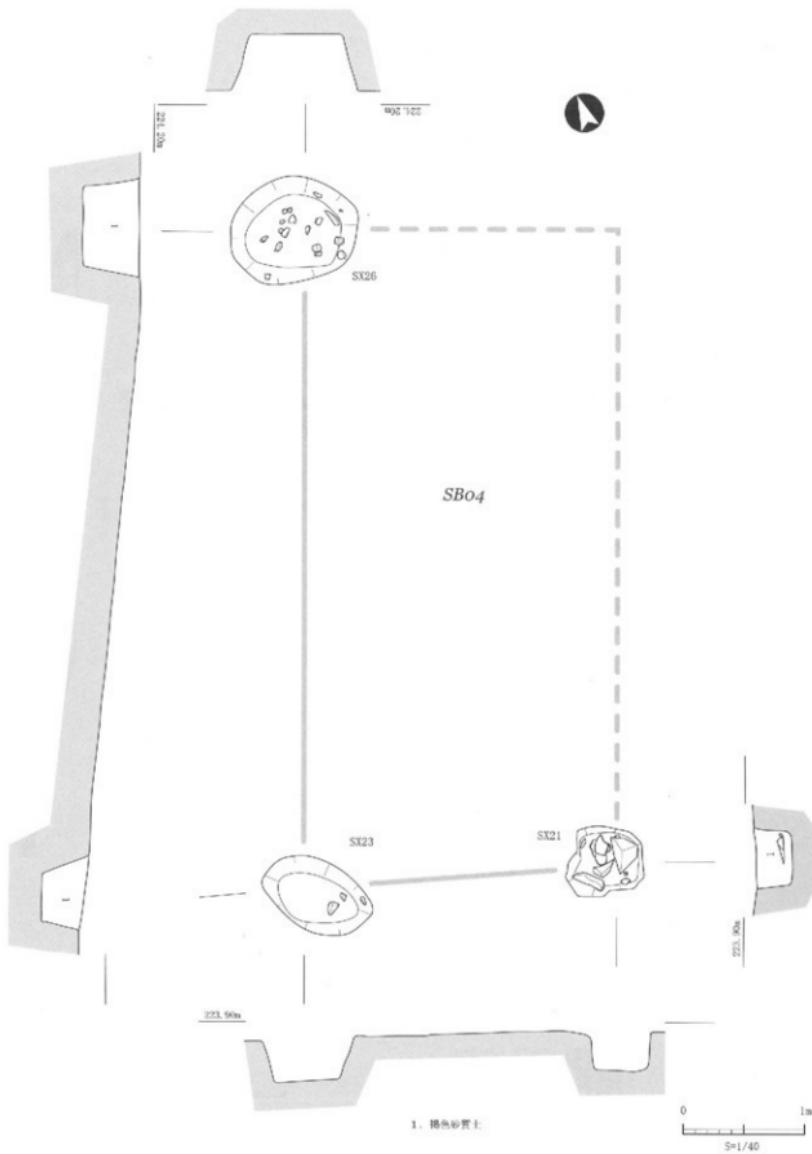
第18図 SB01実測図 S=1/60



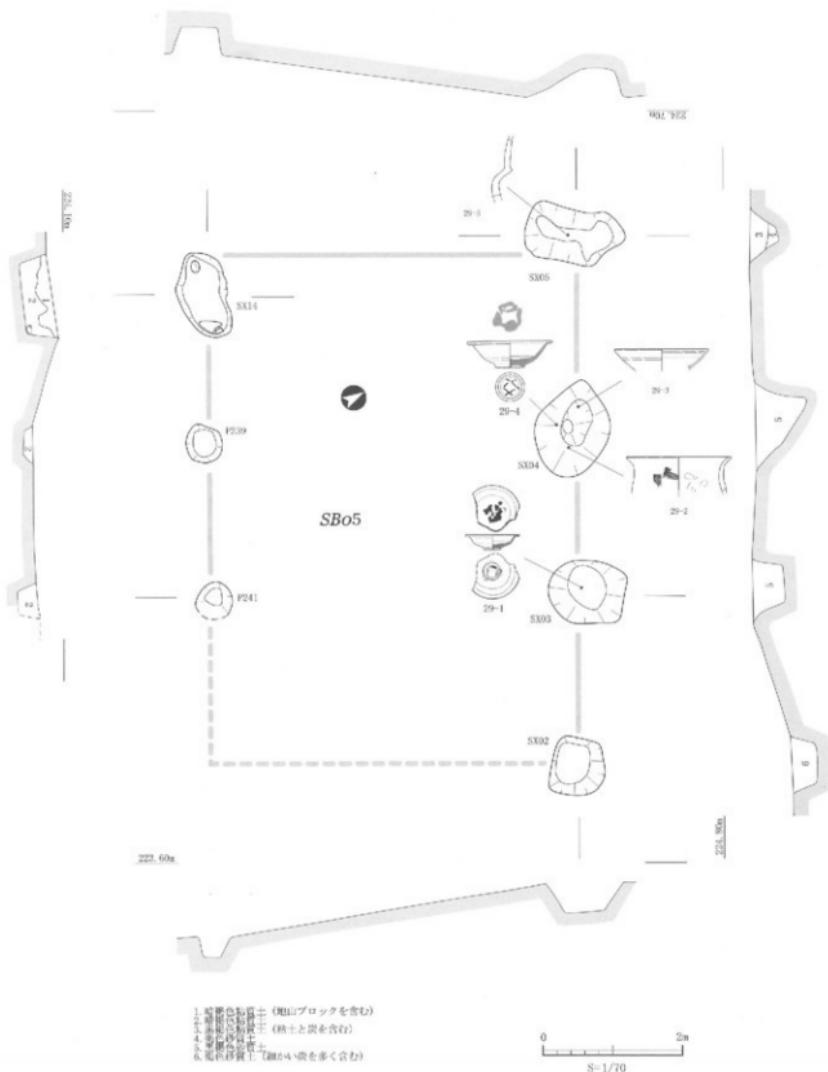
第19図 SB02実測図 S=1/80



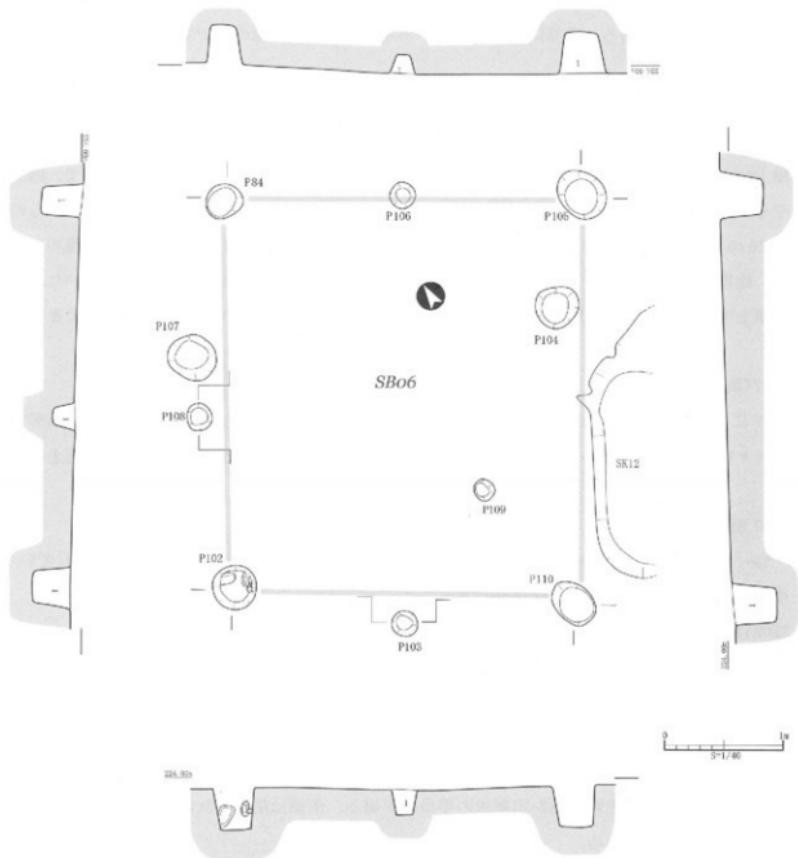
第20図 SB03実測図 S=1/80



第21図 SB04実測図 S=1/40



第22図 SB05実測図 S=1/70



第23図 SB06実測図 S=1/40

S805 出土遺物(第29図)

29-1は唐津の皿で、口径13.8cm、器高4.2cm、底径3.9cmを測る。内面には重ね焼きの痕跡が顕著に残る。2は口径17.7cmの単純口縁の土師器甕で外面はハケ目、内面は頸部以下は削る。3は唐津製の皿で17世紀までの品である。4は1と同じような唐津の皿。口径13.2cm、器高4.2cm、底径4.4cmを測る。底部に墨書の痕跡がある。5は複合口縁の壺である。古墳時代初頭に位置づけられる。

S806(第23図)

4N・5N・40・50に跨る2間×2間の側柱建物で、平面規模は、梁間3.00m、桁行3.45m、床面積10.05m²である。柱間隔は妻側は1.50m、平側は不均等であった。柱穴は平面円形で、四隅がやや大きく30~40cm、P106は直線上にあるが、P108、P103はやや外側に位置する。これらの径は20cmである。検出面からの深さは四隅の柱穴が35cm、その他の柱穴が16~20cmと浅めであった。建物の主軸方向はE-33°-Sをとる。P102内には埋土とともに川石が含まれていた。P110の埋土中から古式土師器片が出上している。柱穴上層は何れも単層で抜取痕等は確認できなかった。

SX07(第24図)

4Fに位置し、平面形は不整形で、長径1.62m、短径0.90m、深さ0.37mを測る。断面形からは元々は二つの土坑であった可能性がみてとれる。埋土中から古式土師器、陶器等が出上している。

SX07 出土遺物(第24図)

24-1は擬凹線のはいらない段階の複合口縁甕で、複合口縁部分の稜は横方向に突出している。草田6・7期。2は高坏の脚部であろうか。

SX08(第24図)

3Hに位置し、平面不整形をなす、長径0.56m、短径0.30m、深さ0.13mを測る。斜面に掘り込まれたもので検出時は非常に浅いものであった。遺物は無く時期不詳である。

SX15(第24図)

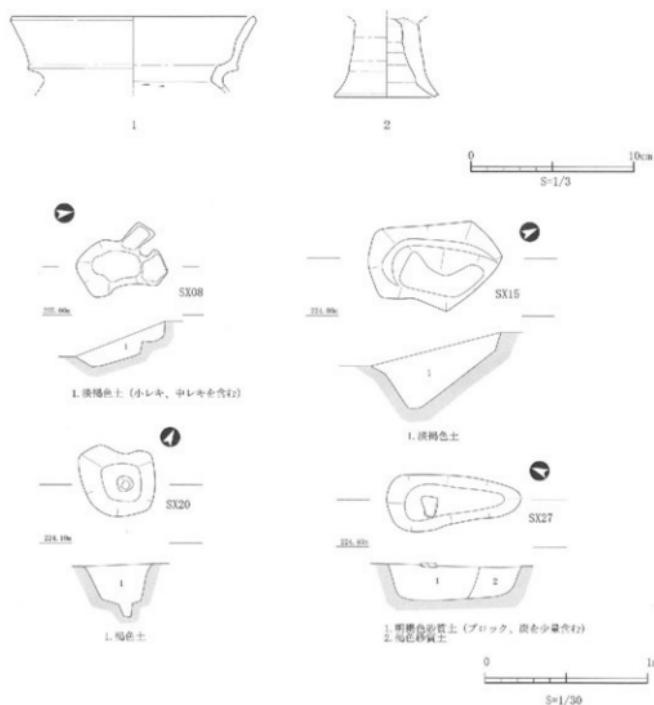
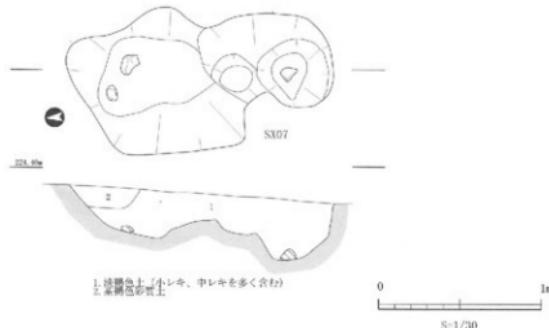
3IのSX08同様斜面に位置し、平面不整五角形である。長径0.82cm、短径0.51cm、深さ0.32cmを測る。西側断面中腹に僅かに帯状の平坦面が廻る。南側は削平されたものと思われる。遺物は無く、時期不詳である。

SX20(第24図)

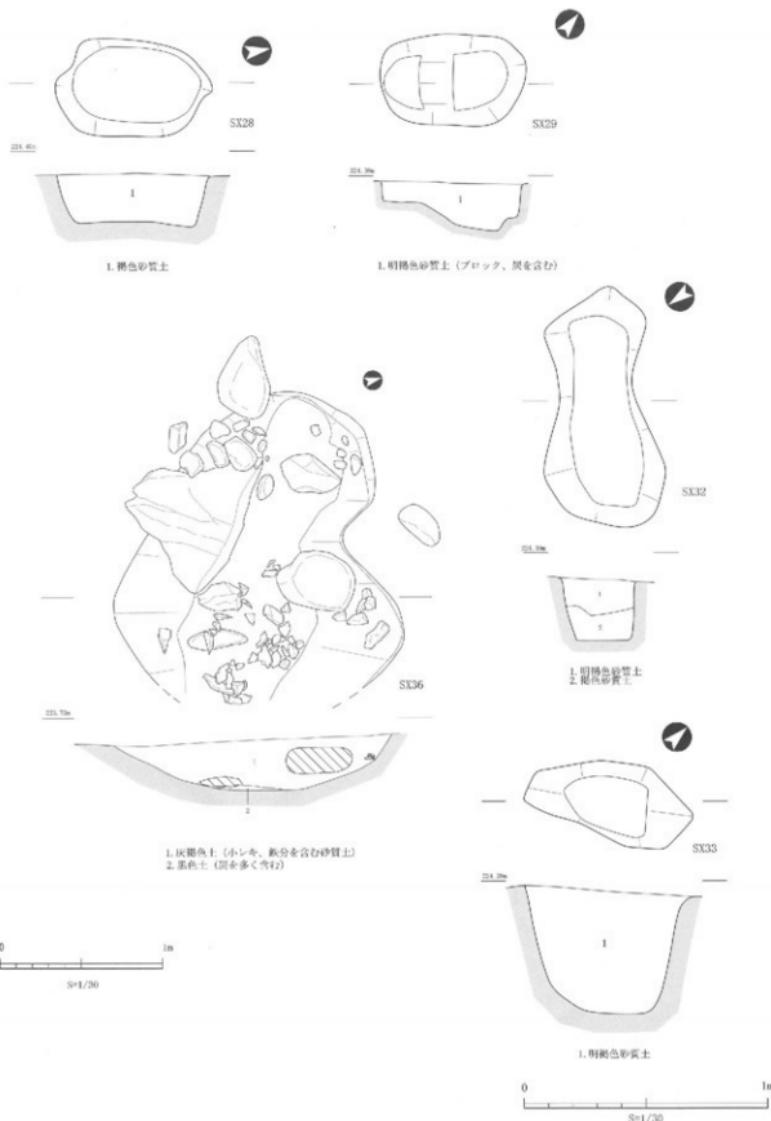
4Jに位置し、平面形は方形の崩れたような不整形で、長径0.44m、短径0.39m、深さ0.32mを測る。底面中央に10cmほどの小ビットが確認できた。杭跡かと思われるが、土層による確認はできなかつた。遺物は無く、時期不詳である。

SX27(第24図)

2Nに位置し、平面形はアーバ形で、長径0.82m、短径0.34m、深さ0.21mを測る。検出表



第24図 SX08・SX15・SX20・SX27遺構・SX07遺構 遺物実測図 S=1/3 S=1/30



第25図 SX28・SX29・SX32・SX33・SX36実測図 S=1/30

面で 15 cm 程の平石を検出した。埋土には地山ブロック、炭を包含している。遺物は無かった。

SX28(第 25 図)

3N に位置し、平面レモン形のような不整円形で南北両端がやや突出する。規模は長径 0.63m、短径 0.39m、深さ 0.20m を測る。埋土は褐色砂質土で遺物は出土していない。

SX29(第 25 図)

20 に位置し、平面楕円形で長径 0.59m、短径 0.36m、深さ 0.18m を測る。断面形は南西側に平坦面をもち、北東側が最深部となる。明褐色の埋土中には地山ブロック、炭を含む。遺物は無かった。

SX32(第 25 図)

40 に位置し、平面瓢箪形をなし、長径 0.98m、短径 0.31m、深さ 0.26m を測る。埋土は砂質土で遺物はなく時期不詳である。柱穴の可能性も否定できない。

SX33(第 25 図)

40 で SX32 の南東に位置し、平面形は角のある楕円形状で、長径 0.68m、短径 0.33m、深さ 0.50 m を測り、平面形と比して深い土坑の印象を受ける。埋土は明褐色砂質土で、遺物は含まれていなかった。下層を貫いた可能性もある。

SX36(第 25 図)

6N に位置する調査区内でも川側によった遺構で、平面形は瓢箪形で長径 2.10m 以上、短径 1.20 m、深さ 0.31m を測り、断面形はレンズ状である。埋土中に 50 cm を超すような川石や床面に 10 cm ほどの角礫、炭が集中する箇所が確認できた。土坑南側の 1m 程の角礫は元々その位置にある自然のものであろう。埋土中に遺物はなかった。

SK06(第 26 図)

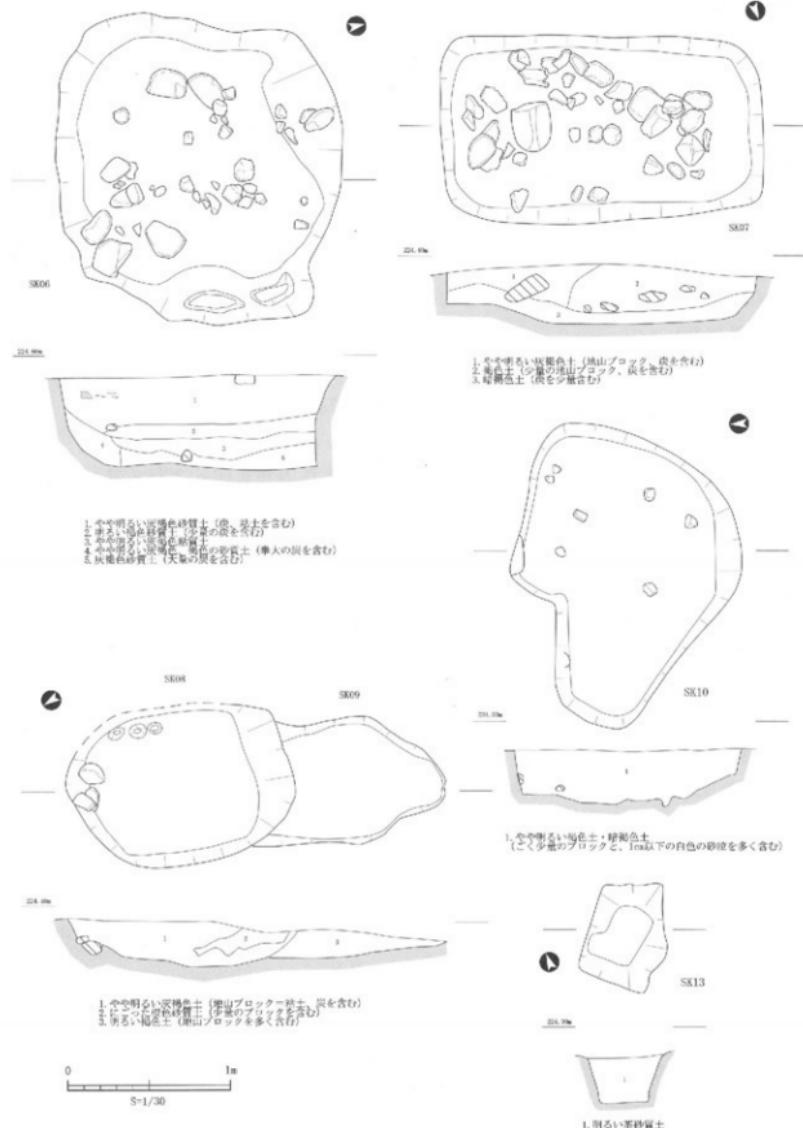
3N・30 に位置し、平面形はやや不整な隅丸方形である。東側に僅かに突出した部分があり、壅む部分が二箇所ある。規模は長径 1.80m、短径 1.74m、深さ 0.54m を測る。1 層表面と層中に 30 cm 以下の川石が確認され、その中には焼石も含まれていた。また、床面 5 層には大量の炭を包含していた。5 層の炭を C14 年代測定している。詳細は第 6 章第 2 節に譲るが、示された年代は中世末であった。出土遺物は埋土中から須恵器片、磁器片が出土しているが図化し得なかった。

SK07(第 26 図)

3N・4N・30・40 に跨るように位置する平面形隅丸長方形で、長径 1.97m、短径 1.16m、深さ 0.37m を測る。埋土に川石、地山ブロック、炭を含む。3 層の炭を C14 年代測定他結果、SK06 と同様の年代を示している。出土遺物は流込みの 1 点複合口縁片があった。

SK08(第 26 図)

3N・4N を跨ぐ位置にあり、SK09 と切合う状態で検出した。平面形は不整な長方形をなし、長径 1.40m、短径 0.98m、深さ 0.27m を測る。床面北東側に 15~20 cm の川石が 3 個あった。埋土中には橙色の地山ブロックと炭が含まれていた。出土遺物は無かった。



第26図 SK06・SK07・SK08・SK09・SK10・SK13実測図 S-1/30

SK09(第 26 図)

4N で SK08 に切られる状態で検出した。平面形は不整形をなし、長径 1.10m 以上、短径 0.78m、深さ 0.16m を測る浅めの土坑で、埋土は明るい褐色土であった。埋土中から磁器片、スラグを検出している。

SK10(第 26 図)

30・3P を跨ぐ位置に所在し、平面形は不整形で、長径 1.80m、短径 1.40m、深さ 0.31m を測る。埋土は砂粒を多く含む褐色土で、埋土中に 10 cm 以下の川石を 7 個含んでいた。遺物はなく、時期不詳である。

SK13(第 26 図)

5P に位置し、平面形不整五角形で、長径が 0.67m、短径 0.50m、深さ 0.28m を測る。埋土は明るい茶砂質土で、遺物は含まれていなかった。

SK11(第 27 図)

30・40・3P・4P に跨るように位置し、不整な卵形状をなし、長径 2.24m、短径 1.84m、深さ 0.14m を測る浅い土坑である。砂粒を多く含む褐色土の埋土で、土坑中央部表面に大きいもので 40 cm 以下の川石で、平面を上に意識的に集積した部分を確認した。遺物は石と埋土の間から須恵器甕片、陶磁器片を検出している。平面的に SK11 の中央集石部は SB02 のプラン上に位置し、土坑断面からは確認できなかったが、柱穴が存在してもおかしくない箇所である。

SK12(第 27 図)

5N に位置し、南東側はトレチにより消失している。平面形は方形をなすものだろうか。長径 2.60m、短径 1.60m 以上、深さ 0.42m を測る。トレチ側に 40 cm の角礫以下数個の川石が集中する部分がある。埋土は灰色の砂質土で、土中から土師器の糸切底片が出土している。

土器群 1(第 28 図)

4E・5E を跨いで位置し、堀込み等は認められなかったが、土器片の集中する箇所が確認されたため遺構として処理した。ほとんどの破片が瓶 32-49 と接合し、もともと遠くない位置、若しくはその場で使用していたことも考えられる。

土器群 1 出土遺物(第 32 図 49)

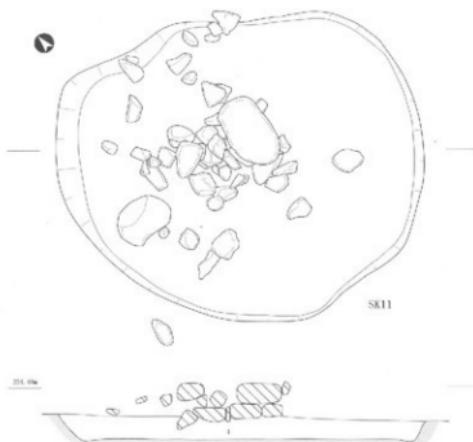
32-49 は土師器甕の把手以下底部までの破片で、残存部分は僅かであるが反転復元により図化している。底径は 10.5 cm で残存破片では底部直上の孔は確認できなかった。内面はナデ、外面はナデとハケメ(特に把手部分が集中的)調整である。

以上が 3 層上面遺構である。

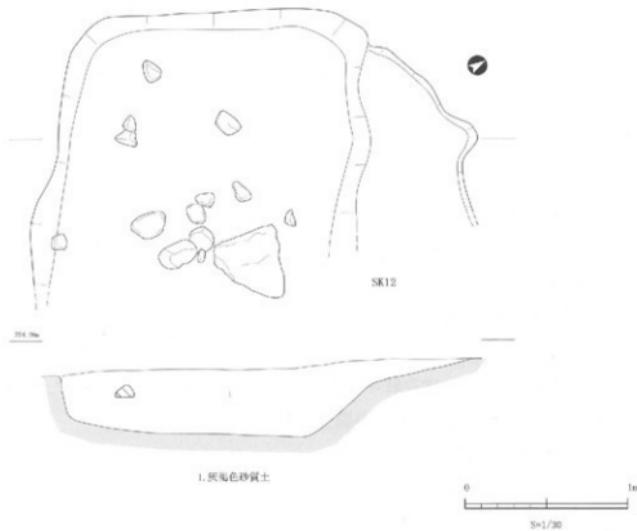
次いで 3 層中～下層で検出したのが SG01 である。

SG01(第 35・36 図)

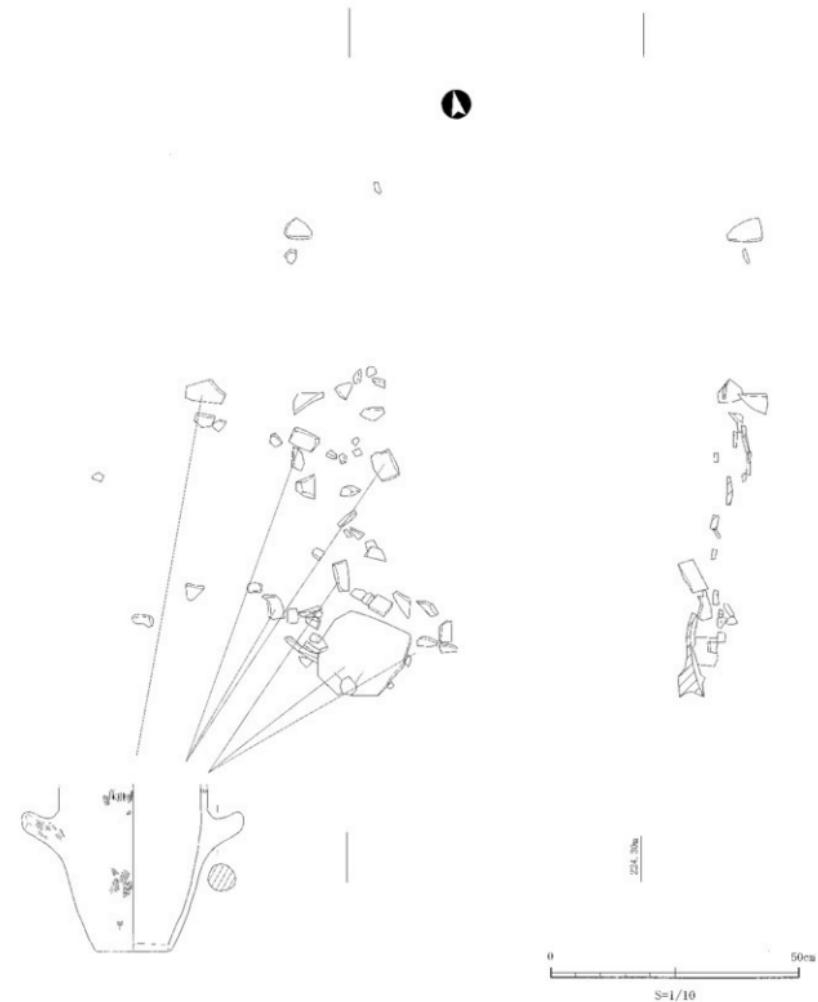
結果的に 3 層中～下層から検出した遺構で、31・41・3M・4M を跨いで位置し、第 36 図朱書きが掘り方で、平面形南北に長い不整長円形状をなし、長径 7.45m、短径 6.37m、深さ 1.40m、



1. やや黄褐色土・褐色土 (ごく少泉のブロックと、
teak以下の砂層を多く含む)



第27図 SK11・SK12実測図 S=1/30



第28図 土器群1実測図 S=1/10

平面積 38.6 m²を測る。そこに黒褐色土を埋込み川石で石垣状に石を積んだ状態で検出した。図 35 にあるように周辺にはかつての河原跡があり、掘下げていくうちにそこに到達してしまい、人工的な集石部分と自然のものとの違いを確認しづらかった。人工的な部分は図で網掛けしてある箇所である。もともと自然の産物を利用してできていた遺構なのかもしれない。円形に囲まれた石垣状の構造を復元できることから、池状の遺構、または水溜という性格も考えられる。掘り方直上の土で年代測定をした結果、14世紀中頃の数値を得た。出土土器からは中世後半まで遺構が機能していたとも考えられる。

SG01 出土遺物(第 37 図)

遺物は、石垣部分と 1 層の狭間からのもの、埋土中のものがあるが、厳密な区分はできなかつた。流れ込みであろう 37-1 は弥生末～古墳初の壺の肩部である。口縁部欠損のため詳細は不明である。外面にノの字の連續刺突を行なうが、風化による摩滅が著しく工具は不明である。2 も流れ込みによるものと考えられる土師器壺の把手である。当地では上方へくの字に曲るものが多く、短く屈曲しないものは珍しい。3 は 16 世紀前半の中国製の磁器²⁷で、高台径は 5.7 cm であった。内外面には青花文を染付けるものである。4 は土師質土器で外面口縁部に 2 条の細い沈線を行ない、その間にやや角張る渦巻文をスタンプするもので、非常に細やかな緻密な作りである。中世の香炉か火鉢であろう。類似品はいろいろな遺跡で見つかっているが、近隣の事例では当教育委員会が行なった円満寺遺跡からも出土している。5 は外面の腰部、内面の口縁部まで緑色の釉薬が施釉される陶器で底部には重ね焼き時の粘土が付着している。

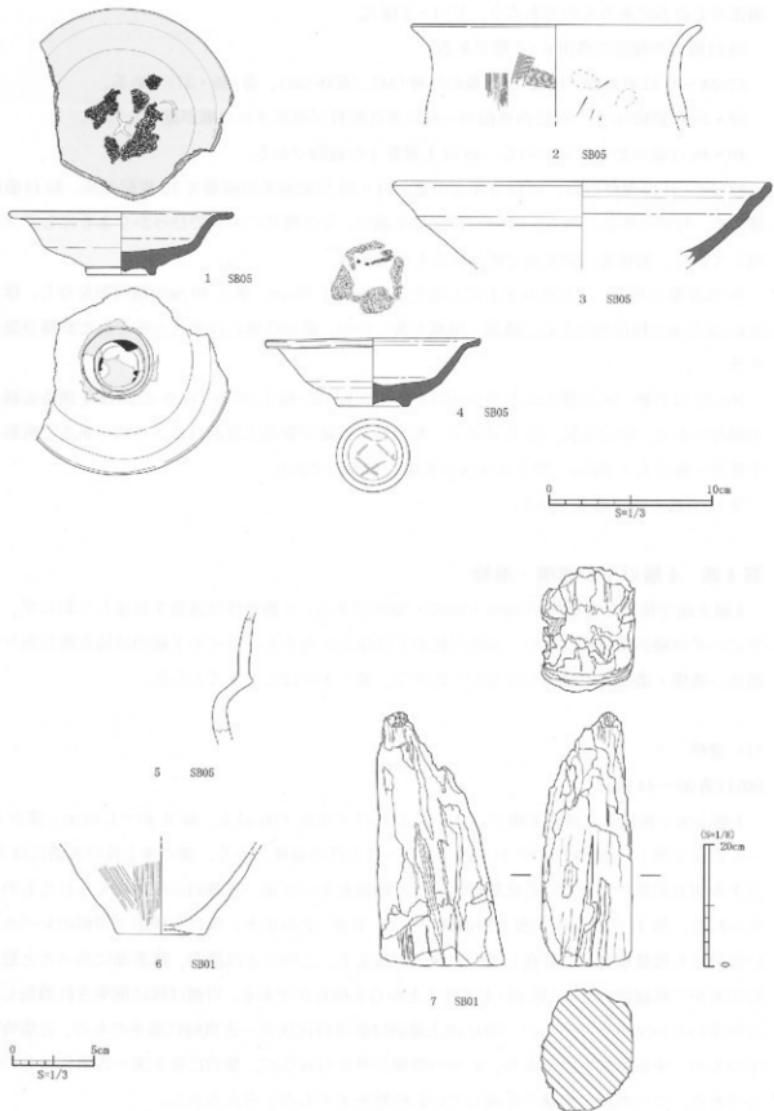
(2) 3 層出土遺物(第 30・31・32・33 図)

30-1～3 は IV-2 様式のもの。1・2 は壺で、1 は端部に 2 条の凹線を施し内面頸部以下ハケメ痕が残る。3 は高杯。口縁部はくの字に屈曲し、外面は凹線が摩滅しているのか浅いが、端部と張り出し部分に刻目を施し、赤色顔料を塗布した痕跡が認められる。4 は漏斗状の器形で端部で強く外に曲がる高杯である。内外面とも赤色顔料塗布の痕跡がある。V-1 様式。5～10 は複合口縁の壺で凹線、擬凹線が廻るものである。7 は大型の壺で内外面とも赤色顔料を塗布している。11 は複合口縁部分に擬凹線が廻らないものであるが、作りは厚手でざんぐりした印象を受ける。12 は大型壺の底部であろう。13 は中期後半の高杯脚端であろうか。14 は外面に 2 条の凹線が施されている。時期・器種不明。これら時期を示したもの以外は V 様式の範疇である。

31-15～25 は壺・壺類である。御崎遺跡出土遺物で最も多い遺物はこの時期のものである。壺は器壁の厚みは様々であるが、口縁部分の外への曲りや複合口縁部分の稜の横方向への突出具合は草田 5～7 期に収まるものである。22 は壺の頸部、23 は大型壺の口縁で短く直立する器形を有す。

27 は高杯の杯脚の接合部分であろうか。台付き壺の脚部の可能性もある。

28～32 は底部である。しっかりとした平底であり、胴部が丸く球体状にはならない、最大径が



第29図 SB05・SB01出土遺物実測図 S=1/3 S=1/8

脚部の上の方にあるものであろう。V-1・2 様式。

33 は器台の脚部で草田 6・7 期である。

32・34～37 は須恵器。出雲 4～5 期の壺身(34)、高壺(35)、壺(36・37)である。

38・39 は低脚壺で、38 は内外面の一部に赤色顔料が塗布された痕が認められる。

40～49 は瓶の把手部分である。49 は十器群 1 の遺物である。

33～50～54 は陶磁器類。50 は青花文の皿、51・53 は肥前系の磁器で 18 世紀の品。52 は備前の插鉢で、時期は中世である。54 は白磁櫛描文碗で、先が櫛状の工具でひっかくようにして文様を刻している。福建省の同安窯で焼かれたものである。

55 は耳環である。切れ込みを上にしたときの縦が 1.95 cm、横 2.40 cm の楕円形をなし、厚さも 0.6 × 0.5 cm の楕円形である。破損・摩滅が著しいが、環の内側には金メッキされた痕跡が認められる。

56・57 は石器。56 は僅かに基部が凹み、長さ 2.55 cm、幅 1.50 cm、厚さ 0.25 cm を測る石鏃で、未製品である。安山岩製。57 もサイズ・形状から石鏃未製品と思われる。丸味のある三角形をなす長さ・幅とも 1.65 cm、厚さ 0.4 cm の黒曜石製剥片である。

58 は明銭の洪武通宝である。

第 4 節 4 層以下の遺構・遺物

4 層上面で検出した遺構が SD01・SD02・SD06 である。4 層自体は遺物を包含しておらず、その下にハイカ層が確認されたが、面的な拡がりは僅かにあるもののその下層の砂層を断ち割りした結果、遺構・遺物とも認められなかつたので、掘り下げはここまでとした。

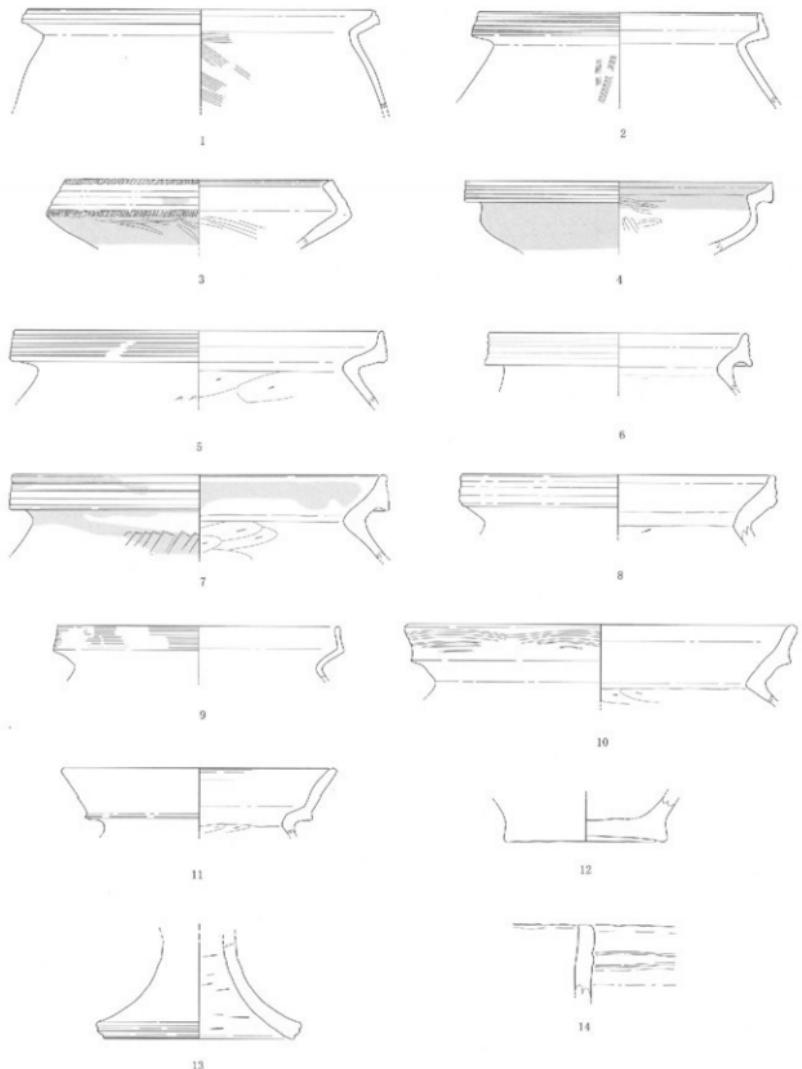
(1) 遺構

SD01(第 39～44 図)

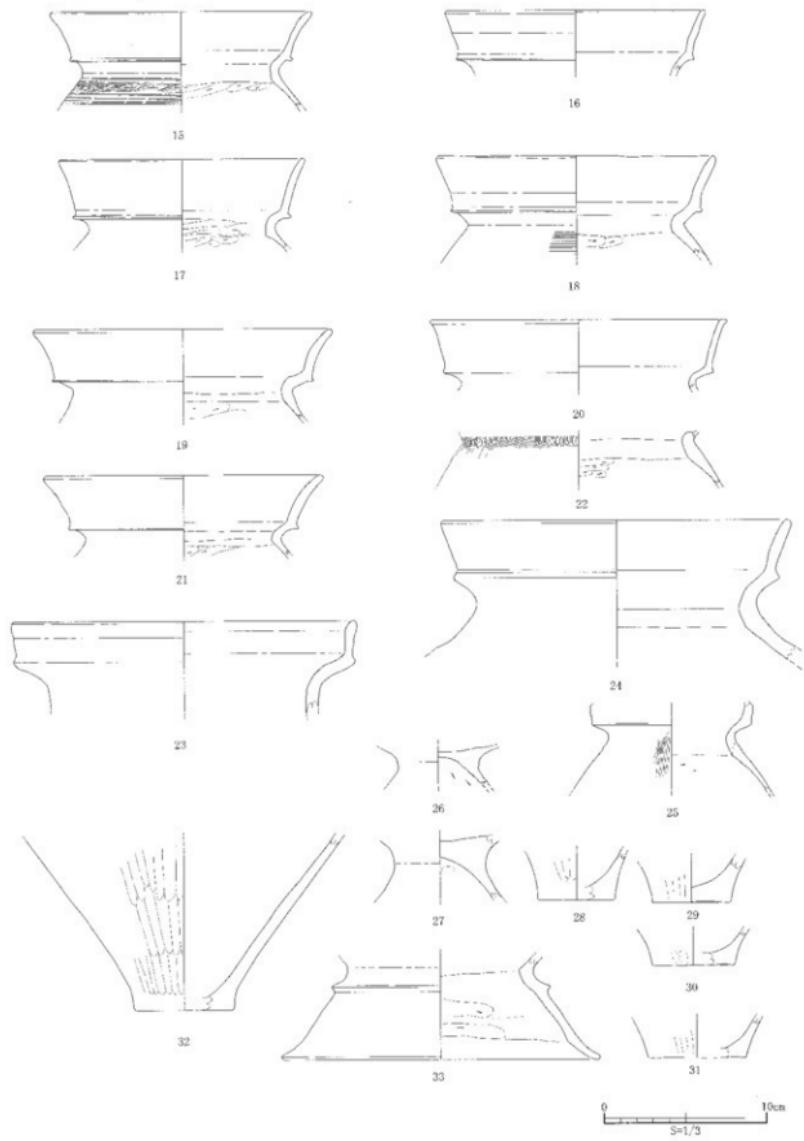
4 層上面で検出した溝状遺構で、1K～5C にかけて全長 45m 以上、幅 0.40～1.62m、深さ 0.10～0.32m を測る。第 39 図の下から上へとレベルが降る遺構である。溝の埋土及び表面には 30 cm 以下の川石が詰められている状態であった。機能を失った後、意識的に埋め立てられたものと考えられる。第 44 図は完堀状況と断面図である。B-B' をみると、溝は元地形で川側のレベルの低い部分にも複数切合って存在していた様子が窺える。このことは溝内、溝表面にあったと思われる川石が二筋確認できる(第 40・41 図)ことからも明らかである。川側は既に削平され消失した部分が多いため図示していない。SD01 出土遺物は弥生時代後半～古墳時代前半のもの、古墳時代後半のもの、中近世のものがあり、3 つの時期が考えられるが、量的に弥生末～古墳初のものが中心である。この時期が遺構の存続していた時期を示すものと考えられる。

SD01 出土遺物(第 49～53 図)

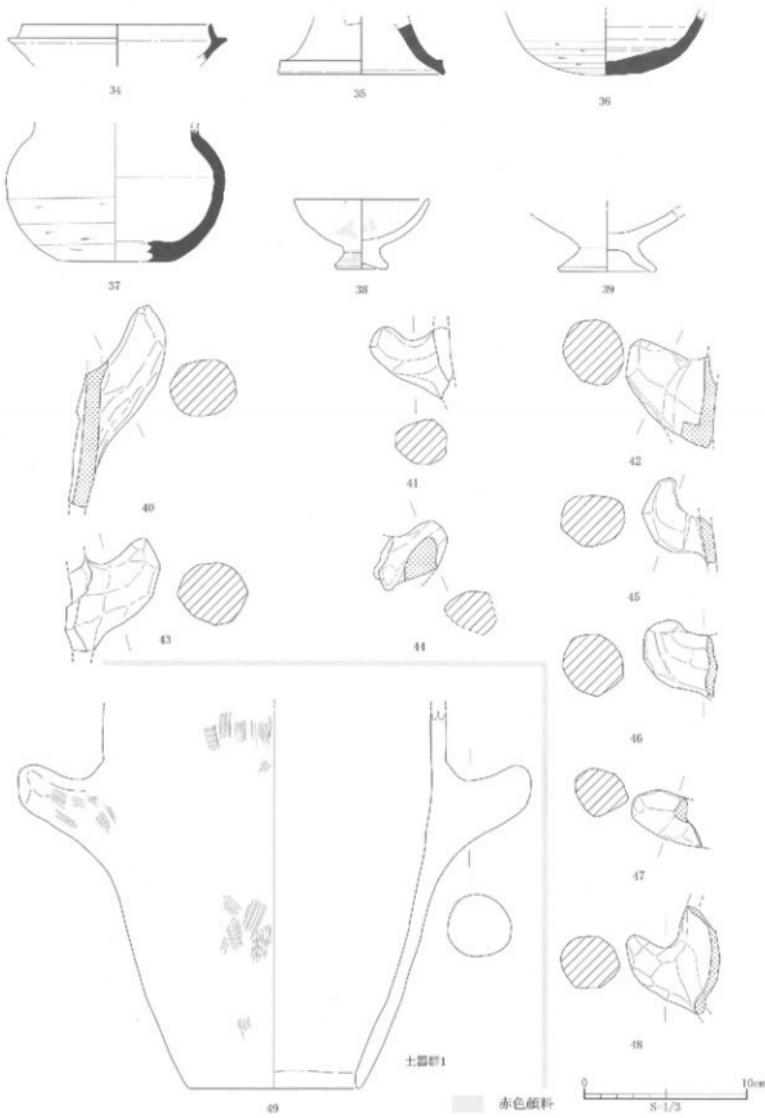
49-1 は縄文粗製土器の底部で、底径 5.3 cm でやや上げ底である。内外面ナデ調整を行なう。49-2



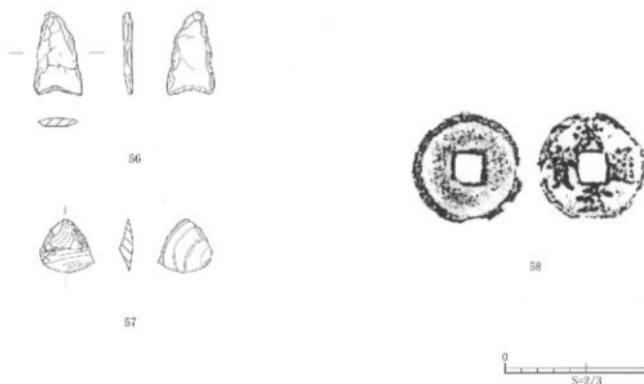
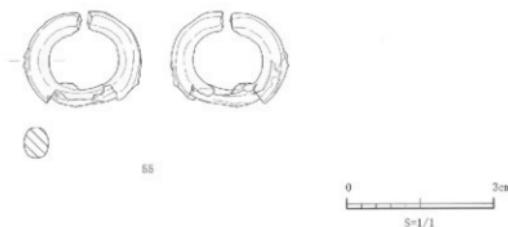
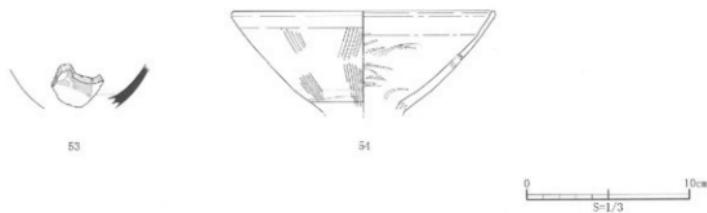
第30図 1区3層出土遺物(1) S=1/3



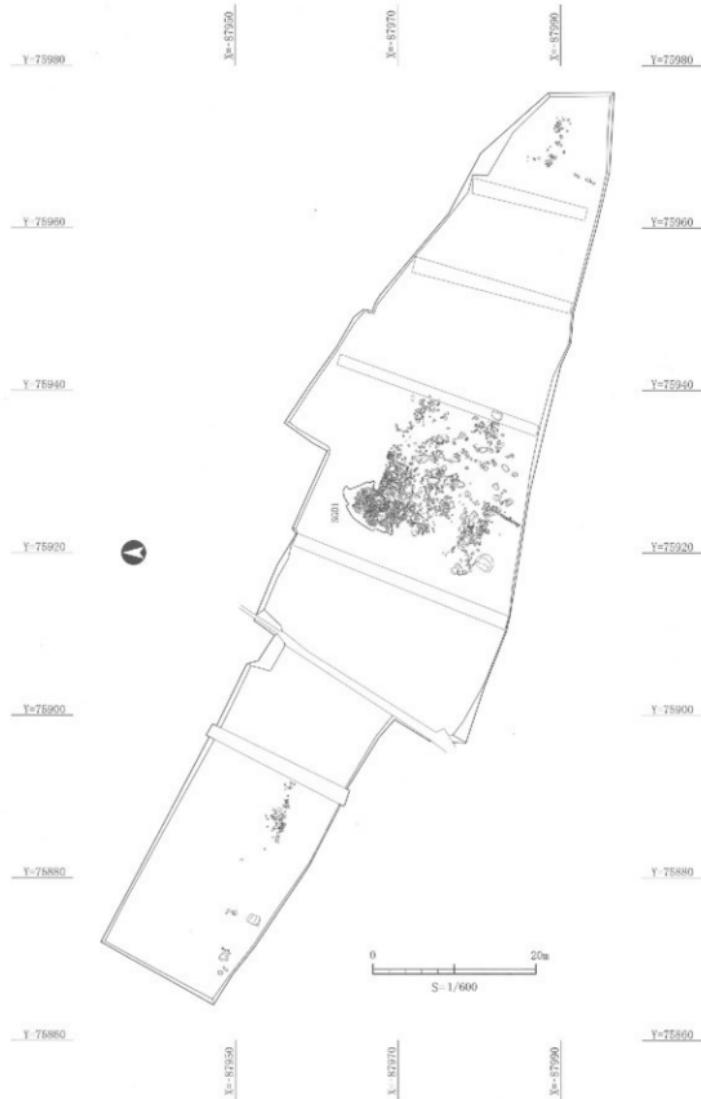
第31図 I区3層出土遺物実測図(2) S=1/3



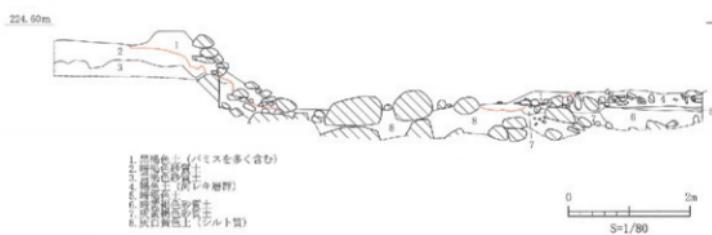
第32図 I区3層土器群1出土遺物実測図(3) S=1/3



第33図 I区3層出土遺物実測図(4) S=1/3 S=1/1 S=2/3



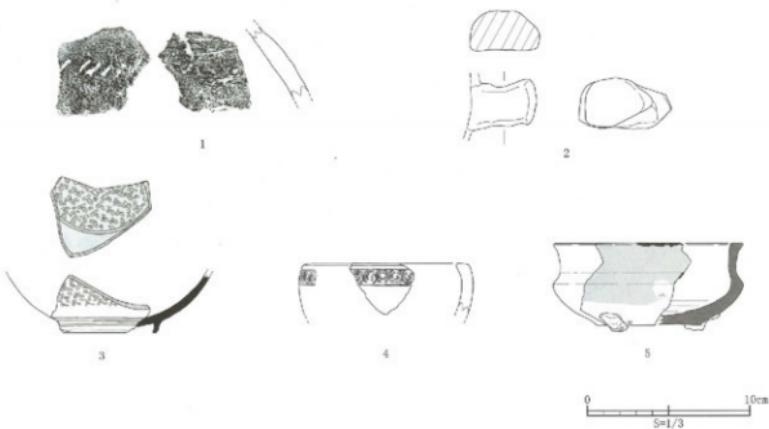
第34図 I区3層中層～下層造構配置図 S=1/600



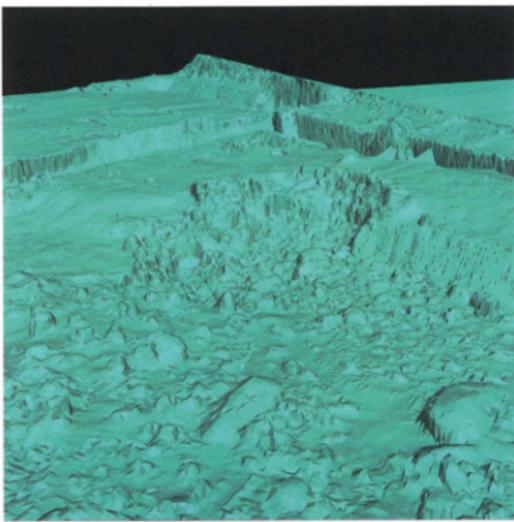
第35図 SG01・川原石実測図 平面図 S=1/150 断面図 S=1/80



第36図 SG01実測図 S=1/60

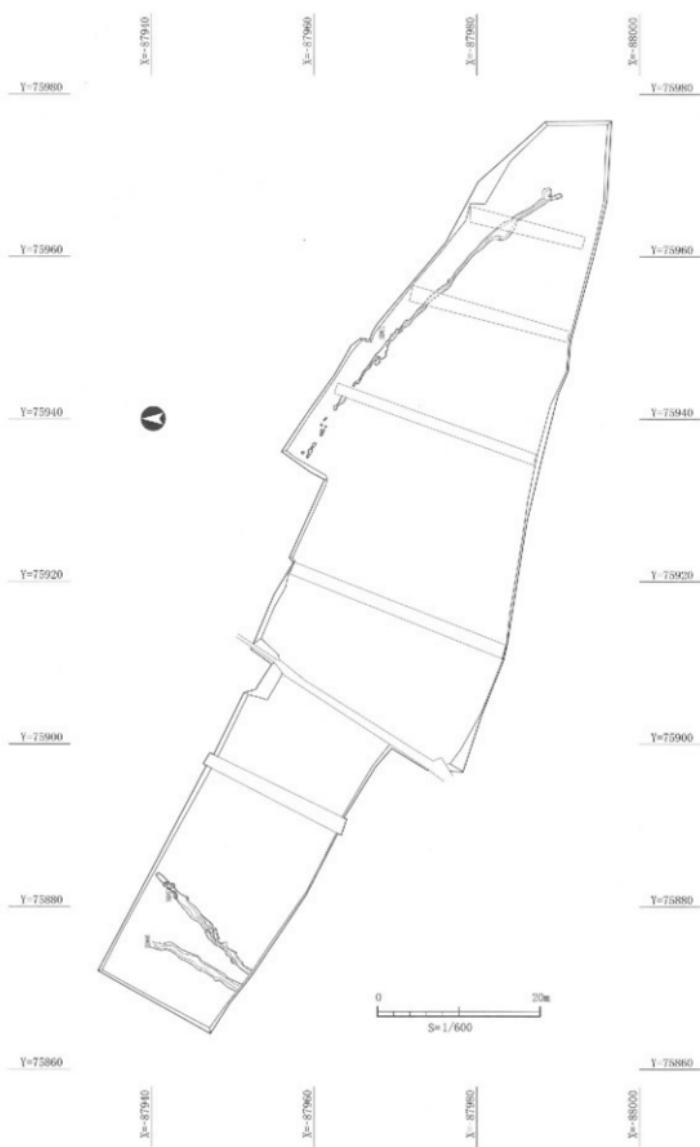


第37図 SG01出土遺物実測図 S-1/3

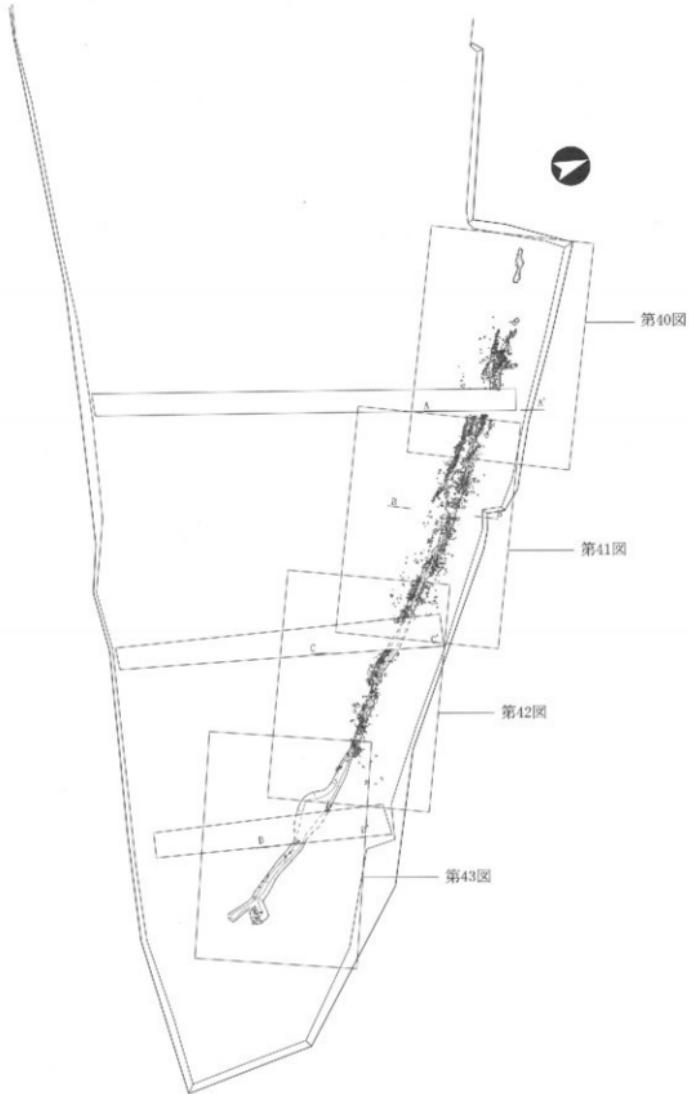


SG01 完掘状況（東南東より）

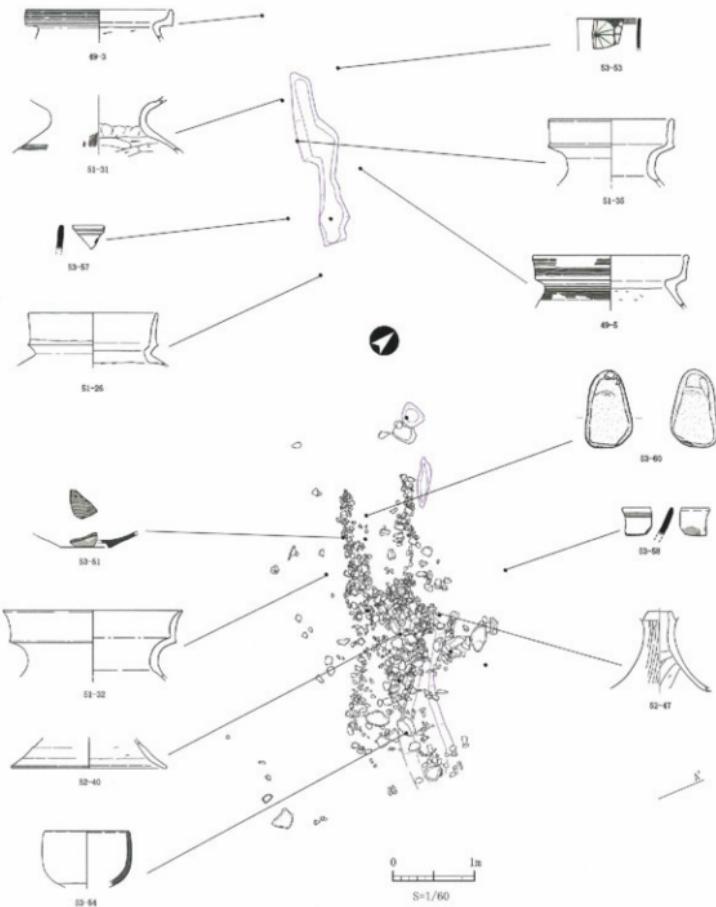
3D 画像 (1)



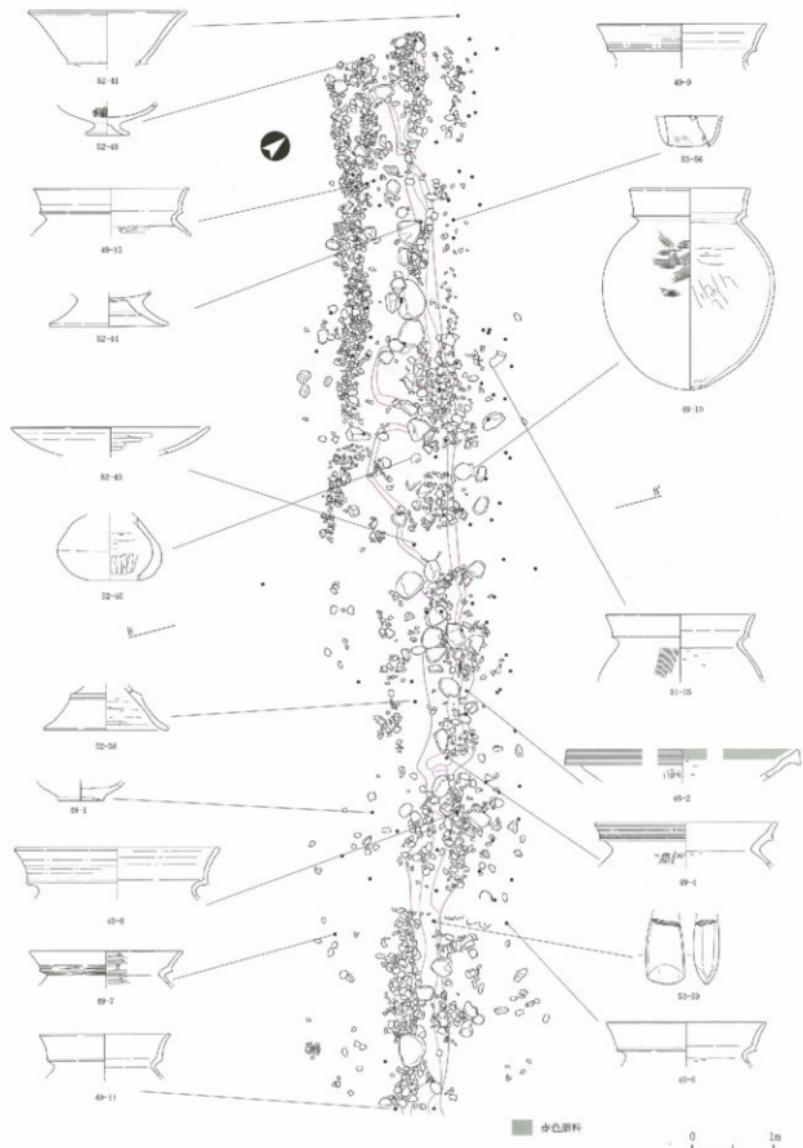
第38図 I区4層造構配置図 S=1/600



第39図 SD01遺構挿図図割

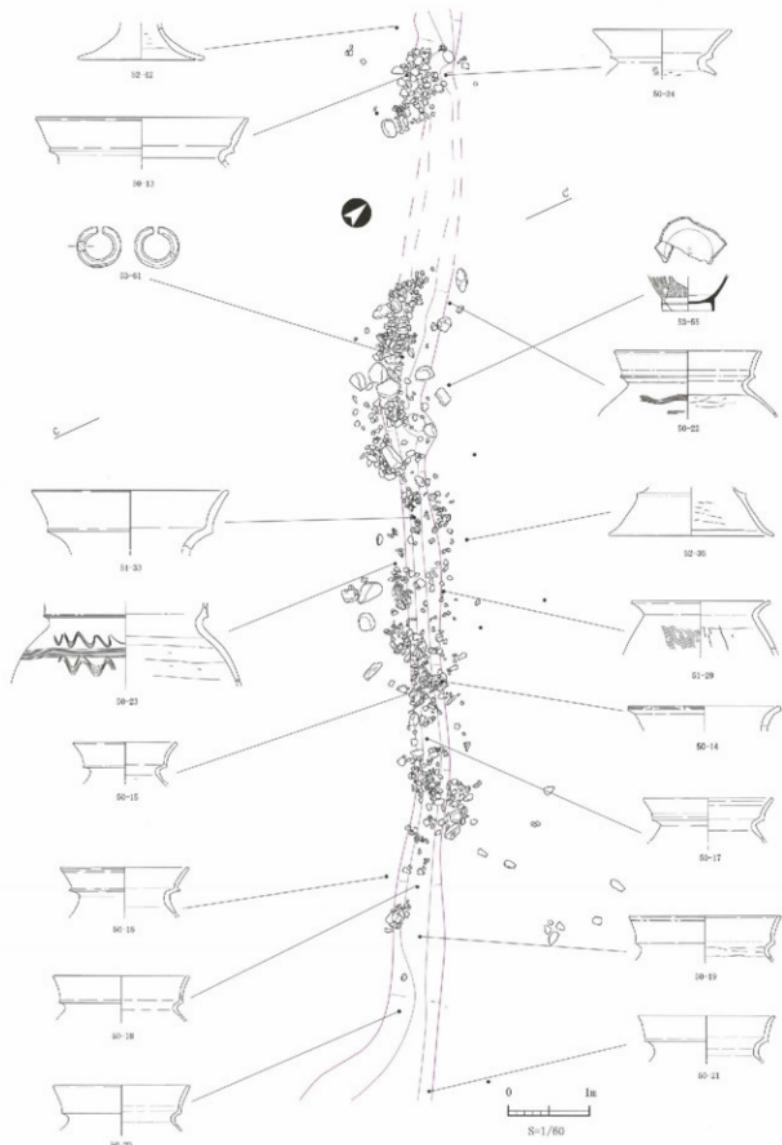


第40図 SD01石・遺物出土状況 S=1/60

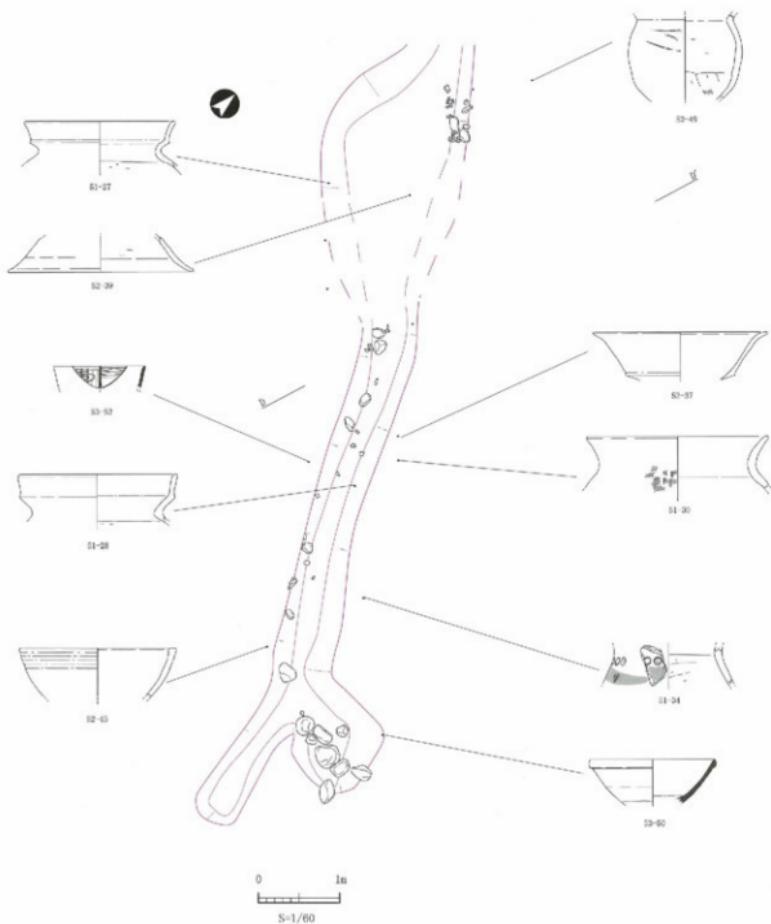


第41図 SD01 石・遺物出土状況 S-1/60

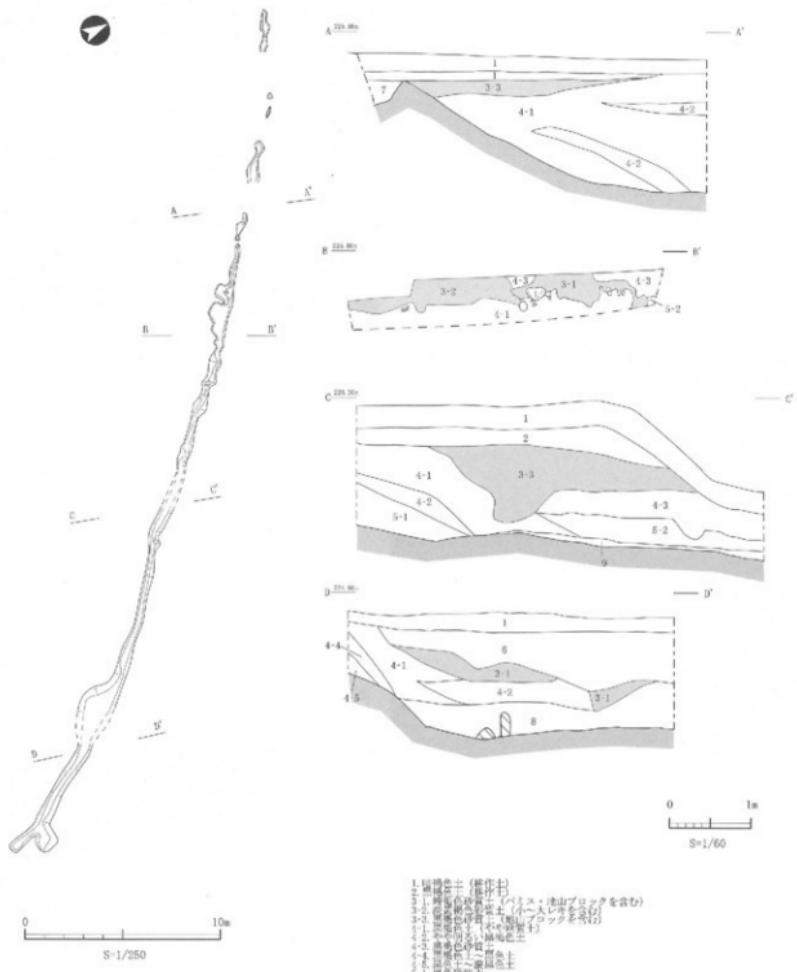
- 58 -



第42図 SD01 石・遺物出土状況 S=1/60



第43図 SD01石・遺物出土状況 S=1/60



第44図 SD01実測図 平面図 S=1/250 断面図 S=1/60

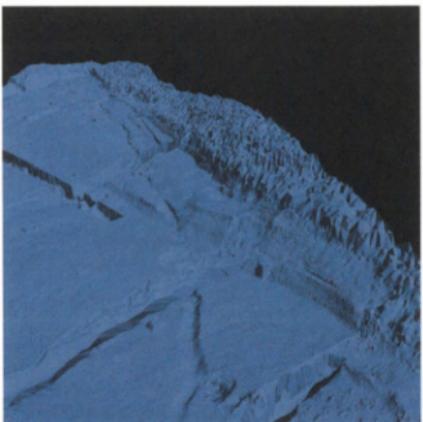
3D画像(2)



SD01完掘状況(西から)



SD01完掘状況(南東から)



SD01完掘状況(南東から)

～52・49は弥生時代後半～古墳時代前半の遺物である。2～5は複合口縁部に擬凹線が廻るものである。2は口径は不明であるが、口縁直下で弱くアクセントがつき、やや深めになる高坏の坏部で内面のアクセントまでの箇所に赤色顔料を塗布している。V-1様式か。3～5は何れも甕でV-1・2様式のものである。7はかなり外に開く器形で複合口縁の突出部付近に細かい条痕が入る。49-6・8～52・49は草田5～7期を中心とする土器である。詳細は遺物観察表をみていただきたい。

53～50～58は陶磁器である。50中国製白磁の確で口径15.6cmである。平安末の時期が当たられる。51は地元産の擂鉢。52・53・58は九州系の磁器。54は布志名焼きのぼてぼて茶碗である。55は広東省の19世紀の確で、56は現代の品、57は18世紀の陶胎染付碗である。

59・60は石器。59は磨製石斧で砂岩製である。表面の一部に磨痕が確認される。基部が欠損している。60は砂岩製の石錐で、打欠きタイプのものが打欠き自体は僅かである。

61は耳環で装着部を上にすると、綫が1.7cm、幅1.8cmと横に膨らむ楕円形をなす。出土時にすでに錯化が著しい状態であった。

SD02(第45・46図)

4層上面で検出した遺構で、2V・3W・4W・5Wに位置し、調査区の南北両壁にもその痕跡を確認している。規模は長さ16.5m以上、幅0.70～1.43m、検出面からの深さが0.45mであった。北(山)側から南(川)側へと降る遺構で、埋土は褐色砂質土に真砂が混じるものでその中には30cm以下の川石を含む。SDとして調査を行ったが、性格的には自然流路跡の可能性も否定できない。山上遺物は弥生土器、石器、土師器、須恵器等である。

SD02出土遺物(第54・55図)

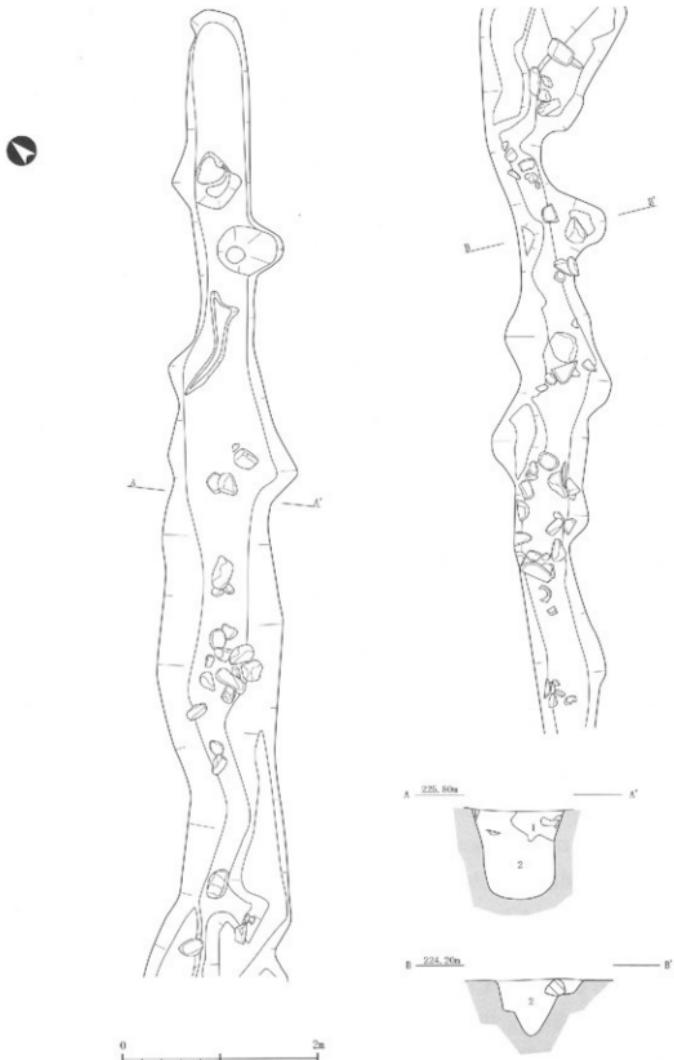
54-1は弥生の甕で口径18.4cmを測る。頸部で括れ、短く直立、外傾し、強く屈曲し内傾する器形で、備後系のIV様式の影響が窺える。2・3は弥生の甕片で擬凹線が廻る。2は口径17.2cm、3は24.8cmで、3は擬凹線を一部ナデ消している。4は非常に小型で口径14.7cm、擬凹線は廻らない。草田6期か。5は複合口縁が退化してきたもの。6は単純口縁の甕で口径18.2cmである。7は口縁部が外反する口径25.1cmの鉢形の土器である。8は口径13.9cmの直口甕で、草田6期。9は口径13.3cmの土師器坏で、内面には放射状に暗文が入る律令的期の品である。10は土師器の低脚坏。弥生甕の底部である。

55-12～18は須恵器である。12～14は坏身で、口径10.8cmを測る。12は坏内面に川の字状にヘラ記号が見られる。12はかえりが短く、13・14はやや長い。15は坏蓋で口径13.6cm、器高3.5cmを測る。16・17は高坏で、16は2方透かしで、一方が三角、もう一方が線刻のみであった。18は口径14.0cmを測る甕である。須恵器は何れも出雲4・5期のものである。

19は黒曜石の剥片である。

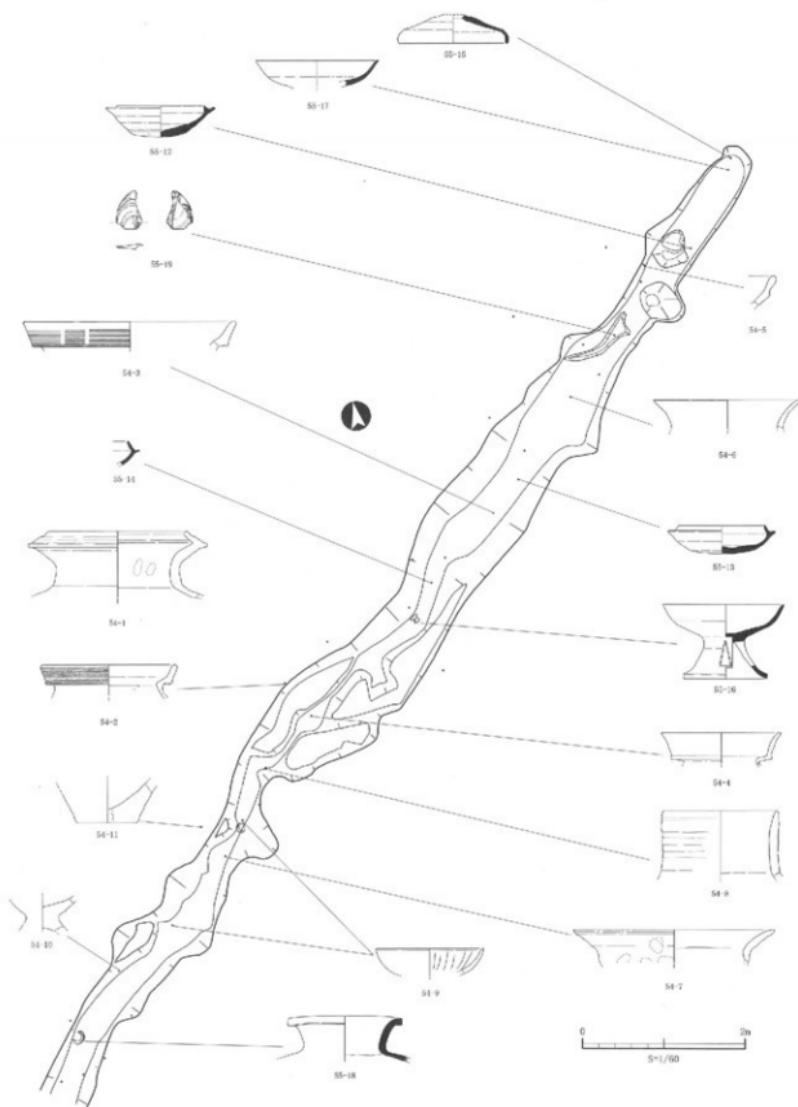
SD06(第47・48図)

4層上面で検出した遺構で、2W・3W・2X・3X・4Xに位置し、SD02の北西に所在する。長さ17.5m以上、幅0.90～1.20m、深さ0.70mを測る。SD02同様、調査区を縦断し、調査区の北壁から

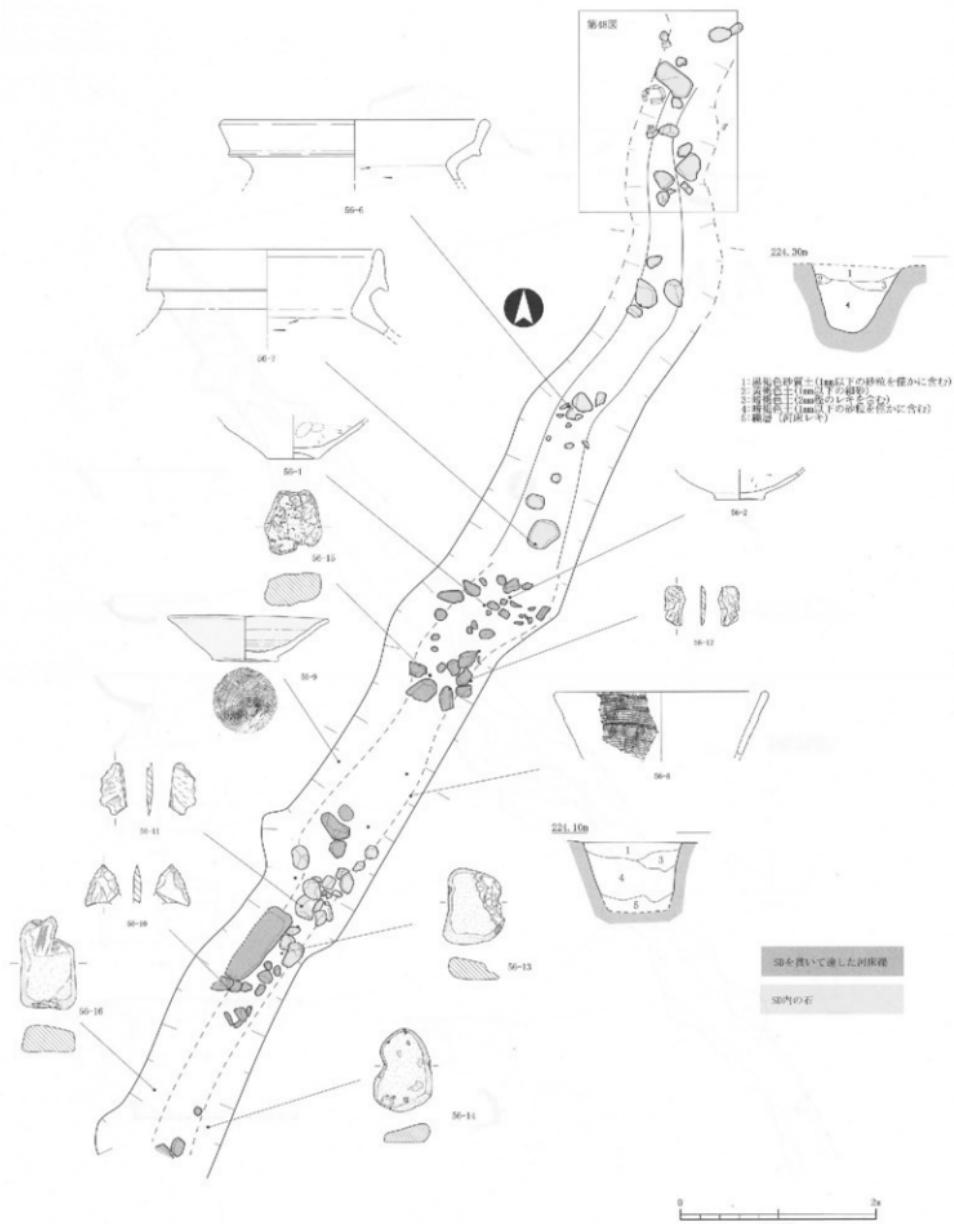


1. 黒褐色色带土
2. 黑褐色砂質土 (1cm以下の砂粒と細砂を含む)

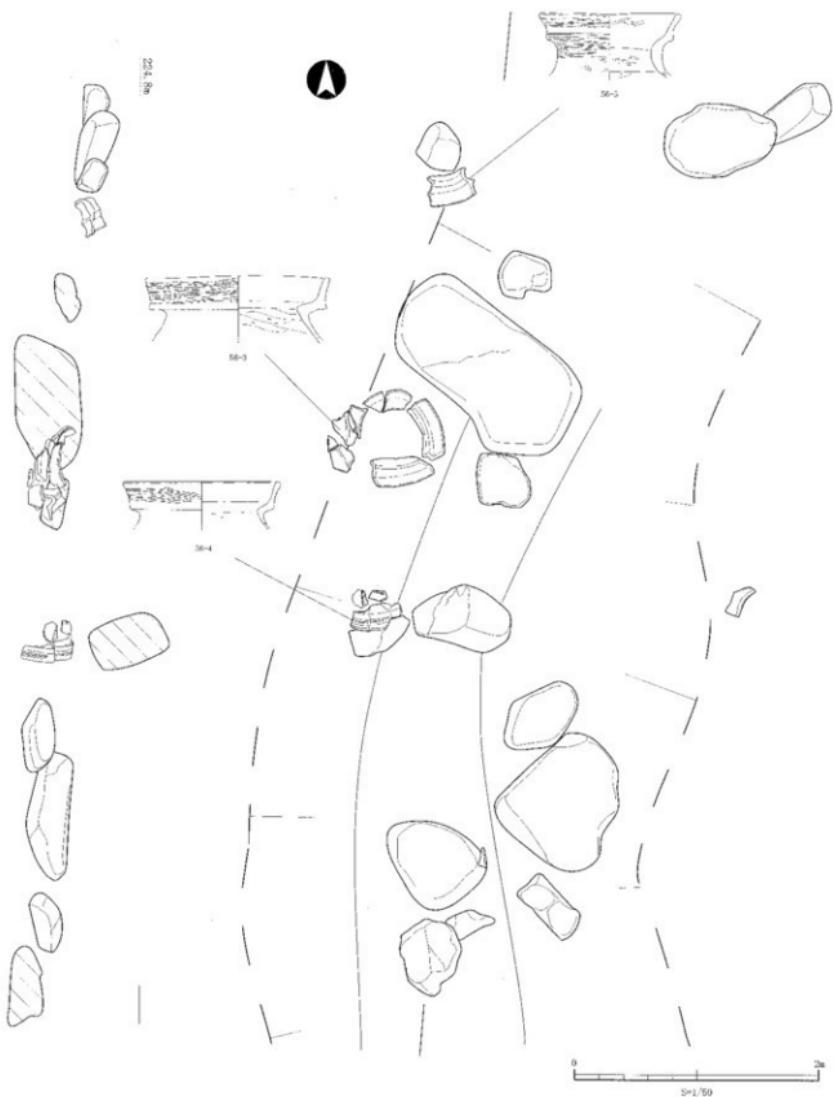
第45図 SD02実測図 S=1/50



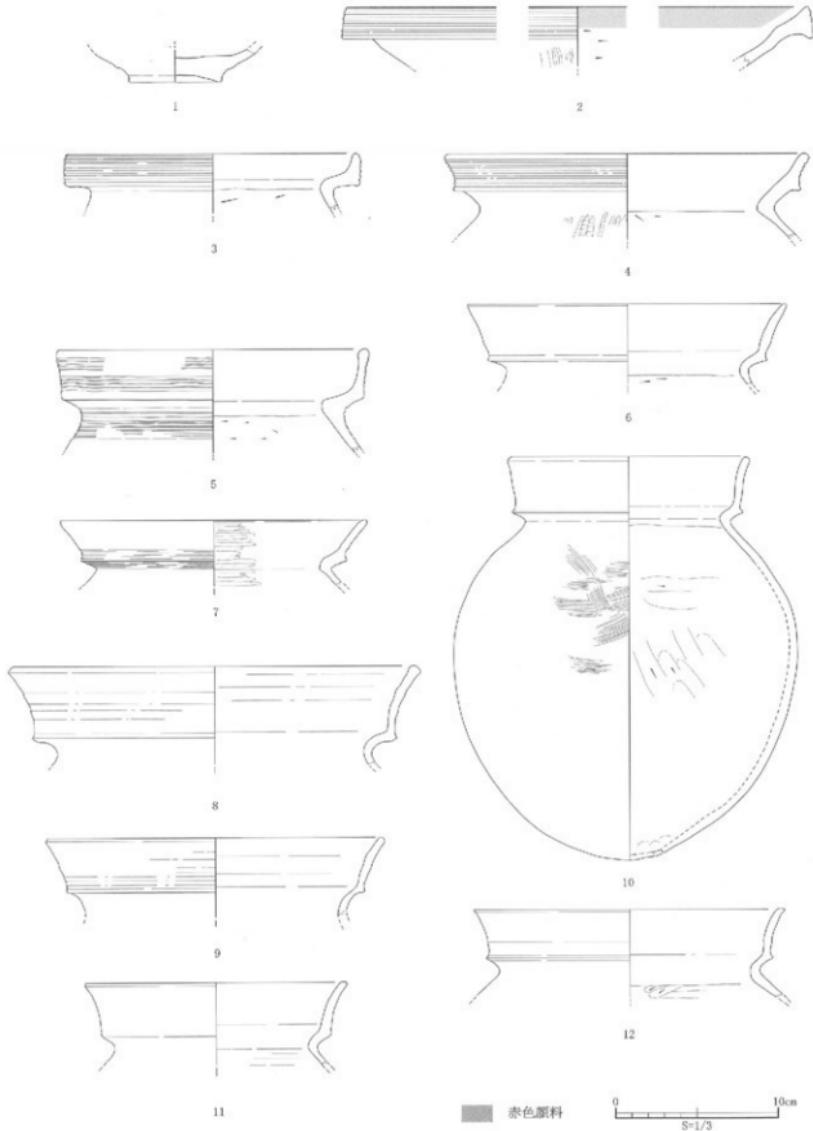
第46図 SD02遺物出土状況 遺構 S-1/60 遺物 S-1/6



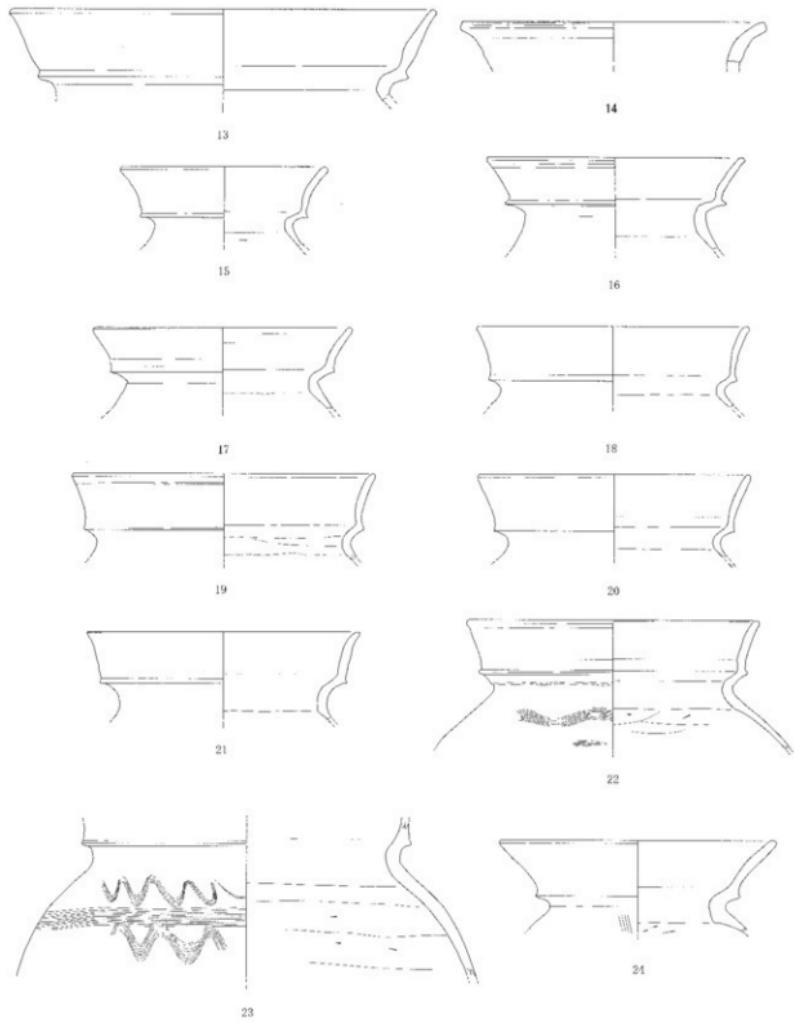
第47図 SD06実測図・遺物出土状況(1) S=1/50



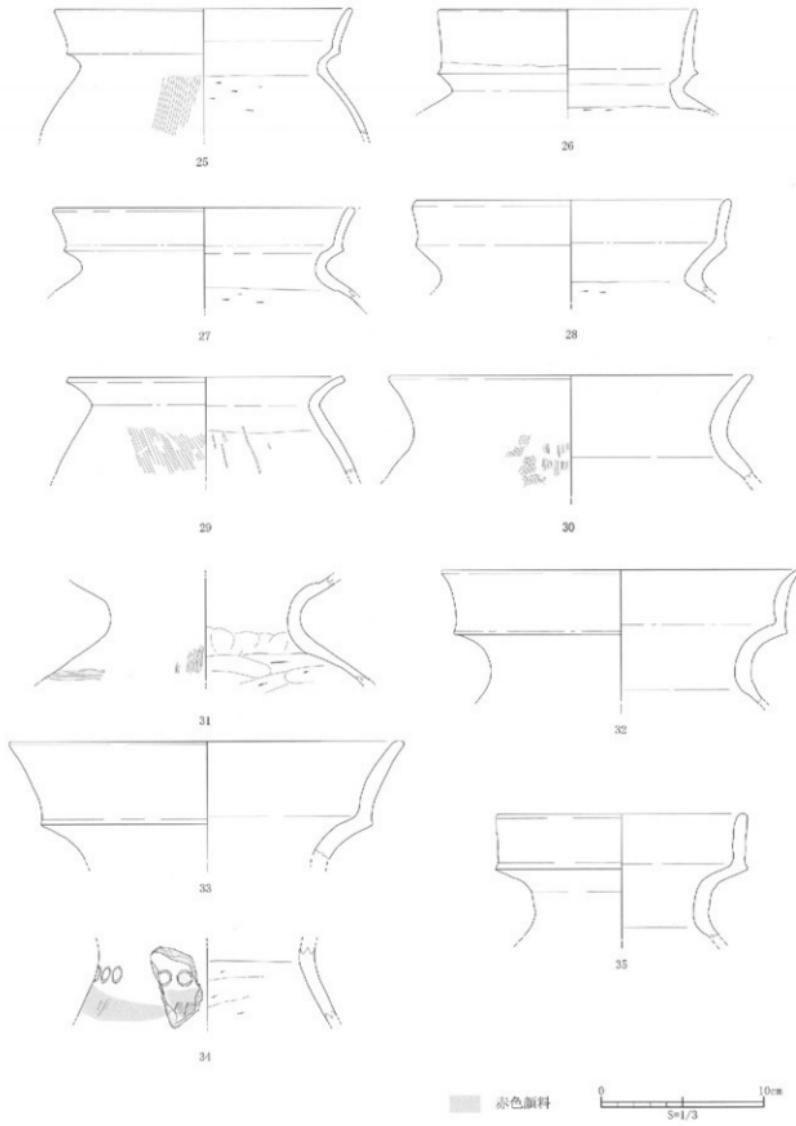
第48図 SD06遺物出土状況(2) S=1/10



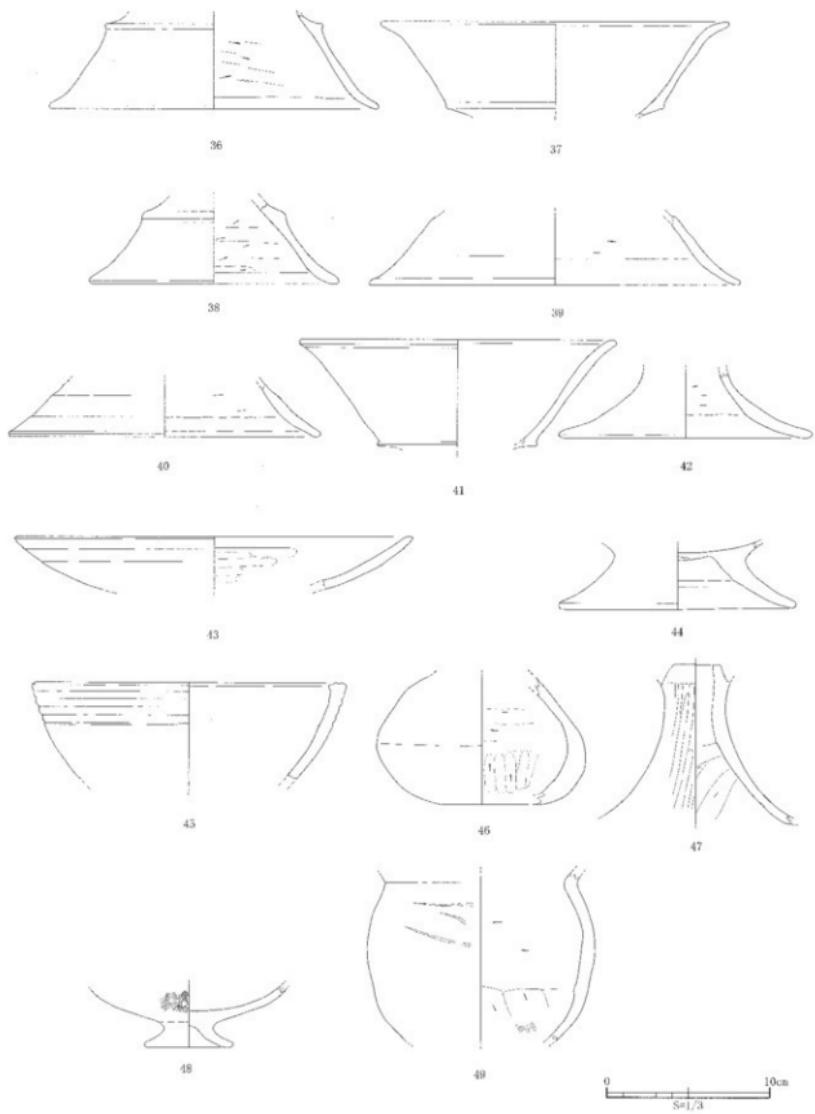
第49図 SD01出土遺物実測図(1) S=1/3



第50図 SD01出土遺物実測図(2) S=1/3



第51図 SD01出土遺物実測図(3) S=1/3



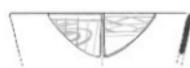
第52図 SD01出土遺物実測図(4) S=1/3



50



51



52



53



54



55



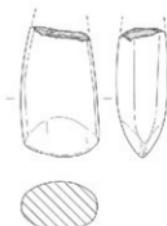
56



57



58



59



60

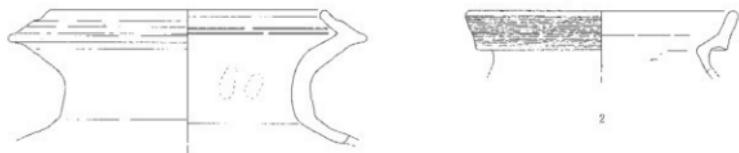


61

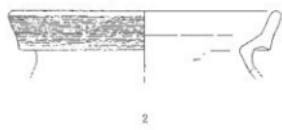


S=1/1

第53図 SD01出土遺物実測図(5) S=1/3 S=1/1



1



2



3



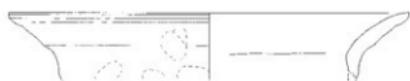
4



5



6



7



8



9



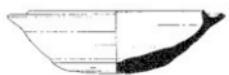
10



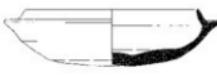
11



第54図 SD02出土遺物実測図(1) S=1/3



12



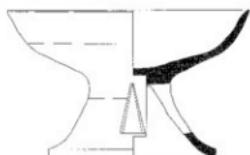
13



14



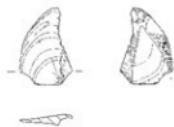
15



16



17



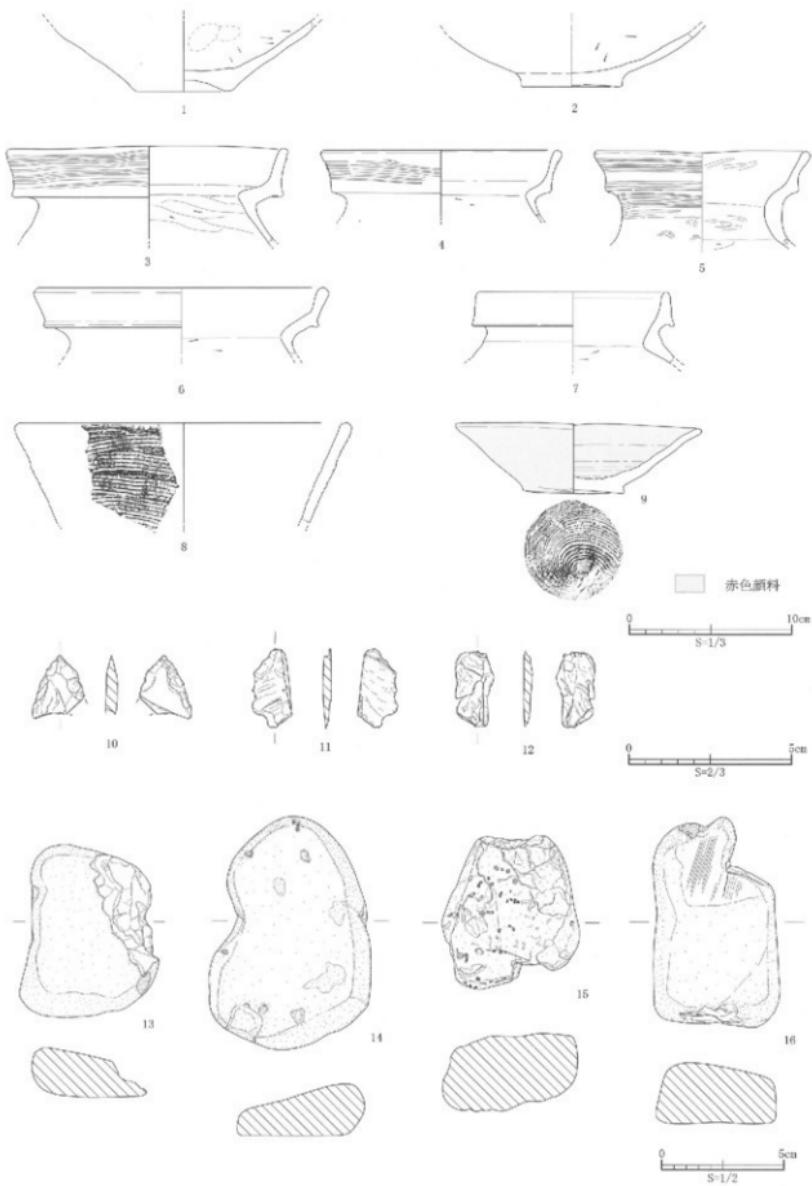
19



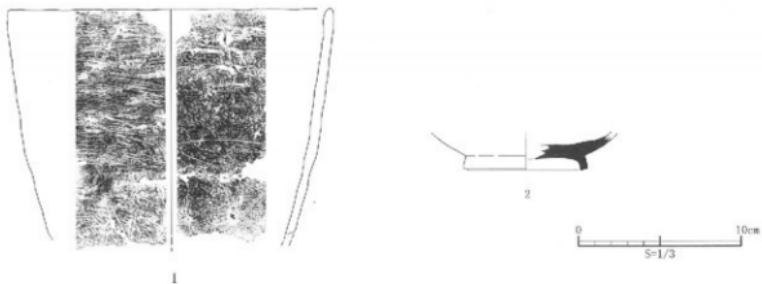
18



第55図 SD02出土遺物実測図(2) S=1/3 S=2/3



第56図 SD06出土遺物実測図 S=1/3 S=2/3 S=1/2



1

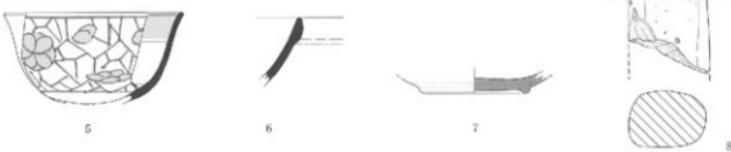
2

0
S=1/3
10cm



3

4



5

6

7

8

0
S=1/3
10cm

第57図 ハイカ層・排土中出土遺物実測図 S=1/3 S=1/6 ハイカ(1-2はハイカ層 他は排土中)

南壁に抜けるものであった。ただ、北側は底面の一部のみ残存していた。埋土は真砂砂粒を含むもので SD02 同様、川石を含み、遺物は縄文土器、弥生土器、石器、土師器であった。ただ、第 47 図に示したように底面を検出しようと掘下げる過程で結果的に下の河床礫群にあたってしまった。検出面若しくは埋土の浅い部分で複合口縁壺のかなり復元できる破片が出土している。これらはあまり動いてない様子が窺えた。

SD06 出土遺物(第 56 図)

56-1・2 は縄文土器の底部。1 は上げ底、2 は平底である。

3~6 は複合口縁の壺、壺で、4 は擬凹線を一部ナデ消すものである。6・7 は口唇が肥厚し、擬凹線が見られない。これらは草田 2・3 期のもの。8 は鉢形の土器で、外面に条痕が横方向に施される。

9 は口径 15.0 cm、底径 6.2 cm、器高 4.2 cm を測る土師器壺で底部は回転糸切りである。内外面ともに赤色顔料が塗布されている。

10~16 は石器である。10 は安山岩製の石鏟で、長さ 1.9 cm、幅 1.6 cm、厚さ 3.6 mm で、片翼が折損している。11・12 は安山岩の剝片。13~16 は何れも石錐としているが、打欠き部分が片側のみ等不明瞭なものばかりであるが、自然のかかり部分を使用したとすると石錐と考えられるものである。

ハイカ層上面出土遺物(第 57 図 1・2)

57-1 は縄文粗製土器。やや外傾する器形で口唇はやや肥厚し丸く仕上げる。2 については取上げ次のエラーと考えられるが、底径 7.6 cm を測る高台壺で、高台の接地面は内側で、短くやや‘八’の字に踏ん張る。底部の回転糸切り痕はナデ消される。

排土中出土遺物(第 57 図 3~8)

57-3 は複合口縁の器台壺部で、V-2 様式か。4 は口径 23.8 cm の高台壺部で、内面上方はミガキ、下方はハケメ調整である。V-4 様式。5~7 は陶磁器で 6 は白磁の口縁部分、瀬戸の皿であろう。8 は敲石、もしくは石斧の基部である。

第5章 II区の調査

第1節 遺構(第58図)

II区は川上側をII-1区、川下側をII-2区として調査を行った。II-1・2区共通して調査中にカナケが山手方向から滲みてきていた。掘下げても鉄分の層状塊が至る所で確認され、またスラグもあることから製鉄関連遺構の存在が窺われた。結果的には、遺構自体は調査区内には認められず(排溝跡の一部かと考えられる箇所あり)、調査区外北東に炉跡が存在する、またはした可能性がある。

II区の大半の遺構は2層上面に集中していた。

以下、II-1区からみていく。

SK21(第59図)

2dでSK22の北側に位置し、不整な五角形をなす。規模は長径0.70m、短径0.63m、深さ0.24mを測る。埋土は暗褐色土で鍛冶滓等を含む。また上方に30cm以下の川石・山石が6個あった。

SK21出土遺物(第60図)

60-1・2ともに椀形鍛冶滓である。

SK22(第65図)

2dでSK21の南側に位置し、平面形は不整形である。長径0.64m、短径0.43m、深さ0.20mを測る。断面形は北東側が僅かに浅く、南西側に最深部がある。最深部に立石が確認された。埋土は暗褐色砂質土であった。

SX53(第61図)

3c・2d・3dに位置する。SK21・22の西側から始り、川側の旧河岸石にぶつかる流路状遺構である。残存長5.40m、幅1.40m、深さ0.28mで南側の底では下の旧河岸石に当った。北側残存部分は後世の畑利用等で削平され非常に浅い。埋土、底面ともに鉄分の滲みた痕跡が確認された。埋土中にスラグを包含している。

SK20(第62図)

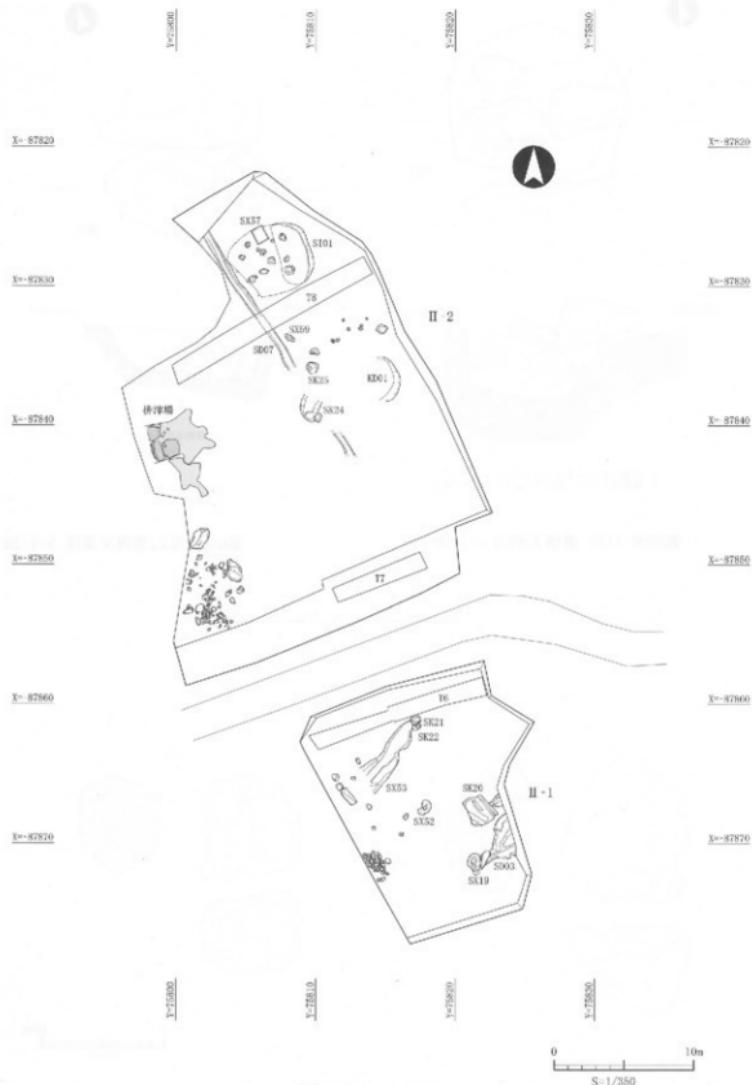
2b・2cに位置し、不整方形をなす。長径2.54m、短径2.14m、深さ0.37m、断面形は整った形状であった。埋土はブロック状に明赤褐色砂質土が入り、擾乱されている。土坑内西側床面近くに平石が据えられていた。

SX52(第63図)

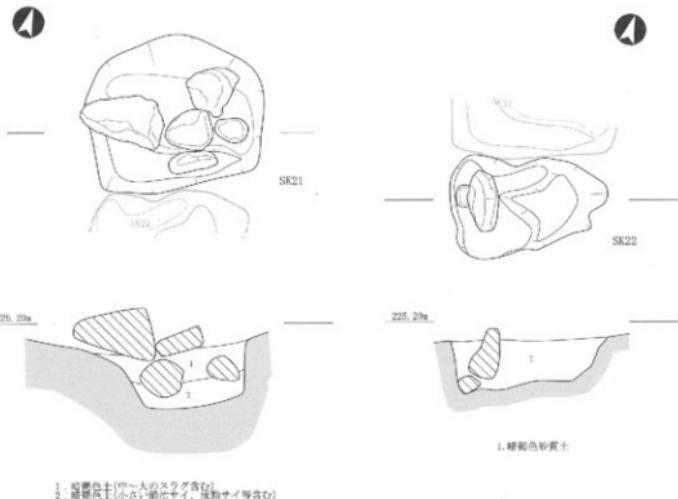
3cに位置し、平面形は不整形。長径1.12m、短径0.58m、深さ0.32mを測る。埋土は暗灰色土で僅かに炭を含む。底面西側に立った状態の山石が確認された。埋土中に流込みと想われる古式土器片が含まれていた。

SK19(第64図)

3bに位置し、平面形は不整形をなし、南側は別ピットを切っている用にみえるが、同時に扱う。

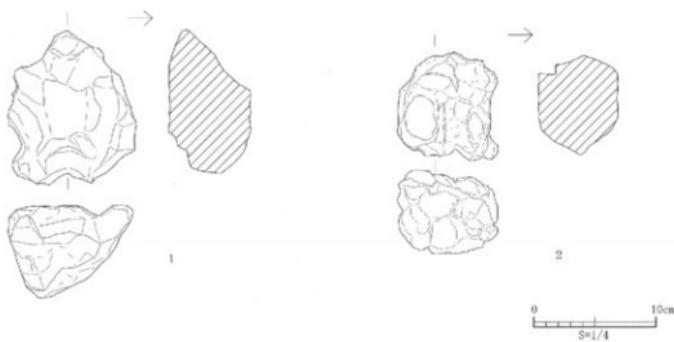


第58図 II区2層遺構配置図 S=1/350

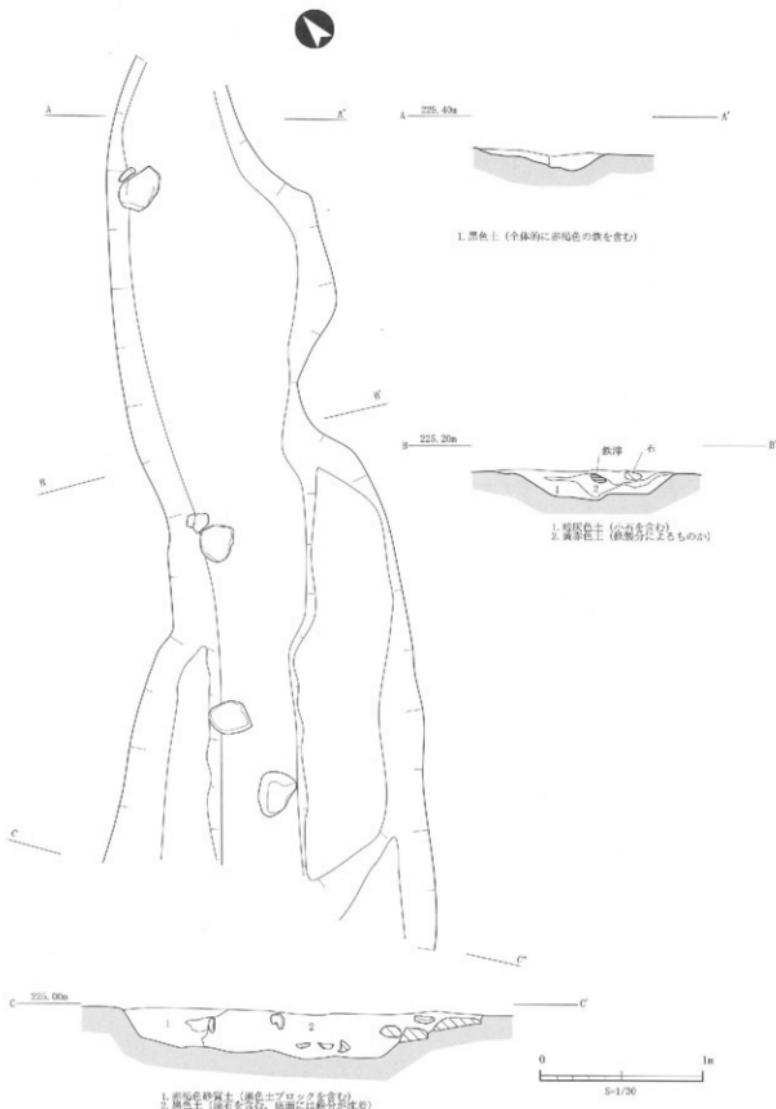


第59図 SK21 遺構実測図 S=1/20

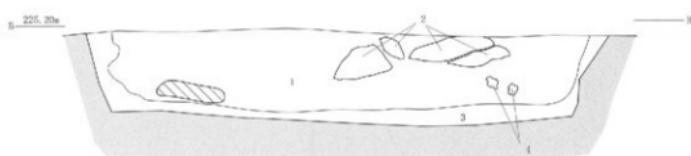
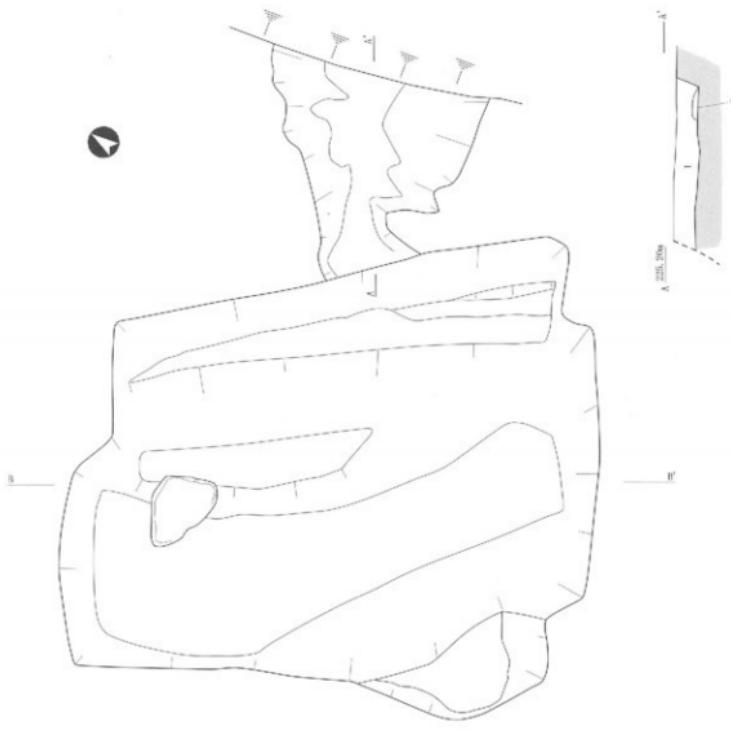
第65図 SK22遺構実測図 S=1/20



第60図 SK21出土遺物 S=1/4



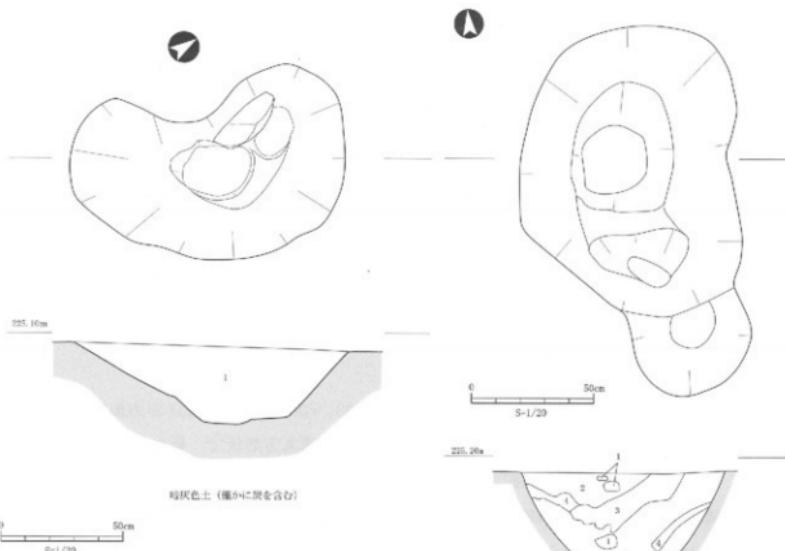
第61図 SX53実測図 S=1/30



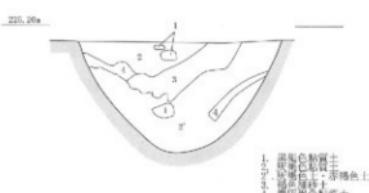
1. 横糞馬糞土
2. 有水馬糞土 (より重い)
3. 有水馬糞土 (水分の吸収したもの)



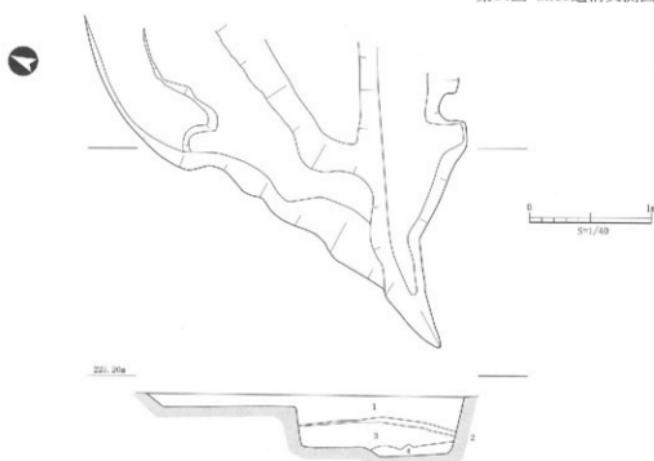
第62図 SK20実測図 S=1/20



第63図 SX52遺構実測図 S=1/20



第64図 SK19遺構実測図 S=1/20



1. 褐色帶化淤泥土 (1mm以下の砂粒を多く含む)
2. 褐色淤泥土
3. にかい灰褐色淤泥土 (1mm以下の砂粒を多く含む)
4. 灰褐色土 (砂砂)

第66図 SD03遺構実測図 S=1/40

長径 1.54m、短径 0.88m、深さ 0.44m を測り、埋土は粘質の上層が帯状をなしていた。性格不明の遺構である。遺物はなかった。

SD03(第 66 図)

2b に位置し、調査区外から始まる溝状遺構である。残存長は 3.20m、幅 2.5m(断面図作製部 分で)、深さ 0.45m を測る。遺物は無かったが、近世以降のものであろう。

以上が II-1 区の遺構である。表土を剥ぎ取るとすぐにこれらの遺構を検出している。性格不明のものが多いが、何れも近世以降のものと思われる。

次に II-2 区の遺構をみてみる。

SI01(第 67 図)

調査区最北端の 2k に位置する堅穴建物跡で柱穴は P238、P260、SX58、P237 が方形に位置し、その中央に P236 が位置する 5 本柱のものである。平面形は隅丸方形状で、最大長 5.31m、最大 幅 4.98m、深さ 0.26m を測る。面積は凡そ 23 m²。西側は既に壁部分が消失しており、東側壁帶 溝は微かに確認できる程度で 3 cm ほど窪む程度であった。P246、P244、P249 は平面形が少し小さく、断面も浅いものであるが、これらを結ぶと三角形となる。これらも SI01 に付随するものであ るうか。出土遺物は無かったが、SI01 の覆土と同じ、周囲の土から草田 5~7 期の土器が確認さ れている。

KD01(第 68 図)

1i に位置する加工段で、地山を切って平坦面を作っている。残存長 3.12m、残存幅 1.50m、 深さ 0.15m を測る。SI01 同様西側は残存せず詳細は不明であるが、堅穴建物跡であった可能性も 否定できない。遺物は無かった。

SK25(第 69 図)

2i に位置し、平面形不整五角形をなす。長径 0.88m、短径 0.80m、深さ 0.53m を測る。西 側床面に更にピット状に深くなる部分があり、二段掘り状となる。遺物はなく時期不詳である。

SX57(第 70 図)

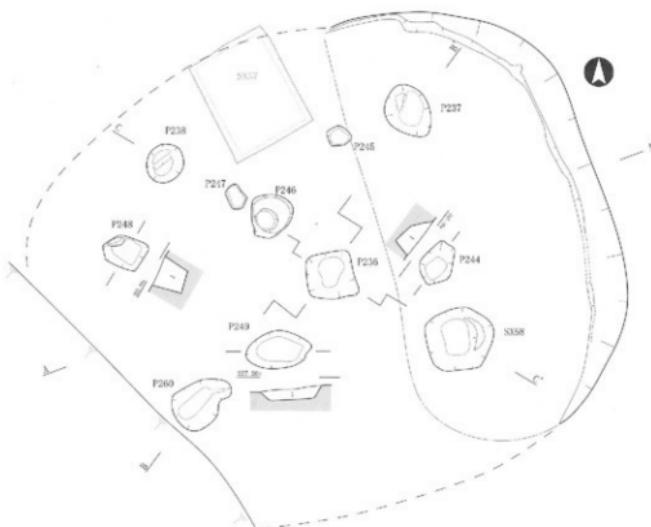
2K に位置し、前述の SI01 床面を切って作られている。平面方形で長径 1.12m、短径 0.86m、 深さ 0.46m を測る。掘下げる過程でやや臭をつく異臭がし、また 3 層中に 5 層灰白粉末が、埋土 中から錆釘片が出土していることから近世墓であろう。他に遺物はなく詳細時期は不明である。

SX59(第 71 図)

2j に位置し、平面橢円形状で長径 0.84m、短径 0.40m、深さ 0.44m を測り、断面は二段掘り 状をなす。表面から落ち込んだとみられる平石が埋土上層から出土。遺物はなかった。

SK24(第 72 図)

2i に位置し、後述する SR01 に北側が切られている。平面形は不整形で、長径 1.60m 以上、短 径 1.40m、深さ 0.96m を測る。埋土は黒色土が厚く溜っていた。埋土中から縄文後期後葉の回線 文系土器と同時期と見られる粗製土器が出土している。遺構の時期を示していると思われるが、



A-227.50m

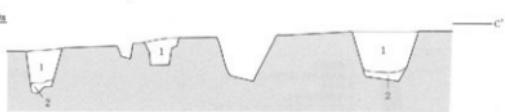


B-227.20m



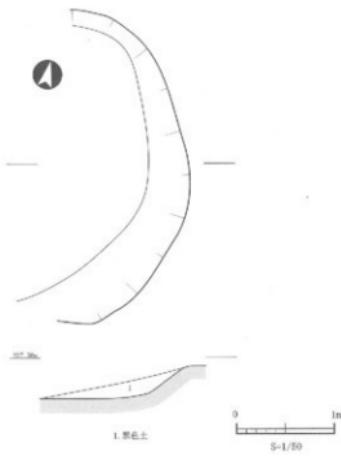
1 黑色土
2 母岩褐色土

C-227.30m

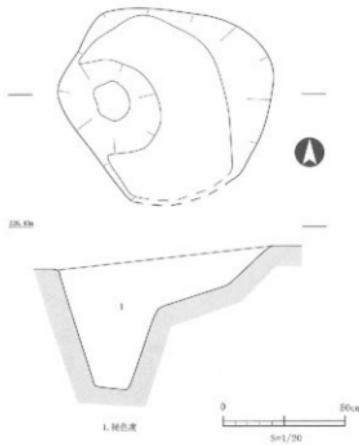


0 1m
S-1/50

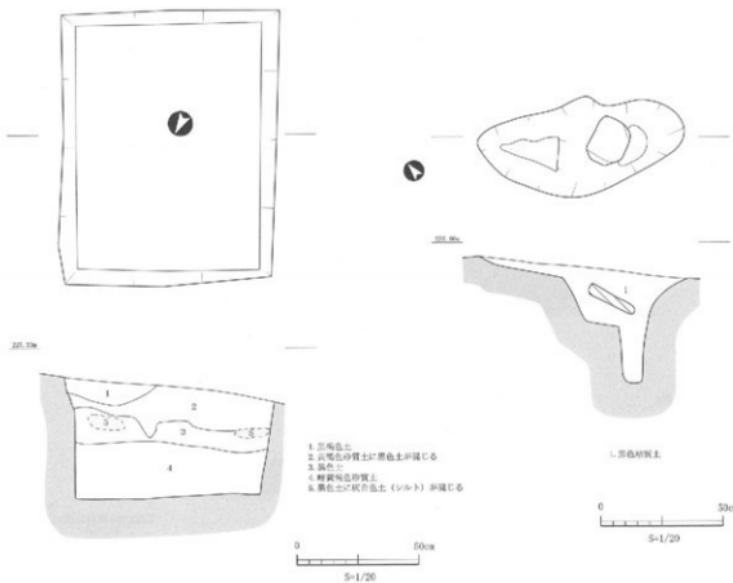
第67図 SI01実測図 S=1/50



第68図 KD01実測図 S=1/50



第69図 SK25実測図 S=1/20

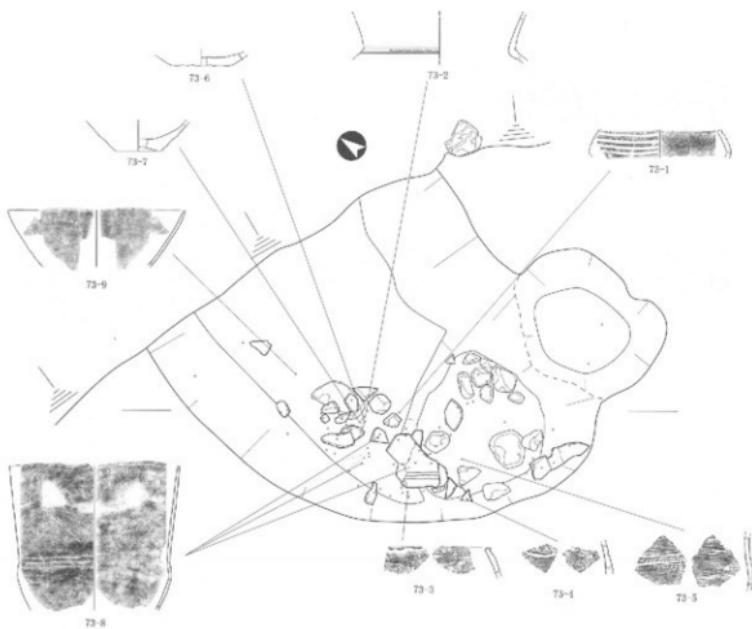


第70図 SX57実測図 S=1/20

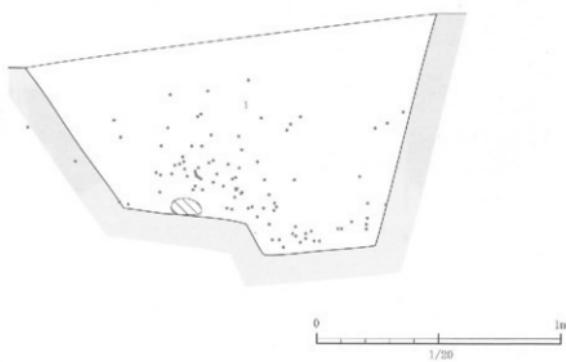
1. 黒色砂質土

0 50cm 5-1/20

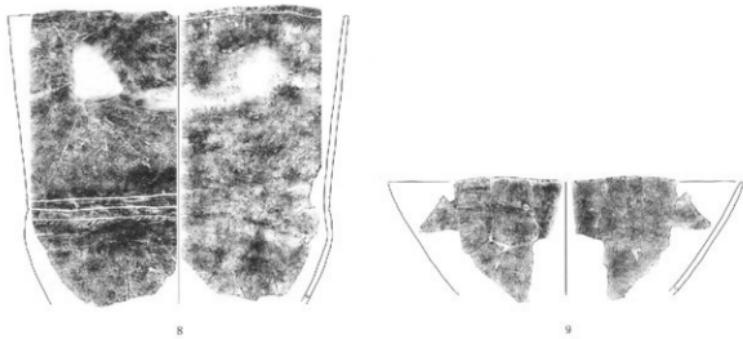
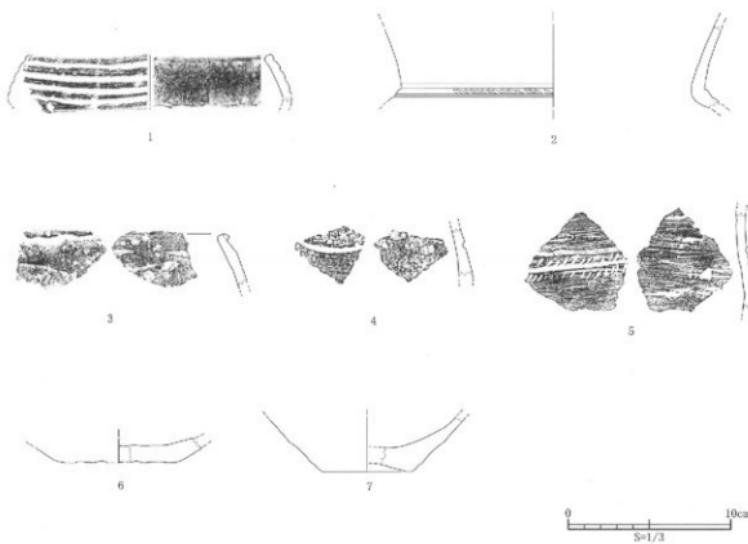
第71図 SX59実測図 S=1/20



...225, 20n.



第72図 SK24実測図 S=1/20



第73図 SK24出土遺物実測図 S=1/3 S=1/6

第73図8はかなりの破片が復元でき、その場で壊れたようであった。土器埋設遺構であった可能性もある。

SK24出土遺物(第73図)

73-1は口径14.8cmで、口縁で緩く内傾する器形で、外面は3mmほどの凹線文が1条彎る鉢で、後期後葉の凹線文土器である。2は頸部で強く括れる甕で括れ部で2条の沈線をおこない、その間に刻むものである。3はやや口縁端部が外側に折曲げられた粗製深鉢。4は外面に擬似縄文を施し、器形は内傾する注口または壺型土器である。彦崎K2式併行である。5・8は胴部が張る僅か上部に沈線を行ないその間に刻みを施す粗製深鉢である。同一個体かと思われたが、器厚、胎土から別個体と判断した。6・7は縄文土器底部で浅鉢であろうか。9は朝顔状に開く浅鉢である。

SD07(第74図)

2h・2i・2j・2k・3k・3lを通る残存長19.1m(中程でSR01に切られる。図の点線部分)、幅0.47~0.63m、深さ0.46mを測る。

SD07出土遺物(第74図)

床面近くから出土したのが1で複合口縁甕で、口径17.8cmである。口縁端部や突出部から草田5・6期のものであろう。2は土師器の手捏ね土器片。3は流れ込みにより表面近くに止まったものであろう。高坏の脚部で二方透かしを有する。一方は三角透かし、反対側は線刻のみとなっている。出雲5期前後である。

排溝場跡(第75図)

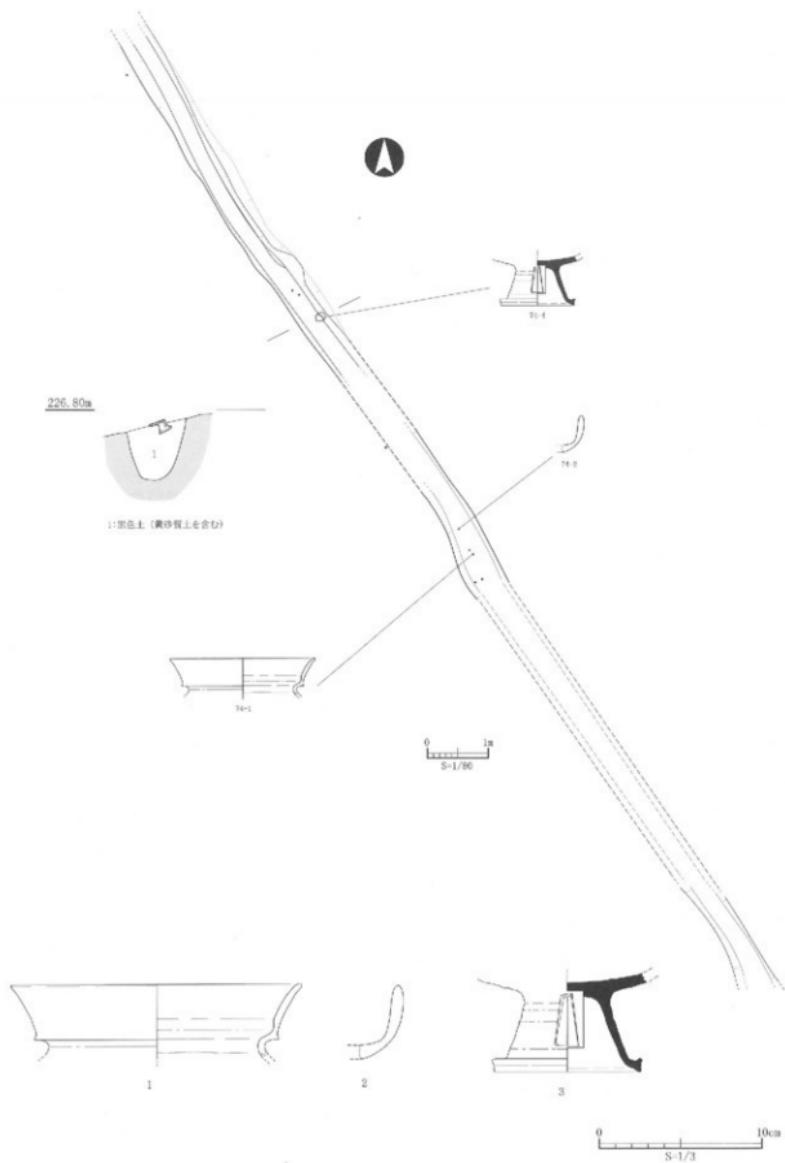
II-2区に厚く堆積していた遺物包含層である3層黒色土を掘下げる過程で検出した遺構で、再結合溝、羽口、炭、粘土、焼石等が多くみられるようになり面的な拡がりをみせた。(第75図)平面範囲は再結合している範囲が4.50m×6.00mであった。範囲の中央を断割り、断面を確認した。幾層にも溝が結合した様子が窺えた。またその再結合溝上面は平たくなっており、複数回作業場としての機能を果たしていたようである。⁵炉自体はすぐ東側のレベルの高い場所にあったと想定されるが、既に消失している。排溝場跡の炭で年代測定を行なった結果、11世紀中～後半の数値を得ている。

排溝場跡出土遺物(第76・77)

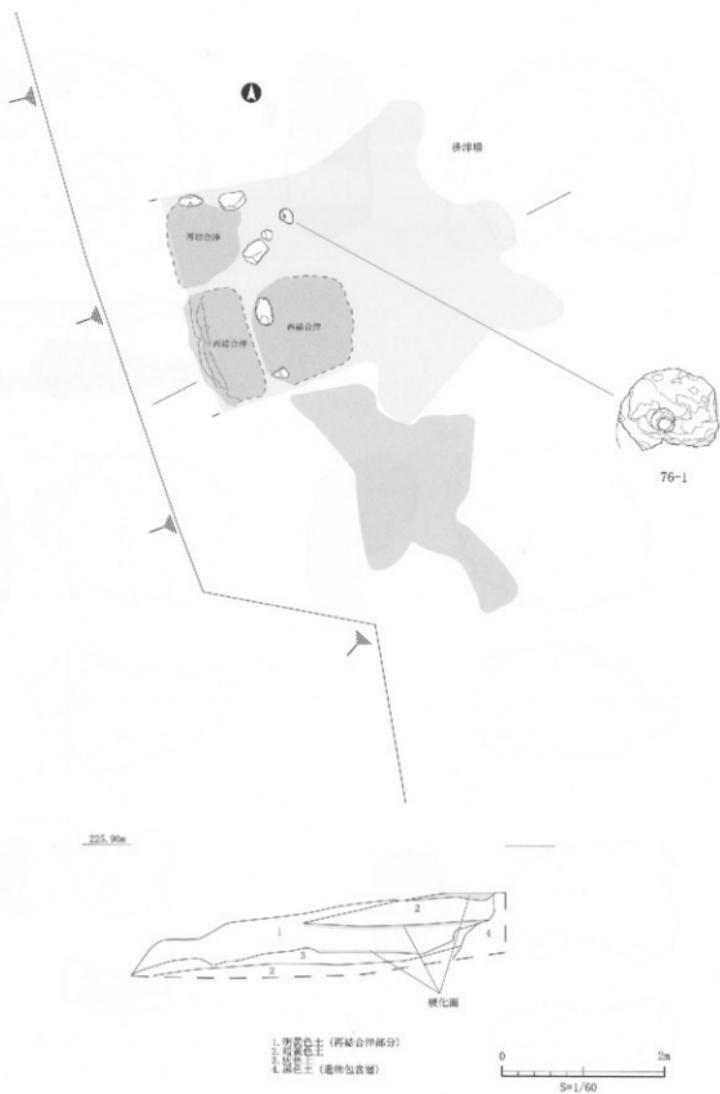
76-1~77-16は製鉄関連遺物である。1は板屋型羽口である。⁵ 資卷痕は見られない。外径は20cm弱である。2~5は大小があるが、湾型溝である。5には粘土部分が付着している。77-6~16は流出孔溝または溝溝である。6には粘土部の付着が見られる。

第2節 3層(包含層)出土遺物(第80~88図)

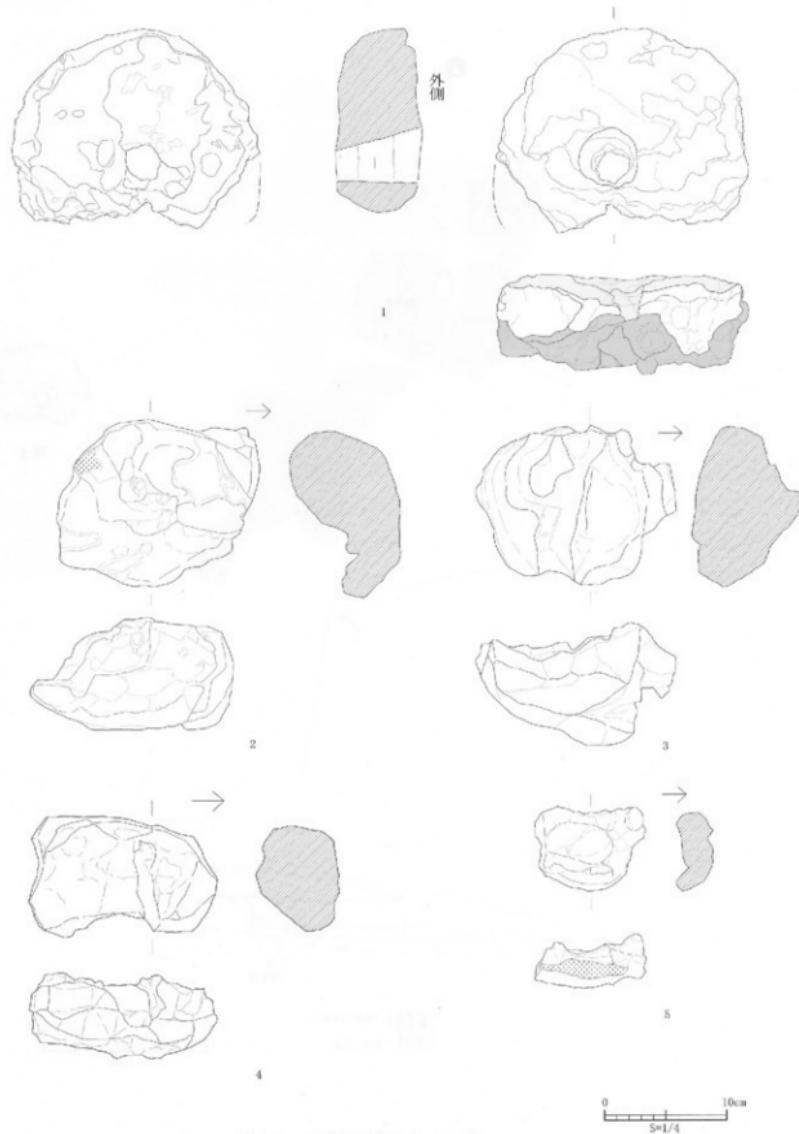
II区の包含層出土遺物は、II-2区の3層出土遺物のことである。調査区北隣の民家の方向から大量の遺物が流れ込み堆積していた。遺物は、縄文時代早期押型文土器から近世陶磁器まで時期幅があるが、流入堆積の為遺物が上下混在しており、また上層観察で分層不可能であった為、一



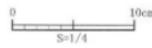
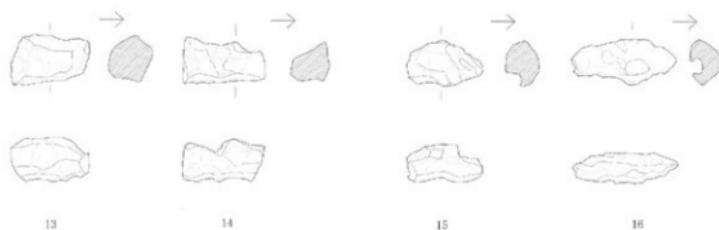
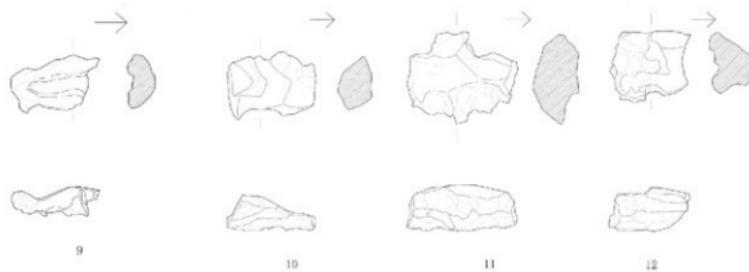
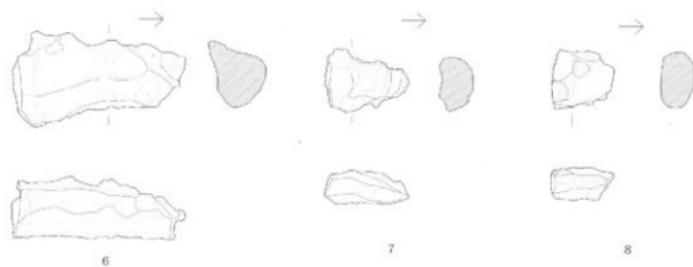
第74図 SD07遺構・遺物実測図 遺構: 平面図 S=1/80 断面図 S=1/40
遺物:S=1/3



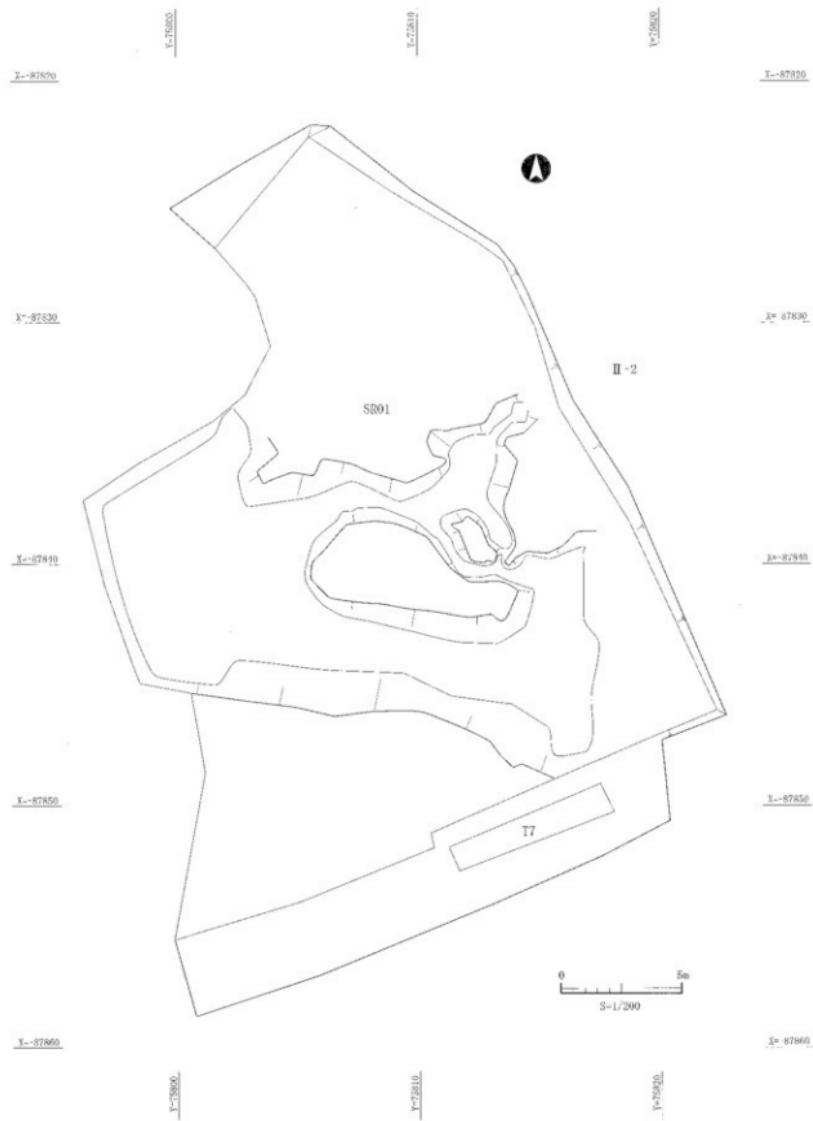
第75図 排洋場跡実測図 S=1/60



第76図 排溝場跡出土遺物実測図 (1) S=1/4



第77図 排津場跡出土遺物実測図(2) S=1/4



第78図 III-2区3層下図造構配置図 S=1/200



227.20m



I. 黒色土（遺物包含地）

0 5m
S=1/150

第79図 SR01実測図 S=1/150



第80図 II 2区 3層出土遺物分布図・断面図 S=1/200

括で扱うこととした。結果的には二条の流路跡 SR01(第 78~80)を流れて溜った遺物がこの包含層出土遺物ということになる。

81~1~83~53 は縄文土器である。

1 はポジティブな楕円押型文土器である。楕円がさほど大きくない早期黄鳥式である。

2~22 は無文の粗製土器である。細片が多く傾きについては不安があるので、口唇部分の形状・調整について観察し、分類する。

口唇部をみると丸く仕上げるもの(2~5・9・13)、面を意識して平坦につくるもの(6~8・10・11・14~16・22)、先尖りのもの(12・17~21)がある。

丸く仕上げるもの調整は、すべて内外面ともナデ調整である。

平坦のものの調整をみると、7・8・10・11・15・16 は内外面ともナデ調整、6 は外面がミガキ、14 は内面に板状工具による擦痕がみられ、22 は内外面とも二枚貝条痕がみられる。

先尖りのものの調整は、12・17・18・20・21 はすべて内外面ともナデ、19 は内外面とも条痕調整であった。

82~23~47、83~52・53 は有文の縄文土器である。

23~25 は口縁内面に沈線と刻目を有する浅鉢である。26~33 は何れも回線文系上器である。34・35 は口縁端部で強く屈曲する波状口縁をもつ。36・37 は注口または壺形土器の肩部である。36 は外面の卷貝による擬似縄文帯に赤色顔料痕が残る。38・39 は施弾型粗製深鉢の括れ部分に沈線と刻目をもつもの。42・47 は外面に下弦弧線文を施す。43・44・46 は細めの沈線区画内に擬似縄文を施すもので、注口土器若しくは壺形土器である。83~52 は口縁外間に 3 条の凹線を廻らせ 2 段に刻目を施す。53 は表面の摩滅が著しいが、2 条の深い弧線文とその内側に僅かに擬似縄文が観察できる。以上は、38・39 を除き何れも後期後半(彦崎 KII 式)を中心とする土器である。

48~51 は底部破片で 48・51 は上げ底、49・50 は平底である。51 は弥生土器の底部かもしれない。

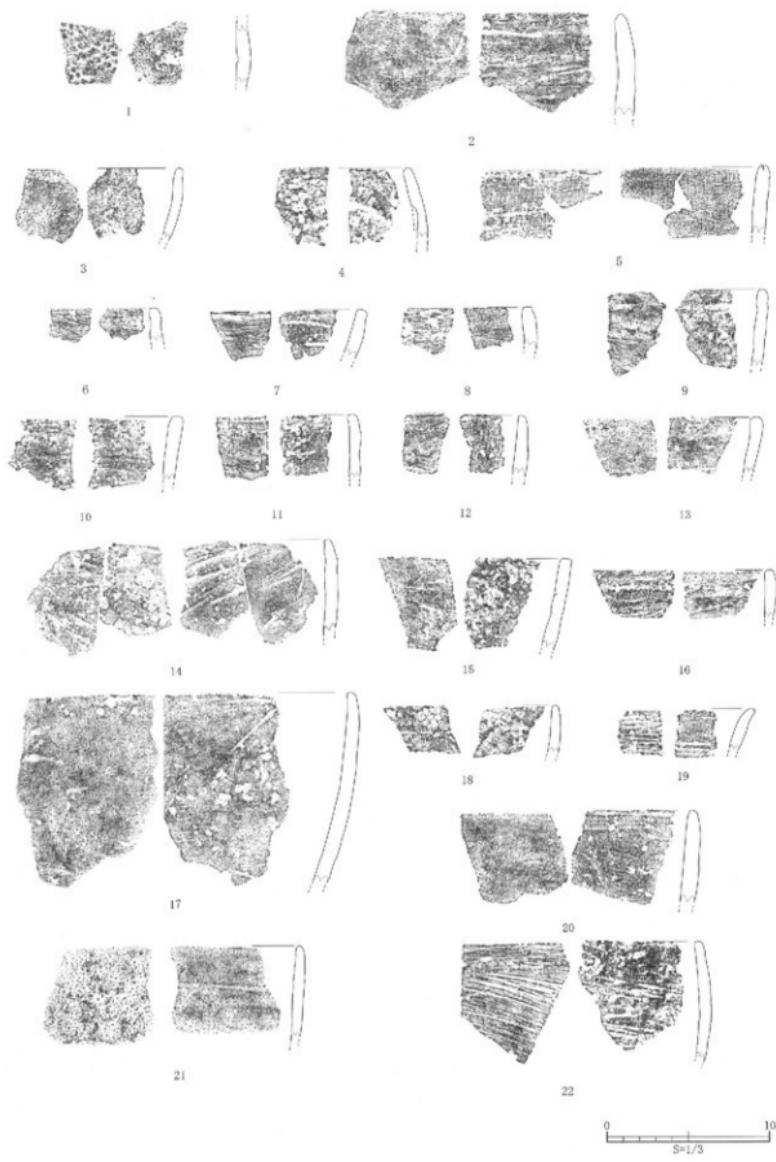
83~54~84~67 は弥生時代後期~古墳時代前半の土器である。

54~62 は何れも複合口縁甕である。54 は器壁が厚く、口縁がやや内傾するもので V-1 様式。55~62 は複合口縁は無文化し総じて口縁端部が外方向へのび、または折曲気味のものもある。61 はやや器壁が厚い。以上は、草田 6・7 期である。

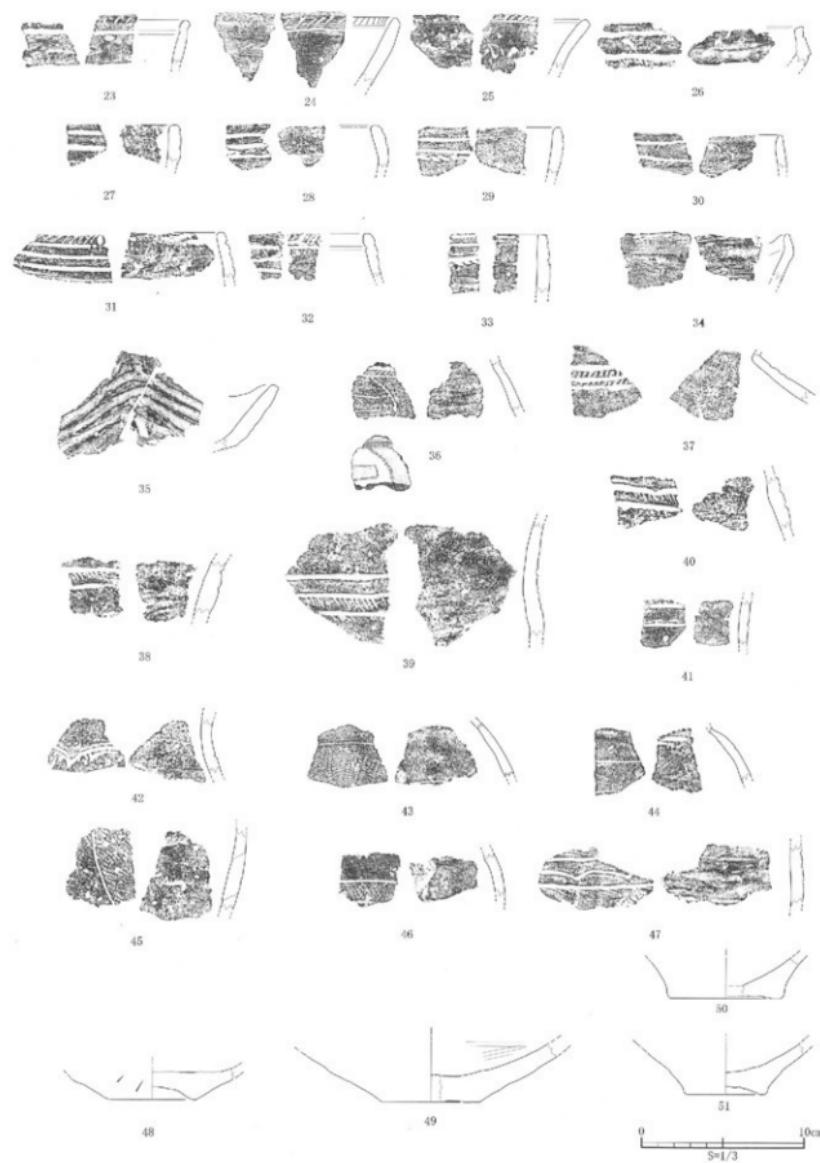
63・64・66・67 は高坏で 63・64・67 は坏部分、66 は接合部分である。65 は細かい擬凹線が廻る器台の脚部である。65・66 とも端部は外方向にのびる。

68 は手捏土器で内外面とも指頭圧痕が顕著に見られる。製塩土器であろうか。69 は瓶の把手部分。70 は壺形の手捏土器で、時期不詳。71 は高坏の坏部、72 は外傾する器形で端部で肥厚する鉢である。

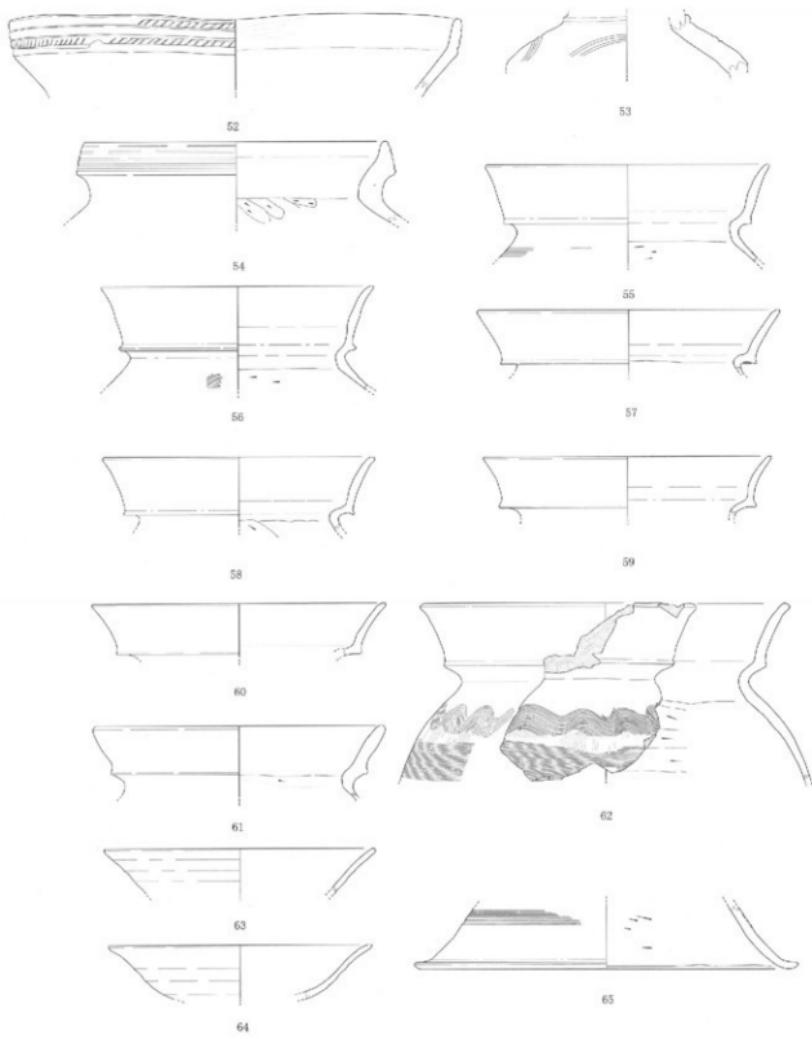
74・75 はざんぐりした印象の低脚杯の脚部で、74 は内面に赤色顔料を塗布する。76 は柱状高台で鎌倉期若しくは平安に遡るかもしれない。^{**}



第81図 II-2区3層出土遺物実測図(1) S=1/3

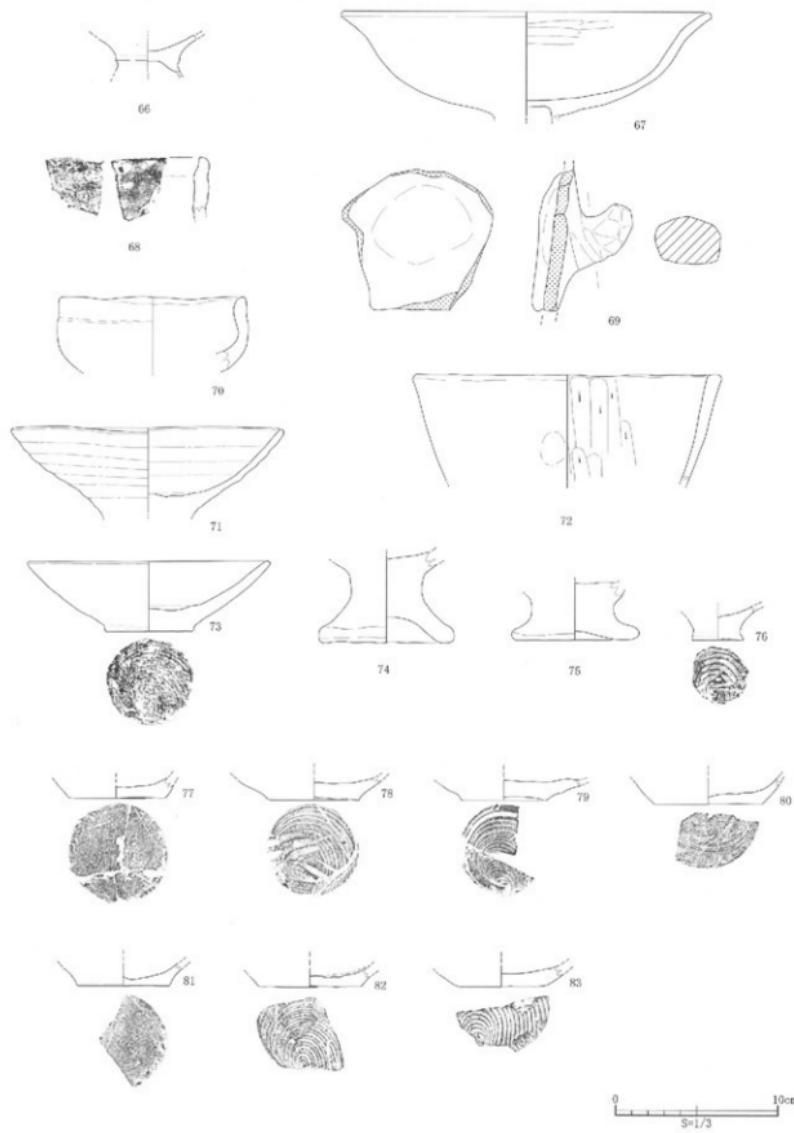


第82図 II-2区3層出土遺物実測図(2) S=1/3

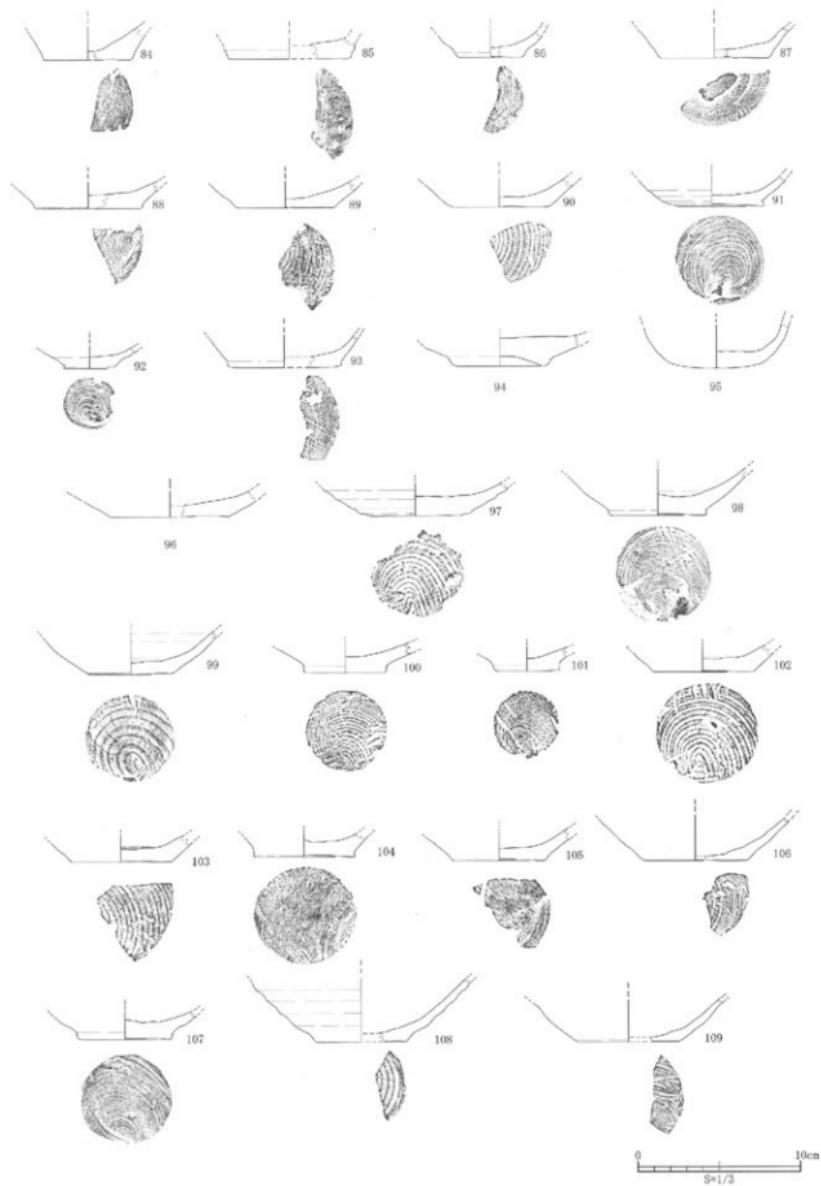


0 10cm
S-1/3

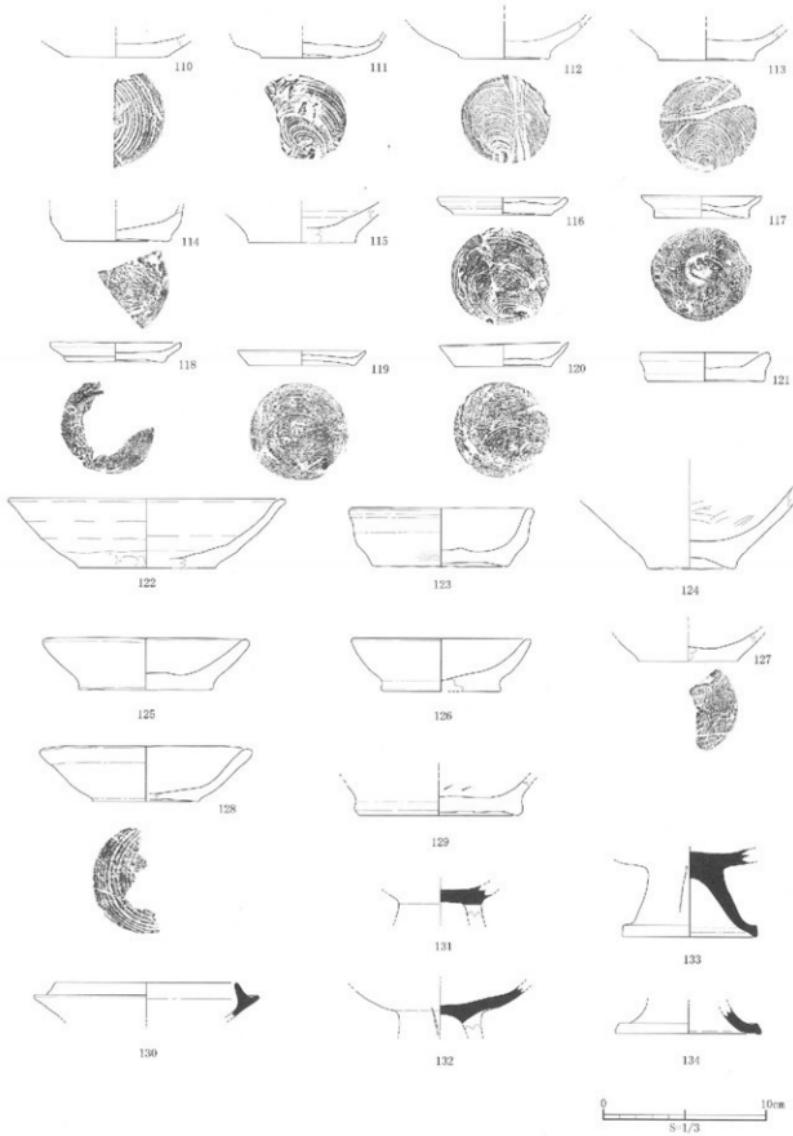
第83図 II-2区3層出土遺物実測図(3) S=1/3



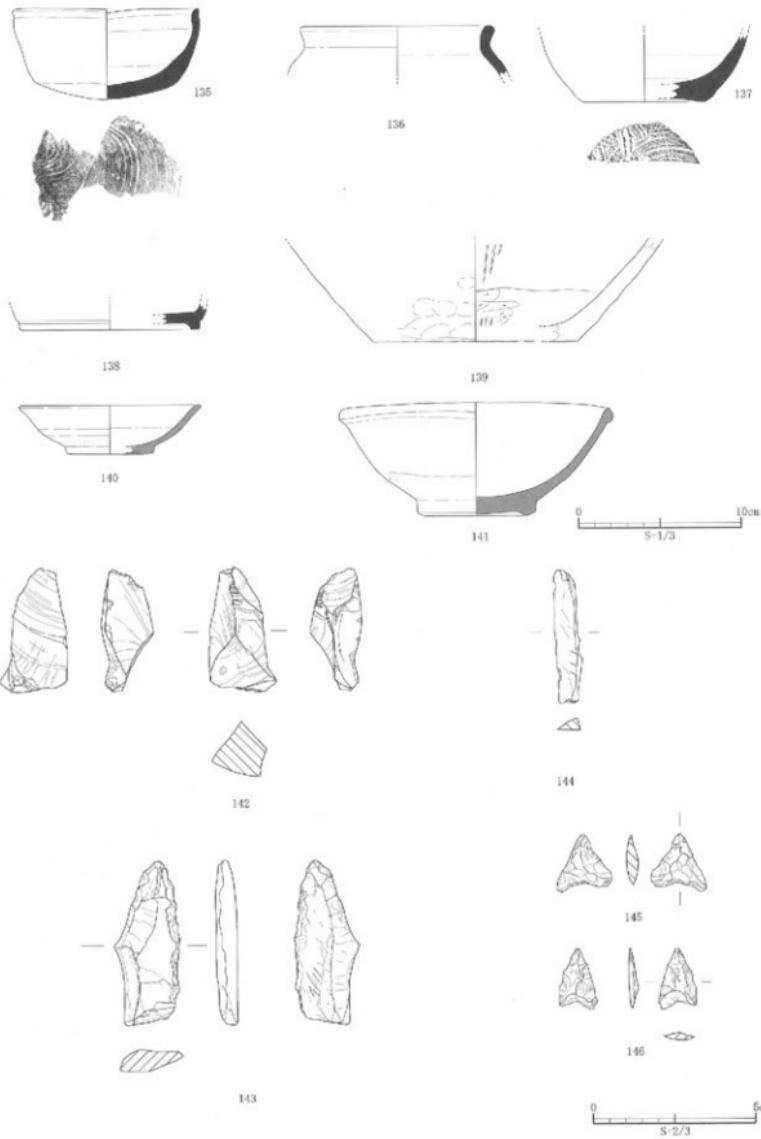
第84図 II-2区3層出土遺物実測図(4) S=1/3



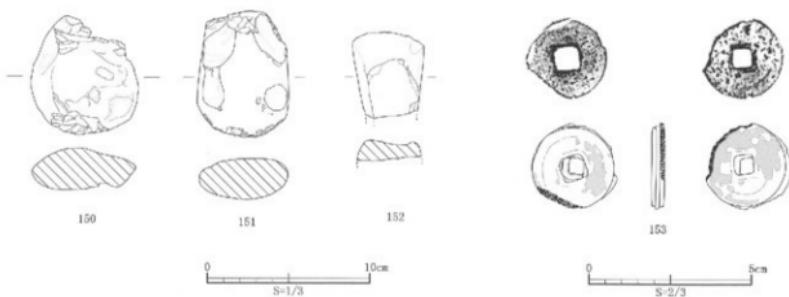
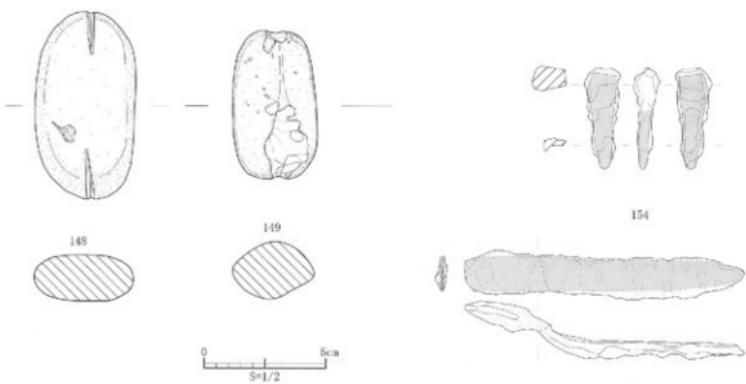
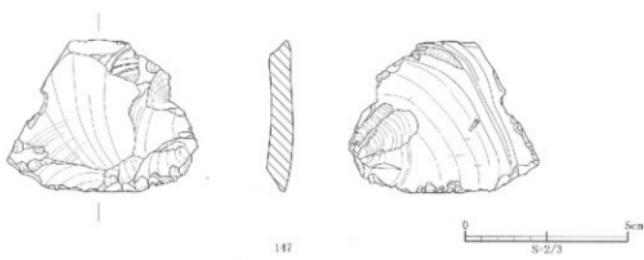
第85図 II-2区3層出土遺物実測図(5) S=1/3



第86図 II-2区3層出土遺物実測図(6) S=1/3



第87図 II-2区3層出土遺物実測図(7) S=1/3 S=2/3



第88図 II-2区3層出土遺物実測図(8) S=2/3 S=1/2 S=1/3 S=1/4

73・77～86-129は古代末～中世の土師質土器である。これら壺・皿等のほとんどが平底で、底部切離しが観察できるものについては拓本を掲載している。これらの詳細については観察表を見て頂きたい。

86-130～87-138は須恵器である。130は出雲5期の壺身、131～134は高壺で134以外は何れも2方向透かしをもつ。131は残存部分から一方は台形状、もう一方は線刻状のものであろう。132・133は2方向とも線刻である。87-135の壺は底が丸く尖るような形状をしており失敗作なのか全く実用的ではない印象を受ける。静止糸切り痕が顕著である。136・137は壺の口縁と底部である。138は高台がつく壺であろうか。底円周に近い部分に短くほぼ垂直気味に高台がつく。律令期のものである。139は内面が灰褐色、外面が淡黄褐色に熱変色している擂鉢である。140・141は磁器碗である。

87-142～88-152は石器である。142は黒曜石の石核。143は石錐で先端部分は潰れている。144は石錐の木製品であろうか。145・146は石鏃で何れも弱い凹基式である。以上は安山岩製である。88-147は黒曜石製のスクレーパーで両肩部に抉りを作るものである。148・149は石錘で、148は長軸両端に有溝、149は打欠きを施す。150は長軸端に人為的剥離が見られ、敲石か石錘と考えられる。151・152は磨製石斧で、151は基部が欠損し、152は片面のみの残存で表面も剥離している。

153は古錢で鋳化・風化が著しく3固体が固結した状態で出土した。錢種は不明である。

154・155は鐵製品で154は鑿、155は幅広であることから刀・包丁の可能性が考えられる。検出時に上庄のためか既にくの字に折曲していたが、元々は曲っていなかったものと考えられる。

第6章 自然科学分析

第1節 御崎遺跡埋蔵文化財調査に伴う土壤分析結果報告書

島根大学生物資源科学部土壤圈生態工学研究室

増永二之・佐藤邦明

1、目的

平成20年8月、奥出雲町教育委員会埋蔵文化財調査室より依頼された土壤標本6点について、遺構の性格を土壤の理化学分析により調べること。

2、方法

土色を観察しその後、一般理化学性分析を行なった。炭素(C)・窒素(N)はヤナコ CNCORDERで測定した。その他の無機元素は土壤を0.1規定塩酸溶液(土壤:溶液=5g:30mL)で2時間抽出を3回反復後、100mLとして、抽出液を島津製のICPS2000(高周波プラズマ発光分析装置)及びAAS-680(原子吸光分光光度計)で分析した。

3、結果と考察

サンプルの種類、土色、分析結果を表1~3に示した。各元素の濃度は105°C乾燥土当たりで計算してある。

本遺跡は、調査前までは水田の下に位置し、山から川方向への扇状地状地形にあることから、灌漑水や増水等による溶脱・集積や浸食作用を受けているものと推測された。

また、遺構外のレベルの高い場所において、近世の製鉄遺構の存在が示唆されており、遺構内には製品を作る時に出る、「かす」や「カナケ」が滲みだしている状況が見受けられたとのことである。

しかし、今回のMo、Zn、Cuの分析結果は、これまで同様な分析手法で行った他の遺跡土壤分析と比較して同じような結果であった。Mnにおいては、何点か高い値を示すところもあった。調査地が水田下とのことで、還元溶脱したMnが集積したとも推測された。そして、比較的高濃度のCa濃度が、全サンプルを通して検出された。

また、本調査地では、土色の肉眼的観察において黒ぼく土的性質が強く、炭素含量も比較的高い値を示していた。過去に行った、斐伊中山古墳群一西支群一(1994年3月)の調査結果では、埋葬主体床面の屍体位置同定において、屍体のあったと思われる土壤面から多量の可溶性リン(P)が検出された。本調査地では、水田や増水による溶脱作用が推測されたが、黒ぼく土の特徴として、アルミニウム活性が高く、高いリン吸着能を示すことより、リンの値を墓坑用途の指標として、ある程度用いることができるのではないかと推察された。

以下に、各サンプルの詳細を示す。

比較用のサンプルであるNo.6の土壤で非常に高いCaが検出された。Caは比較的動きやすい元

素でもあり、施肥由来等によって移動集積したものや、農業等による人為的要因が考えられた。また、No. 6 では炭素や他の元素も含め比較的高い値を示し、位置的に物質が蓄積しやすい場所であったのではないかと推測された。

No. 1 (SK18) では、やや方形を呈するプランで、墓坑の可能性が調査時の所見で示唆されていた。分析結果からもCa やP の値が高く、遺体埋設用土坑としての可能性が示唆された。しかし、全サンプル中このサンプルのみ、肉眼的観察より炭が見られ、炭由来のCa やP が検出された可能性も考えられた。本遺跡では、小炭焼きを行った小型の炉が存在しているとのことで、本土坑も炉であったのかもしれない。

No. 2 (SK24) では、縄文時代後期末ごろの土器が一個体分復元できそうなほど出土し、亡くなつた小児等を収めた棺として使用されたのではないかと、所見で推察されていた。しかし、分析結果からは、Ca、P ともに低い値を示しており、遺体埋設用土坑の可能性は否定された。所見で水流れの吹きだまり状の流れのゆるい所に土器がたまつたものと推察されており、強い溶脱作用を受けたことも考えられた。

No. 3 (SK15) では、No. 1 (SK18) と同様に、やや方形を呈するプランで、墓坑の可能性が調査時の所見で示唆されていた。分析結果からもCa やP の値が高く、遺体埋設用土坑としての可能性が示唆された。No. 1 (SK18) とは異なり、肉眼では炭は見られなかった。

No. 4 (SK23) は、No. 1 (SK18) 、No. 3 (SK15) に比べ、やや小型であり椭円形プランである。分析結果としては、No. 5 (SK23・付近土) と比較しても大きな差がなく、Ca、P の値も低いことから、遺体埋設用土坑の可能性は低いと考えられた。

表1 土器サンプル

No.	名前	位置	点
1	SK18	サンプルNo.15	071114
2	SK24	付近土	060514 遺土サンプル ミサキ2區
3	SK15	サンプルNo.11	071114
4	SK23	サンプルNo.1	060514 I区3層
5	SK23	付近土	060514 I区3層、サンプル2
6	屋敷面	サンプルNo.5	I区

表2 縄本土器土色

No.	名前	色
1	墨	黒
2	墨	黒
3	灰青	灰
4	墨	黒
5	墨	黒
6	墨	黒

表3 縄本遺跡土器分析結果(水分含量、T.O - TN、S.I 指定塩酸抽出法)

No.	水份含量 (%)	T.O (%)		TN (%)		C/N		Ca (mg/g)	K (mg/g)	Na (mg/g)	S (mg/g)	Mn (mg/g)	Zn (mg/g)	Cu (mg/g)	P (mg/g)
		N	O	N	O	C	N								
1	29.5	3.28	0.10	12.2	22.8	2.75	0.17	53.0	98.0	12.1	8.0	1.4	572.7		
2	26.5	2.42	0.15	17.8	4.45	0.62	0.23	0.10	17.8	28.2	9.4	2.4	0.2	25.6	
3	22.4	3.27	0.12	19.4	12.54	2.35	0.25	0.18	33.2	1.4	8.7	2.0	0.2	39.8	
4	22.1	2.31	0.15	18.3	0.59	0.17	0.04	25.4	19.7	16.8	2.0	0.1	96.3		
5	25.6	2.94	0.16	18.6	3.24	1.02	0.16	0.18	24.0	20.8	12.2	2.4	0.2	155.1	
6	20.3	4.23	0.20	21.7	88.77	3.07	0.29	0.29	43.0	50.5	12.8	3.2	0.6	190.2	

第2節 放射性炭素年代測定結果報告書

(株) 地球科学研究所

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

未補正 ^{14}C 年代 : (同位体分別未補正) ^{14}C 年代 "measured radiocarbon age"
(y BP) 試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前(BP)かを計算した年代。

^{14}C 年代 : (同位体分別補正) ^{14}C 年代 "conventional radiocarbon age"
(y BP) 試料の炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で、算出した年代。

試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に基準化することによって得られる年代値である。

(Stuiver,M. and Polach,H.A.(1977) Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon, 19 を参照のこと)
層年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

$\delta^{13}\text{C}$ (permil) : この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{試料}} - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{標準}}}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{標準}}} \times 1000$$

ここで、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ [標準] = 0.0112372である。

層年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動に対する補正により、層年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の測定、サンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により、補正曲線を作成し、層年代を算出する。

使用したデータセット : Intcal04

Intcal04: Calibration Issue of Radiocarbon 46(3), 2004

(海洋性の試料に対しては、Marine04を使用)

校正曲線のスムース化に用いた理論

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A.S., Vogel,J.C., 1993, Radiocarbon 35(2), 317-322

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる β -線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄

acid washes : 酸洗浄

acid etch : 酸によるエッティング

none : 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理

Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出

Cellulose Extraction : 木材のセルローズ抽出

Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami, Fl, U.S.A 33155

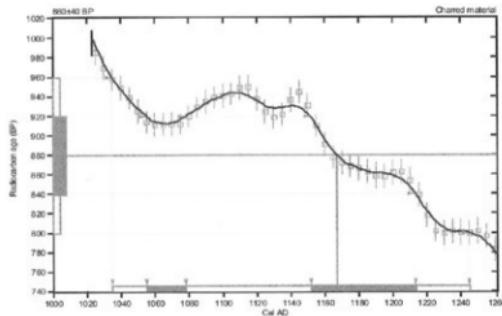
C14年代測定結果

試料データ	未補正14C年代(y BP) (measured radiocarbon age)	未補正13C(permil) $\delta^{13}\text{C}(\text{permil})$	14C年代(y BP) (Conventional radiocarbon age)
Beta- 248318	900 ± 40	-26.0	880 ± 40
試料名 (33483) 浸テゾ1 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 248319	2990 ± 40	-20.9	3060 ± 40
試料名 (33481) P-90 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など organic sediment acid wash			
Beta- 248320	660 ± 40	-26.7	630 ± 40
試料名 (33485) 5691 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 248321	430 ± 40	-24.8	430 ± 40
試料名 (33486) 5806 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 248322	440 ± 40	-25.4	430 ± 40
試料名 (33487) SK-07 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			

年代補正(C14/YBP)1950 AD ± 60年止む(1標準偏差)。モダリティラシス、スタンダード誤差(標準誤差)として1985 Oxalic Acid O14濃度の95%を用いた。半減期はビーコンの5560年を用いた。エラーは1シグマ(68%)である。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=–26.1ab, mult=1)
Laboratory number: Beta-248318
Conventional radiocarbon age: 880±40 BP
2 Sigma calibrated result: Cal AD 1040 to 1240 (Cal BP 920 to 700)
(95% probability)
Intercept data
Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal AD 1170 (Cal BP 780)
1 Sigma calibrated results: Cal AD 1060 to 1080 (Cal BP 900 to 870) and
(68% probability) Cal AD 1150 to 1210 (Cal BP 800 to 740)



References:

- Databases used*
INTCAL13d
Calibration Database
- INTCAL13d Radiocarbon Age Calibration*
Reimer et al., *Calibration Issue of Radiocarbon* (Volume 46, no. 3, 2004).
- Mathematics*
A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates,
Turner, A. S., Vogel, J. C., 1993, *Radiocarbon* 35(2), p.317-322.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4055 N.W. 74th Court, Miami, Florida 33123 • Tel.: (305)667-5767 • Fax: (305)663-0961 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=−20.9 lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-248319

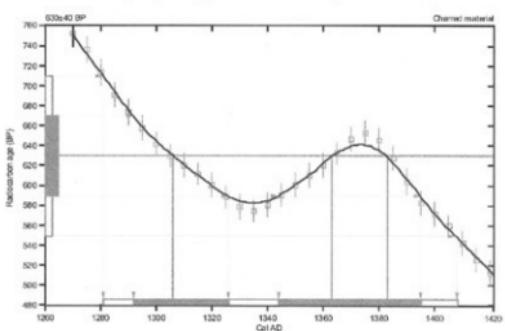
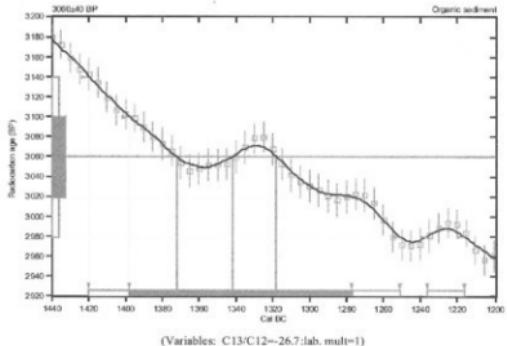
Conventional radiocarbon age: 3060±40 BP

2 Sigma calibrated results: Cal BC 1426 to 1250 (Cal BP 3370 to 3200) and
(95% probability) Cal BC 1246 to 1220 (Cal BP 3190 to 3170)

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 1370 (Cal BP 3320) and
Cal BC 1340 (Cal BP 3290) and
Cal BC 1320 (Cal BP 3270)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 1400 to 1280 (Cal BP 3350 to 3230)
(68% probability)



References:

- Databases and
INTCAL04
Calibration Database
INTCAL: Radiocarbon Age Calibration
IntCal04: Calibration curve of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).*
- Mathematics
A Simplified Approach to Calibrating C14 Data
Table A.2, Vogel J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322*

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.E. 768 Court, Miami, Florida 33153 • Tel: (305)667-3167 • Fax: (305)667-0764 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=−24.8; lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-248321

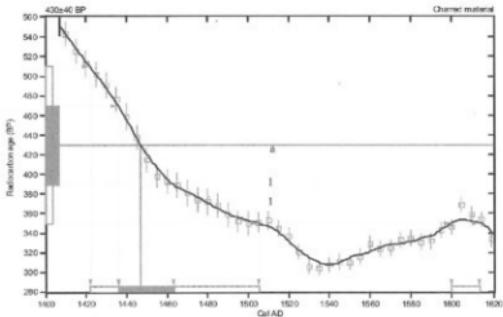
Conventional radiocarbon age: 430±40 BP

2 Sigma calibrated results: Cal AD 1420 to 1500 (Cal BP 530 to 440) and
(95% probability) Cal AD 1600 to 1610 (Cal BP 350 to 340)

Intercept d to

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal AD 450 (Cal BP 500)

1 Sigma calibrated result: Cal AD 440 to 1460 (Cal BP 510 to 490)
(68% probability)



(Variables: C13/C12=−25.4; lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-248322

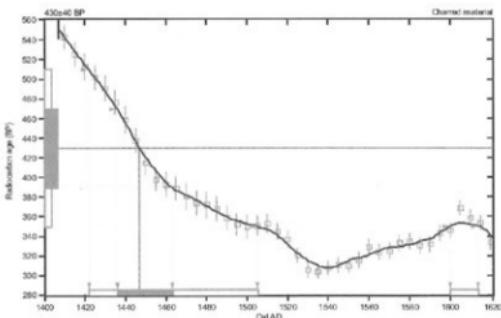
Conventional radiocarbon age: 430±40 BP

2 Sigma calibrated results: Cal AD 1420 to 1500 (Cal BP 530 to 440) and
(95% probability) Cal AD 1600 to 1610 (Cal BP 350 to 340)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal AD 1450 (Cal BP 500)

1 Sigma calibrated result: Cal AD 1440 to 1460 (Cal BP 510 to 490)
(68% probability)



References:

Database used:
INTCAL16a

Calibration curve

INTCAL14 Radiocarbon Age Calibration

InC13R: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).

Mathematical

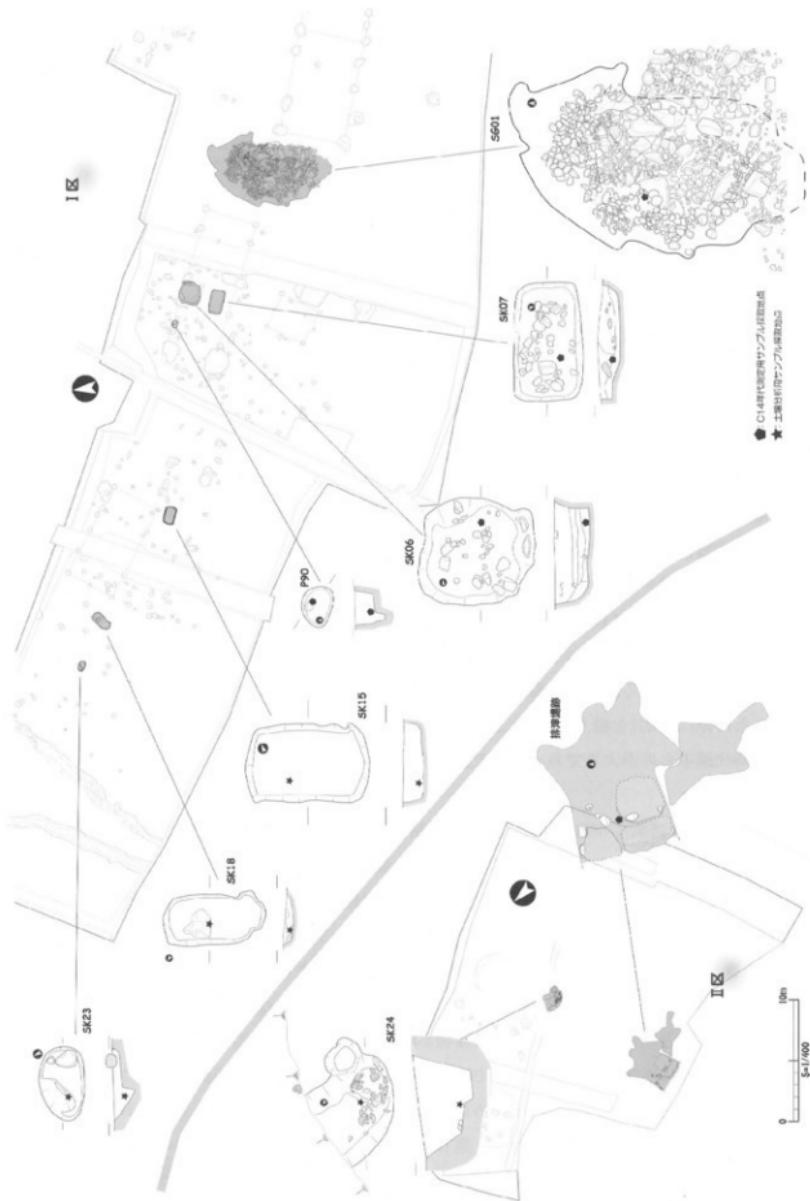
A Standard Approach to Calibrating C14 Data

Talbot, J. S., Vugler, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p.317-322.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4051 S.E. 74th Court, Miami, Florida 33173 • Tel: (305)667-5567 • Fax: (305)663-9564 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

第89図 自然科学分析サンプル採取遺構図



第7章　まとめ

御崎遺跡の調査では縄文時代・弥生時代後半～古墳時代・中近世にわたる遺構・遺物が出土した。以下時代ごとに概要を記し、まとめとする。

【縄文時代】

本遺跡で最も古い遺物は早期の黄島式である。II-2区3層(黒色土包含層)中からの出土であった。この時期の遺構は確認できなかったが、僅かながら遺跡の山手で人々の存在が想われる。前～中期の遺構・遺物とも認められず、後期中葉～晩期にかけて遺物量が増える。年代測定で、P90が晩期の数値を示しているが、建物を復元できなかった。また、SK24は土壤分析の結果、数値的には墓としての性格は否定されているが、遺構立地が、SR01で切られ度合なく山手からの土砂を被る場所であることから、完全には土器埋設遺構の可能性を否定できない。

【弥生時代後半～古墳時代】

この時期の遺構としてII区のSI01・SD07、I区のSD01・SD02・SD06が挙げられる。SI01は弥生時代終末期の建物、SD01・SD02・SD06・SD07は埋土遺物から弥生時代～古墳時代の溝跡と考えられる。このうち、SD01はやや古相、SD07はやや新相を呈す。遺物は複合口縁の擬円線がなくなる以降のもの(草田4期～7期)が多く見られた。KD01は堅穴建物の一部と思われ、この時期である可能性がある。また、量的には僅かであるが、特にI区で古墳時代後期の遺物、須恵器蓋壺・高壺・耳環なども出土している。これらは調査区外からの流入であり、I区北側の微高地に集落、横穴墓の存在を示唆している。土器群1も古墳時代後半の遺構である。II区のSR01は自然河道であるが、形成された時期は、SR01を覆う3層黒色土(分層できなかった)下層からの出土遺物は弥生時代終末期～古墳時代前半ものが大半であったので、この時期があてられる。

【中近世】

I区でSG01(池状遺構)、SB01～SB07(建物跡)、粘土貼土坑(SK01～03)、集石土坑(SK04・10～12・23・26、SX07・12・27・42)、埋土に炭を包含する上坑(SK16・18、SX29・43・49)、集石と炭を包含する土坑(SK05～08・17、SX36)が確認された。SG01は遅くとも14世紀後半から存在しており、池であるなら周辺に建物の存在を想定するところであるが、SB01～07は詳細な時期は不明であるが、出土遺物からSB02は戦国時代以前SB05は近世初頭以前と考えられる。SB01～07は地形(等高線)に沿うように、またほぼ同様な規格をもつことからさほど時期幅はないと考えられる。また、SG01を川辺の水溜施設とするなら、ごく近くに建物が存在しなくてもいいのかもしれない。SG01とSB群の同時期の存在は不明瞭である。I区では多くの土坑がみつかっているが、大半は近世のものであろう。粘土貼土坑は水溜用の桶を埋めたものである。使用しなくなった土坑に石を詰め込んだと考えられるのが、SK04・SX12である。集石と炭を含む土坑でSX36等は自然の大石も利用し麻蒸しを行った跡と考えられる。SK06・07等は小炭焼き炉であろうか。以上のような土坑は詳細年代は不明であるが、このような性格の遺構が、ダム開運(尾原・志津見含めて)の調査で報告され

事例が増えてきている。川辺において不变的で日常的な遺構であるのだろう。

II区では3層黒色土中に土師質土器を多量に包含していた。中世前半の遺構は調査区内には存在しないが、やはり調査区外の山手東北方向に生活の場があったのだろう。また、II区では製鉄関連遺物が多く、炉本体は消失しており存在しなかったが、付随施設である排滓場跡を検出した。周辺には羽口、楕円形溝、流出孔溝等が認められ、再結合溝には僅かに鍛造剥片が確認できた。これらは年代測定から11世紀中～後半の、精錬鍛冶に伴う遺構・遺物群と考えられる。^{※1}

以上、御崎遺跡を時代を追い概観し不明な点も多いが、多少の消長はあるものの遺跡周辺での祖先の生活の様子の一端を垣間見ることができた点は貴重であった。

最後に調査員の力量不足で周辺の方々にご迷惑をかけ、また多くの方に協力していただいたことを、ここにお詫びし、感謝したい。

《註》

※1～※3・※6をはじめ、陶磁器については西尾克己氏に御教示いただいた。

※4・※5・※7をはじめとする製鉄関連遺物については、東山信治氏に御教示いただいた。

《参考文献》

- 島根県教育委員会 『九景川遺跡 一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I』 2008
小林達雄編 『縄文土器大観1～4』 1988～1989
島根県教育委員会 『板屋田遺跡 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5』 1998
島根県教育委員会 『家の後I 遺跡・塙ノ内遺跡 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』 2003
島根県教育委員会 『家ノ脇II 遺跡・原田遺跡1区・前田遺跡4区 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4』 2004
島根県教育委員会 『北原本郷遺跡1 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7』 2005
島根県教育委員会 『原田遺跡(3) 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12』 2008
仁多町教育委員会 『幕地遺跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書III』 2004
奥出雲町教育委員会 『円満寺遺跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』 2006
奥出雲町教育委員会 『寺宇根遺跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI』 2008
大谷晃二 『出雲地域の須恵器の編年と地域性 島根考古学会誌第8集』 1994
松山智弘 『小谷式再検討-出雲平野における新資料から- 島根考古学会誌第17集』 2000
島根県教育委員会 『下山遺跡(2)-縄文時代遺構の調査- 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』 2002
松本岩雄 『出雲・隠岐地域 弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編 木耳社』 1992

全景写真



御崎遺跡 調査終了時（真上から）

表2 遺構 計測表(SB・SI・SG・SD)

遺構名	構造	規模		柱間隔		面積(m ²)	主軸方向	出土遺物	時期	備考
		柱間	寸法(m)	妻側(m)	半側(m)					
SB01	側柱建物	1間×3間	4.78×6.94	4.78	不均等	31.43	E-27° -S	弥生土器		
SB02	側柱建物	1間×6間	4.34×13.32	4.34	不均等	55.42	E-23° -S			
SB03	側柱建物	1間×5間	5.51×12.83	5.51	不均等	70.26	E-19° -S	古式土師器		
SB04	側柱建物	1間×1間	2.46×5.51	2.46	5.51	13.86 (E-16° -S)				
SB05	側柱建物	1間×3間	5.50×7.55	5.50	2.34	39.38	E-27° -S	古式土師器、陶器、スラグ		
SB06	側柱建物	(2間×2間)	3.00×3.45	1.50	不均等	10.05	E-33° -S	古式土師器		
SB07	側柱建物	2間×4間	4.12×8.11	2.06	不均等	32.96	E-36° -S			

遺構名	形態	最大長(m)	最大幅(m)	深さ(m)	柱数	面積(m ²)	平均柱間距離(m)	出土遺物	時期	備考
SI01	扇丸方形か	5.21	4.98	0.36	5	(23.2)	(2.58)	古式土師器		4つのP点の中央に3つ目のP点

遺構名	規模(m)		深さ(m)	面積(m ²)	出土遺物	時期	備考		
	平山形	丘陵							
SG01	不整長円形	7.45	6.37	1.40以上	38.6	弥生土器、土師器、陶磁器			掘り土は同じ平面のものでない

遺構名	区	層位	幅(m)	深さ(m)	長さ(m)	主軸方向	出土遺物	時期	備考
SD01	I	4	0.40~1.62	0.10~0.32	45±	N-46° -W	弥生土器、古式土師器他	弥生末~古墳初	
SD02	I	4	0.70~1.43	0.45	16.5±	N-48° -E	弥生土器、古式土師器他	弥生末~古墳初	
SD03	II-1	2	0.50~2.70	0.45	2.85±	N-57° -E			
SD04								酒器	
SD05								酒瓶	
SD06	I	4	0.90~1.20	0.70	17.5±	N-27° E	弥生土器、古式土師器他	弥生末~古墳初	
SD07	II-2	3	0.47~0.63	0.46	19.1±	N-33° -W	須恵器他	古墳後期	

表3 遺構 計測表(SK)

遺構名	区	検出面	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	遺構の種類	遺構の時期	備考
SK01	I	1層下面	円形	0.86	0.84	0.40	古式土師器、陶器	埋蔵遺構か	縦に粘土張り	集石状態で検出
SK02	I	1層下面	丸五角形	1.10	1.06	0.36		埋藏遺構か	縦に粘土張り	
SK03	I	1層下面	不整形	1.31	1.09	0.40		埋蔵遺構か	縦に粘土張り	
SK04	I	1層下面	円形	(1.10)		0.30	古式土師器、陶器		集石状態で検出	SK12と切合
SK05	I	1層下面	不整形	2.24	1.60	0.74	古式土師器、須恵器、陶器			
SK06	I	3層	隅丸九方形	1.80	1.74	0.54	須恵器、磁器		床面に川石	SK30と切合
SK07	I	3層	隅丸長方形	1.97	1.16	0.37	古式土師器		覆土に川縄を含む	
SK08	I	3層	不整長方形	1.49	0.98	0.27			床面縁に川石	SK09と切合
SK09	I	3層	不整形	1.10以上	0.78	0.16	磁器、スラグ			SK08と切合
SK10	I	3層	不整形	1.80	1.49	0.31				
SK11	I	3層	卵形	2.24	1.94	0.14	須恵器、陶器		検出表面に集石	
SK12	I	3層	方形少	2.69	1.60以上	0.42	土師質土器		川石・山石を含む	
SK13	I	3層	不整九角形	0.67	0.50	0.28				
SK14	I	2層	不整形	1.26	0.68	0.40	古式土師器		二段階状	
SK15	I	2層	略長方形	1.56	0.92	0.24	古式土師器、磁器			
SK16	I	2層	長円形	1.64	0.88	0.15	古式土師器、磁器			
SK17	I	2層	不整形	1.79	1.07	0.32	須生土器、陶器		二段階状 覆土に角錐、集石、灰を含む	
SK18	I	2層	不整長方形	1.66	0.89	0.14	陶文土器		二段階状 灰を多く含む	
SK19	II-1	2層	不整形	1.54	0.88	0.44				
SK20	II-1	2層	不整形	2.54	2.14	0.37			床面に川石 灰分の沈着多い	
SK21	II-1	2層	不整五角形	0.70	0.63	0.24	スラグ		表面に川石が留	
SK22	II-1	2層	不整形	0.64	0.53	0.20	須恵器			
SK23	I	2層	橢円形	0.86	0.54	0.25	古式土器			
SK24	II-2	2~3層	不整形	1.60以上	1.90	0.96	陶文土器	埋蔵土器か	縄文後期	
SK25	II-2	2層	不整五角形	0.98	0.80	0.53			二段階状	
SK26	I	1層下面	不整三角形	0.84	0.79	0.22			縦、覆土中に川石	

表4 遺構 計測表(SX)

遺構名	区	横出面	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	遺構の種類	遺構の時期	備考
SX01	I							消滅		
SX02	I	3層	近方形	1.38	0.90	0.27	スクグ、占式土師器	小段焼跡か		炭を多く含む
SX03	I	3層	不規円形	1.08	0.90	0.42	上部器			
SX04	I	3層	隅丸臺形	1.40	1.07	0.69	上部器			覆土に小器12個含む
SX05	I	3層	不整五角形	1.42	0.64	0.40	古式土師器			粘土、灰、礫を含む
SX06	I							消滅		
SX07	I	3層	不整形	1.82	0.90	0.37	占式土師器、陶器			二つの土坑の苟合いか
SX08	I	3層	不整形	0.56	0.30	0.13				
SX09	I							消滅		
SX10	I							消滅		
SX11	I							消滅		
SX12	I	1層下面	円形	1.19	1.26	0.30				SX04と苟合い、集石状態で残る
SX13	I	3層	不整形	1.32	1.10	0.90				土坑様に厚く粘土盛り土
SX14	I	3層	不規長円形	1.27	0.73	0.52				覆土中に川通
SX15	I	3層	不整天井形	0.82	0.51	0.32				二段現状
SX16	I	3層	楕円形	0.76	0.60	0.37				
SX17	I	3層	不整五角形	0.82	0.68	0.17				床面に平石
SX18	I	3層	不整形	1.30	0.72	0.55	鉄器			
SX19	I	3層	楕円形	1.20	0.92	0.62				
SX20	I	3層	不整形	0.41	0.39	0.32				二段現状
SX21	I	3層	不整方形	0.62	0.51	0.31				角錐の集成石
SX22	I	3層	不整形	0.76	0.46	0.28				
SX23	I	3層	長円形	0.94	0.58	0.36				小砾含む
SX24	I	3層	不整形	1.06	0.67	0.26				小砾含む
SX25	I	3層	不整形	0.64	0.60	0.20				小砾含む
SX26	I	3層	卵形	1.04	0.86	0.47	鉄器			小砾含む
SX27	I	3層	不整形	0.82	0.34	0.21				表面に小器 覆土に炭を含む
SX28	I	3層	不整円形	0.63	0.39	0.20				
SX29	I	3層	楕円形	0.59	0.36	0.18				二段現状

遺構名	区分	移出面	平面形	長軸(a)	短軸(b)	深さ(c)	出土遺物	遺構の性質	遺構の特徴	備考
SX30	I	3層	不整形	(0.96)		0.30			二段階状 SB02のP11	
SX31	I	3層	楕円形	0.88	0.54	0.28	スラグ、古式土器器		粘土、灰を含む SB02のP11	
SX32	I	3層	楕円形	0.98	0.31	0.26				
SX33	I	3層	楕円形	0.88	0.33	0.50				
SX34	I							消滅		
SX35	I							消滅		
SX36	I	3層	楕円形	(2.10)	1.20	0.31			灰を多く含む	
SX37	I							消滅		
SX38	I	2層	落花生形	0.70	0.25	0.42				
SX39	I	2層	不整形	0.98	0.67	0.14				
SX40	I	2層	小敷地円形	0.84	0.42	0.42	上野鏡鏡片		平石を含む	
SX41	I	2層	不整形	0.80	0.54	0.39				
SX42	I	2層	不整形	1.18	0.51	0.20			表面に擦痕	
SX43	I	2層	落花生形	0.52	0.28	0.14				
SX44	I	2層	不整形	0.64	0.42	0.25			二段階状	
SX45	I							消滅		
SX46	I	2層	卵形	0.64	0.35	0.23	スラグ			
SX47	I	2層	長円形	0.52	0.29	0.25			二段階状	
SX48	I	2層	長円形	0.70	0.34	0.21			平石含む	
SX49	I	2層	不整落花生形	1.10	0.30	0.30			僅かに灰を含む	
SX50	I							消滅		
SX51	I	2層	落花生形	0.80	0.56	0.35				
SX52	II-1	2層	不整形	1.12	0.58	0.22	古式土器器		角擦を含む	
SX53	II-1	2層	椭状	5.40	1.40	0.28	スラグ			
SX54								消滅		
SX55	I	2層	不整形	0.56	0.36	0.18	不規則片			
SX56								消滅		
SX57	II-2	2層	長方形	1.12	0.86	0.16	灰	灰	灰白色素	
SX58	II-2	2層	隅丸五角形	0.70	0.62	0.32	鐵文土器		SI01のP11	
SX59	II-2	2層	不整地円形	0.84	0.40	0.44			灰土中に半瓦	

第5表 御崎遺跡遺物観察表

Fig.	番号	出土地点	種類	器種	口径(cm)	深度(cm)	底深(cm)	色調	形状	鏡面	保存
5	1	I区1層	弥生	高脚マ				外：にごい黒	丸や角（1cm以下） 子の毛吹少量 （2g）	良	焼物式の鉢
5	2	I区1層	土師器	圓把平				外：青黒鐵	球（Diameterの 約1/2の鏡 面合む）	良	側面有り
5	3	I区1層	陶器器	皿			4.6	外：緑、灰オ リーブ	圓	良	17世紀までの底
5	4	I区1層	陶器器	皿				外：緑灰	碗	良	火照（季開）研磨
5	5	I区1層	陶器器	碗	9.8			外：文様はコバ ルト色に朱色	碗	良	九州から
5	6	I区1層	陶器器	皿	10.5	2.5	5.0	外：文様はコバ ルト色に朱色	盤	良	九州から
5	7	I区1層	陶器器	潛り鉢				外：明示馬	盤（1mm以下の 砂粒混じり少 量）	良	鏡面 底面削～中削
6	8	I区1層	陶器器	青花碗	11.6			外：文様はモウ くすんだコバルト 色に朱色	碗	良	
7	1	I区SK01	土師器	甕			14.3	外：緑	やや楕（4mm大 の砂粒合む）	良	
7	2	I区SK01	陶器器	圓口壺型			3.0	外：黄褐色 赤褐色部分 燒痕斑	碗	良	地元産
7	3	I区SK01	陶器器	香炉			6.4	外：暗赤	圓	良	舶先產
7	4	I区SK05	陶器器	皿			6.7	外：半球状色 安達村はコバルト 色	圓	良	地元產
7	5	I区SK06	陶器器	俵体			6.6	外：文様はコバ ルト色に朱色	碗	良	江戸以降の大衆品
7	6	I区SK05	陶器器	碗			4.8	外：緑釉、綠 灰、にごい青色	碗	良	志名 19c ぼて花瓶
11	1	I区SK15	陶器器	皿	10.2	2.8	4.3	外：白釉、灰白	盤	良	円盤
11	2	I区SK18	陶器器	深鉢				外：にごい青 色、にごい褐	盤（1mm以下の 砂粒混じり少 量）	良	側面中堅か
11	3	I区SK17	弥生	片口土瓶				外：黑褐色	盤（1mm以下の 砂粒混じり少 量）	良	
15	1	I区2層	縄文	深鉢				外：にごい黄鐵 鉄	盤（1mm以下の 砂粒混じり少 量）	良	外：爪形文
15	2	I区2層	縄文	口口土器or 束形土器				外：にごい模 様	中堅（2mm大 の砂粒を含む）	良	外：横溝縄文
15	3	I区2層	縄文	深鉢				外：暗褐色	盤（2mm大の砂 粒合む）	良	外：胡蝶彫
15	4	I区2層	縄文	口口土器or 束形土器				外：模	中坚（2mm大 の砂粒を含む）	良	外：深鉢縄文
15	5	I区2層	縄文	鉢	38.0			外：にごい黃 鐵、にごい黒 鐵	盤（1mm以下 の砂粒を含む）	良	外：巻貝による刺突文
19	6	I区2層	弥生	皿				外：模	盤（2mm大の砂 粒多く含む）	不良	外：沈底文（日本）
15	7	I区2層	弥生	甕	14.4			外：明示泡	盤（1mm以下の 砂粒含む）	良	外：圓底文
15	8	I区2層	弥生	甕	11.3			外：模	碗（2mm大の砂 粒合む）	良	口縁、鋸歯回輪文
15	9	I区2層	弥生	皿	12.5			外：にごい黒 鐵	盤（1mm以下の 砂粒少量含む）	良	
15	10	I区2層	弥生	甕	13.0			外：にごい黄鐵 鉄	盤（1mm以下 の砂粒多く含 む）	良	
15	11	I区2層	古式土器器	甕	16.4			外：模鐵	碗（2mm大の砂 粒合む）	不良	
15	12	I区2層	古式土器器	甕	24.6			外：黑褐色	盤（2mm~3mm の砂粒含む）	良	
15	13	I区2層	古式土器器	甕	15.4			外：黄褐色	盤（2mm~3mm の砂粒含む）	不良	

Fig.	番号	ILL地点	種別	形態	口径(cm)	高さ(cm)	直径(cm)	色調	形状	地城	標号
15	14	I区2層	古式土師器	甕	22.6			外: 明赤褐色 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良		
15	15	I区2層	古式土師器	甕	23.2			外: 棕	良		
16	16	I区2層	古式土師器	甕	27.4			外: に赤い斑 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良		
16	17	I区2層	古式土師器	甕	13.0			外: 暗紅 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良		
16	18	I区2層	甕	甕				外: 桃色 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良		
16	19	I区2層	古式土師器	器物or甕	11.8			外: 棕	良		
16	20	I区2層	甕 or 古式土師器	甕か			7.0	外: に赤い斑 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良		
16	21	I区2層	甕 or 古式土師器	甕か			9.0	外: に赤い斑 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良		
16	22	I区2層	甕 or 古式土師器	甕か			6.0	外: 明赤褐色 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良		
16	23	I区2層	甕 or 古式土師器	甕か			9.2	外: 明赤褐色 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良		
16	24	I区2層	土師器	甕				外: 带縁 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良		
16	25	I区2層	須恵器	坪蓋	12.3			外: 増音灰 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良		
16	26	I区2層	須恵器	坪身	11.4			外: 灰 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良		
16	27	I区2層	須恵器	坪身	12.4			外: 增音灰 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良		
16	28	I区2層	須恵器	高杯			8.8	外: 青灰 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良	2万通かし	
16	29	I区2層	須恵器	高杯				外: 增音灰 内: 深褐色 口部: 黄褐色 底: 黑褐色	良	対角線2方向に切り込み 透かしあり	
16	30	I区2層	須恵器	里			4.8	外: 赤、に赤い 黄褐色、赤褐色 内: 黄褐色	良	唐津	
16	31	I区2層	陶磁器	碗				外: 棕	良	唐津	
16	32	I区2層	陶磁器	碗	13.6			外: 緑釉、深 灰、灰褐色 内: 黄褐色	良	布志名?	
16	33	I区2層	陶磁器	碗	10.9	2.3	4.8	外: 緑釉、深 灰、灰褐色 内: 黄褐色	良	布志名	
16	34	I区2層	陶磁器	皿			7.6	外: 増音灰 内: 黄褐色	良	古伊万里	
16	35	I区2層	陶磁器	皿	10.0	3.7	3.8	外: 緑釉、灰 色、白 内: 黄褐色 口部: 黄褐色	良	唐津	
16	36	I区2層	陶磁器	皿			4.5	外: 白釉、棕 内: 黄褐色	良	唐津 内外面: 手色 釉、黒焼部分あり	
16	37	I区2層	陶磁器	碗			3.1	外: 文様はコバ ル色で施色	良	良	
16	38	I区2層	古鏡	丸永通家 たて 2.4		2.4	厚さ 0.1	外: 浅黄褐色 内: 大きな赤 色の斑合む	良		
24	1	I区307	甕	甕	14.0			外: 浅黄褐色 内: 大きな赤 色の斑合む	良		
24	2	I区307	土師器	高杯			6.6	外: 深褐色 内: 大きな赤 色の斑合む	良		
29	1	I区305	陶磁器	皿	13.8	4.2	3.9	外: 灰白 内: 深褐色 口部: 黄褐色	良	唐津 17c半まで	
29	2	I区305	土師器	甕	17.7			外: 棕	良		
29	3	I区305	陶磁器	皿	23.2			外: 赤、灰青 内: 大きな赤 色の斑合む	良	唐津 17c半まで	
29	4	I区306	陶磁器	皿	13.2	4.2	4.4	外: 棕、灰青 内: リーブ リーブ	良	高台山にうすい墨書き	

番号	出土地点	種別	品種	口径(cm)	部厚(cm)	長径(cm)	色調	整人	造成	備考
29	5 I区505	土師器	黒				外：に赤い擦 れ(1mm以下の 砂粒含む)	良		
29	6 I区506	猪生?	浅鉢			5.4	外：灰	良(1mm以下の 砂粒含む)	良	
29	7 I区507	柱櫃		たて 41.9	横 18.4	厚さ 20.0				
30	1 I区5層	猪生	陶	21.2			外：褐色、淡黄 色(1mm以下の 砂粒含む)	不良		
30	2 I区5層	猪生	黒	17.2			外：に赤い點綴 (1mm以下の 砂粒含む)	良		
30	3 I区5層	猪生	高杯	16.2			外：輪赤擦 (1mm以下の 砂粒含む)	良		
30	4 I区5層	猪生	鉢	19.0			外：赤	良(1mm以下の 砂粒含む)	良	
30	5 I区5層	猪生	陶	21.9			外：褐色、に赤 い擦れ	良(1mm以下の 砂粒含む)	良	
30	6 I区5層	猪生	陶	16.0			外：に赤い點綴 (1mm以下の 砂粒含む)	良		
30	7 I区5層	猪生	黒	23.1			外：に赤い擦 れ(1mm以下の 砂粒含む)	不良		
30	8 I区5層	猪生	黒	19.1			外：に赤い黃褐色 (1mm以下の 砂粒含む)	良		
30	9 I区5層	猪生	陶	17.2			外：に赤い黃褐色 (1mm以下の 砂粒含む)	良		
30	10 I区5層	猪生	陶	23.2			外：に赤い點綴 (1mm以下の 砂粒含む)	良		
30	11 I区5層	猪生	黒	17.0			外：赤(1mm以下の 砂粒含む)	良		
30	12 I区5層	猪生	瓦部			10.0	外：淡赤褐、に 赤い擦れ	良(1mm以下の 砂粒含む)	良	
30	13 I区5層	猪生	黒	11.6			外：灰黃褐色 (1mm以下の 砂粒含む)	良		
30	14 I区5層	土師質上器	不明				外：褐	良(1mm以下の 砂粒含む)	不良	
31	15 I区5層	猪生	黒	16.0			外：淡黃褐色 (1mm以下の 砂粒含む)	良		
31	16 I区5層	猪生	陶	15.8			外：に赤い點綴 (0.5mm以下の 砂粒含む)	良	外面：朱赤痕あり	
31	17 I区5層	猪生	黒	15.1			外：褐	良(1mm以下の 砂粒含む)	良	
31	18 I区5層	猪生	黒	16.8			外：淡黃褐色 (1mm以下の 砂粒含む)	良		
31	19 I区5層	猪生	陶	18.4			外：に赤い點綴 (1mm以下の 砂粒含む)	良		
31	20 I区5層	猪生	陶	18.2			外：淡黃褐色 (1mm以下の 砂粒含む)	不良		
31	21 I区5層	猪生	黒	17.2			外：墨、に赤い 擦れ	良(1mm以下の 砂粒含む)	良	
31	22 I区5層	猪生	小型皿				外：に赤い擦 れ	良(1mm以下の 砂粒含む)	良	
31	23 I区5層	猪生	陶	19.8			外：褐	良(1mm以下の 砂粒含む)	良	
31	24 I区5層	猪生	黒	21.3			外：淡黃褐色 (1mm以下の 砂粒含む)	良		
31	25 I区5層	猪生	黒				外：淡黃褐色 (1mm以下の 砂粒含む)	良		
31	26 I区5層	猪生	高杯				外：褐	良(1mm以下の 砂粒含む)	良	
31	27 I区5層	猪生	高杯				外：に赤い擦 れ	良(1mm以下の 砂粒含む)	良	
31	28 I区5層	猪生	瓦部			4.8	外：褐	良(1mm以下の 砂粒含む)	良	

rig	番号	II上地点	種別	器種	II(径(cm))	断面(cm)	厚さ(cm)	色調	出土	絶滅	備考
31	29	I区3層	陶生	盆鉢			6.8	外：板	Ⅱ(底位の砂 利付)	良	
31	30	I区3層	陶生	底鉢			6.0	外：板	Ⅱ(底位の砂 利付)	良	
31	31	I区3層	陶生	底鉢			6.0	外：洗蓋板	Ⅱ(底位の砂 利付)	良	
31	32	I区3層	陶生	焼			6.0	外：灰黄褐色	Ⅱ(底位の砂 利付)	良	
31	33	I区3層	古式土鍋頭	鍋身			19.2	外：灰褐色	Ⅱ(底位の砂 利付)	良	
32	34	I区3層	須恵器	灰身	11.6			外：暗古風	Ⅱ(底位～2cm の砂利多く含 む)	良	
32	35	I区3層	須恵器	高杯			10.3	外：青灰	Ⅱ(底位以下) の砂利多く含 む)	良	
32	36	I区3層	須恵器	壺				外：灰	Ⅱ(底位以下) の砂利多く含 む)	良	
32	37	I区3層	須恵器	壺			7.1	外：青灰	Ⅱ(底位以下) の砂利多く含 む)	良	内表面の一部 うすく自然剥がる
32	38	I区3層	土師器	灰脚杯	8.3	4.3	3.1	外：浅黄褐色	Ⅱ(底位以下) の砂利多く含 む)	良	
32	39	I区3層	土師器	灰脚杯			5.8	外：浅黄褐色	Ⅱ(底位以下) の砂利多く含 む)	良	
32	40	I区3層	土師器	灰把手				外：青灰	Ⅱ(底位～2cm の砂利多く含 む)	普通	
32	41	I区3層	土師器	灰把手				外：青灰	やや黒(Grayish の砂利多く含 む)	良	
32	42	I区3層	土師器	灰把手				外：明黄褐色	やや黒(Grayish の砂利多く含 む)	良	
32	43	I区3層	土師器	灰把手				外：に赤い模 様	Ⅱ(底位～2cm の砂利多く含 む)	良	
32	44	I区3層	土師器	灰把手				外：に赤い模 様	Ⅱ(底位以下) の砂利多く含 む)	良	
32	45	I区3層	土師器	灰把手				外：に赤い模 様	Ⅱ(底位以下) の砂利多く含 む)	良	
32	46	I区3層	土師器	灰把手				外：に赤い模 様	Ⅱ(底位～2cm の砂利多く含 む)	良	
32	47	I区3層	土師器	灰把手				外：赤褐	Ⅱ(底位以下) の砂利多く含 む)	良	
32	48	I区3層	土師器	灰把手				外：褐	Ⅱ(底位以下) の砂利多く含 む)	良	
32	49	I区上部II	土師器	瓶			10.3	外：に赤い模様	Ⅱ(底位以下) の砂利多く含 む)	良	
33	50	I区3層	?	瓶	15.3			外：に赤い模様	赤	良	
33	51	I区3層	陶器部	瓶?				外：ラブン、 灰、錆斑、灰土 リーフ	赤	良	18世紀前系
33	52	I区3層	陶器部	罐鉢				外：灰赤	Ⅱ(底位以下) の砂利多く含 む)	良	初期中世
33	53	I区3層	陶器部	骨花瓶				外：文様はコバ ルト色に褐色	赤	良	18世紀前系 九州から
33	54	I区3層	陶器部	瓶	16.2			外：錆斑、灰オ リーブ黃、灰白	赤	良	古窯 国史室 鎌倉時代初期
33	55	I区3層	陶器部	耳皿	長さ 19.5	巾 2.1	厚さ 0.6×0.55 の砂利	赤		銅	
33	56	I区3層	石器	石器	長さ 8.35	巾 1.5	厚さ 0.25	赤			石材：安山岩
33	57	I区3層	石器	剝片	長さ 1.65	巾 1.65	厚さ 0.4	赤			石器製作中連の未成品 か?
33	58	I区3層	古鉢	漢武酒甕	たて 2.16	横 2.20	厚さ 0.1				
37	1	I区3層	陶生	古式土瓶	瓶			外：橙～灰白	やや赤(1.5mm 以上の砂利多く含 む)	良	

番号	部号	出土地点	種別	断面	口径(cm)	脚高(cm)	底深(cm)	色調	ねじ	形状	備考
37	2	I区SG01	土器類	鉢形				外: 淡黄褐色 内: 中央 (1mm以下) の赤褐色	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	丸	
37	3	I区SG01	陶器類	青花碗			5.7	外: 文様 (1mm大 きの赤褐色)	内: (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	中国 16世紀前半
37	4	I区SG01	土器類	香炉灰丸体	3.0			外: に赤い骨 頭、に白い赤褐色	内: (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
37	5	I区SG01	陶器類	呑口	11.6	5.5	6.4	外: 緑褐色、灰オ リーブ、灰白	内: (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	朝鮮時代
49	1	I区SD01	鏡文	底部					小中足 (1mm大 きの赤褐色)	丸	
49	2	I区SD01	弥生	裏坪				外: に赤い骨 頭	底 (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
49	3	I区SD01	弥生	底	17.6			外: に赤い骨	底 (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
49	4	I区SD01	土器類	奥	22.0			外: に赤い骨頭	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	丸	平行沈漫文 連續捺文
49	5	I区SD01	弥生	裏	18.5			外: に赤い骨頭	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	良	斜盤平行捺文
49	6	I区SD01	弥生～古式土 器類	底	19.6			外: に赤い骨頭	底 (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
49	7	I区SD01	弥生～古式土 器類	奥	18.8			外: に赤い骨頭	底 (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
49	8	I区SD01	弥生～古式土 器類	底	23.4			外: 浅模	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	良	
49	9	I区SD01	弥生～古式土 器類	裏	24.0			外: に赤い骨頭	底 (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
49	10	I区SD01	弥生～古式土 器類	底	14.8	24.9		外: 極	底 (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
49	11	I区SD01	弥生～古式土 器類	壳	16.1			外: 浅黄褐色	底 (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
49	12	I区SD01	弥生～古式土 器類	裏	19.1			外: 浅黄褐色	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	良	
50	13	I区SD01	弥生～古式土 器類	底	23.2			外: 淡黄褐色	底 (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
50	14	I区SD01	弥生～古式土 器類	壳	18.6			外: オリーブ墨	底 (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
50	15	I区SD01	弥生～古式土 器類	裏	12.4			外: 淡黄褐色	底 (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
50	16	I区SD01	弥生～古式土 器類	底	15.8			外: 淡黄褐色	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	良	
50	17	I区SD01	弥生～古式土 器類	壳	15.8			外: 淡黄褐色	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	良	
50	18	I区SD01	弥生～古式土 器類	裏	16.6			外: 淡黄褐色	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	良	
50	19	I区SD01	弥生～古式土 器類	底	18.4			外: に赤い骨頭	底 (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
50	20	I区SD01	弥生～古式土 器類	壳	16.6			外: 浅黄褐色	底 (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
50	21	I区SD01	弥生～古式土 器類	裏	16.7			外: 淡黄褐色	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	良	
50	22	I区SD01	弥生～古式土 器類	底	18.0			外: 淡黄褐色	底 (1mm以下)の 淡黄褐色 (赤褐色)	良	
50	23	I区SD01	弥生～古式土 器類	壳				外: 淡黄褐色	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	良	
50	24	I区SD01	弥生～古式土 器類	裏	16.6			外: 淡黄褐色	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	良	
51	25	I区SD01	弥生～古式土 器類	底	18.0			外: に赤い骨頭	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	良	
51	26	I区SD01	弥生～古式土 器類	壳	15.6			外: 淡黄褐色	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	良	
51	27	I区SD01	弥生～古式土 器類	壳	17.6			外: に赤い骨頭	小中足 (1mm大 きの赤褐色)	良	

Fig	番号	出土地点	埋没	断面	幅(㎝)	深さ(㎝)	断面(㎝)	直径(㎝)	色調	地名	施設	標号
S1	28	I区SD01	弥生～古式土器	丸	18.4				外：に赤い褐	小中窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S1	29	I区SD01	弥生～古式土器	丸	16.8				外：棕	小中窓 (1m×1.5m) 下の内側多く含む	良	
S1	30	I区SD01	弥生～古式土器	丸	22.0				外：淡黄褐	やや窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S1	31	I区SD01	弥生～古式土器	丸					外：に赤い褐	窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S1	32	I区SD01	弥生～古式土器	丸	22.0				外：棕	窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S1	33	I区SD01	弥生～古式土器	丸	20.6				外：棕	小中窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S1	34	I区SD01	弥生～古式土器	丸					外：に赤い黄褐	窓 (1m×1.5m) 下の内側多く含む	良	
S1	35	I区SD01	弥生～古式土器	丸	15.2				外：棕	小中窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S2	36	I区SD01	弥生～古式土器	圆形聯合				20.2	外：に赤い黄褐	やや窓 (1m×1.5m) 下の内側多く含む	良	
S2	37	I区SD01	弥生～古式土器	圆形聯合	21.4				外：に赤い黄褐	小中窓 (1m×1.5m) 下の内側多く含む	良	
S2	38	I区SD01	弥生～古式土器	圆形聯合				15.0	外：淡黄褐	やや窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S2	39	I区SD01	弥生～古式土器	横台				22.8	外：棕	やや窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S2	40	I区SD01	弥生～古式土器	器内				19.2	外：に赤い黄褐	小中窓 (1m×1.5m) 下の内側多く含む	良	
S2	41	I区SD01	弥生～古式土器	器内	19.3				外：棕	やや窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S2	42	I区SD01	弥生～古式土器	高坏 (脚)				15.6	外：に赤い黄褐	やや窓 (1m×1.5m) 下の内側多く含む	良	
S2	43	I区SD01	弥生～古式土器	高坏	24.3				外：淡黄褐	やや窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S2	44	I区SD01	弥生～古式土器	高坏	14.5				外：に赤い黄褐	窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S2	45	I区SD01	弥生～古式土器	高坏?	18.0				外：黄褐	小中窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S2	46	I区SD01	弥生～古式土器	丸					外：に赤い黄褐	中层部と (1m×1.5m) 下の内側多く含む	良	
S2	47	I区SD01	弥生～古式土器	高坏					外：に赤い黄褐	窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S2	48	I区SD01	弥生～古式土器	低脚脚					外：に赤い棕	窓 (1m×1.5m) の内側多く含む	良	
S2	49	I区SD01	弥生～古式土器	丸					外：に赤い棕	外：窓 (1m×1.5m) 下の内側多く含む	良	
S3	50	I区SD01	陶器	碗	15.6				外：灰白	古 平安末		
S3	51	I区SD01	陶器	罐体?			6.2		外：支撑はコバルト色に発色	差	良	地元産 16c
S3	52	I区SD01	陶器	碗	11.2				外：埴輪の上にくすんだコバルト上	差	良	九世纪から
S3	53	I区SD01	陶器	碗	7.6				外：ヒンの様な支撑コバルト色に発色	差	良	九世纪から
S3	54	I区SD01	陶器	碗	10.5				外：绿釉、绿灰、灰黄	差	良	布志名 波てぼて茶碗 19c
S3	55	I区SD01	陶器	碗			6.2		外：灰白、淡付コバルト	差	良	広島病 19c前半
S3	56	I区SD01	陶器	现代もの	8.1				外：何が実を隠す	差	良	現代
S3	57	I区SD01	陶器	碗 (陶器染付)					外：文様はやや暗色のコバルト色に発色	差	良	18cの赤陶
S3	58	I区SD01	陶器	碗					外：支撑はコバルト色に発色	差	良	九世纪から

No.	番号	出土地点	種別	部局	寸法(cm)	断面(cm)	状態(cm)	色調	地土	基底	備考
53	59	I 区SD01	石器	磨製石斧	長さ 7.8	巾 4.7	厚さ 3.1	墨色 103 g			石: 研削 上半基礎欠損
53	60	I 区SD01	石器	石鍬	長さ 9.5	巾 3.5	厚さ 1.5	墨色 111 g			石材: 鋸削 2万欠損
53	61	I 区SD01	装饰品	貝殻	長さ 1.7	巾 1.8	厚さ 0.4×0.3の 均円形	墨色 1 g			網 金属がうっすら硝化
54	1	I 区SD02	祭祀	壇	16.4			赤: 貴様	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	唐津の影響か
54	2	I 区SD02	祭祀	壇	17.2			赤: に赤い斑 点	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	
54	3	I 区SD02	祭祀	壇	24.8			赤: に赤い斑 点	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	
54	4	I 区SD02	祭祀	壇	16.7			赤: に赤い斑 点	赤 (1mm以下の 砂粒含む)	良	
54	5	I 区SD02	祭祀	壇				赤: に赤い斑 点	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	
54	6	I 区SD02	土師器	壇	16.2			赤: 検	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	
54	7	I 区SD02	土師器	壇	25.1			赤: 検	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	
54	8	I 区SD02	土師器	壇	13.9			赤: 深褐色	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	
54	9	I 区SD02	土師器	壇	13.3			赤: 検	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	内面に焼灰風ふき
54	10	I 区SD02	土師器	低脚壺				赤: 検	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	
54	11	I 区SD02	土師器	低脚壺			8.0	赤: 検	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	
55	12	I 区SD02	須恵器	环身	13.4	3.9		赤: 貴灰	墨 (1mm以下の 砂粒含む)	良	
55	13	I 区SD02	須恵器	环身	10.8	3.3		赤: 墨	墨 (1mm以下の 砂粒含む)	良	
55	14	I 区SD02	須恵器	环身				赤: 底白	墨 (1mm以下の 砂粒含む)	良	
55	15	I 区SD02	須恵器	环身	13.6	3.3		赤: 底白	墨 (1mm以下の 砂粒含む)	良	
55	16	I 区SD02	須恵器	高身	15.0	9.2	10.3	赤: 底白	墨 (1mm以下の 砂粒含む)	良	
55	17	I 区SD02	須恵器	环身?	15.1			赤: 底白	墨 (1mm以下の 砂粒含む)	良	
55	18	I 区SD02	須恵器	高身	15.0			赤: 貴灰	墨 (1mm以下の 砂粒含む)	良	
56	19	I 区SD02	石器	剝片	長さ 3.55	巾 2.4	厚さ 0.45	墨色 6 g	墨 (1mm以下の 砂粒含む)		石材: 黒曜石
56	1	I 区SD06	陶文	瓦跡		4.0	6.0	赤: に赤い斑模	墨 (1mm以下の 砂粒含む)	良	
56	2	I 区SD06	陶文	瓦跡			6.2	赤: に赤い斑模	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	
56	3	I 区SD06	土師器	壇	17.2			赤: に赤い斑模	赤 (1mm以下の 砂粒含む)	良	
56	4	I 区SD06	祭祀	壇	14.3			赤: 明赤崩	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	
56	5	I 区SD06	祭祀	壇	15.8			赤: 検	赤 (1mm以下の 砂粒含む)	良	
56	6	I 区SD06	祭祀	壇	16.4			赤: に赤い斑模	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	
56	7	I 区SD06	祭祀	壇	11.5			赤: 深褐色	赤や墨 (1mm大 きな砂粒含む)	良	
56	8	I 区SD06	祭祀	壇	22.0			赤: 検	赤 (1mm以下の 砂粒含む)	良	
56	9	I 区SD06	土師器	壇	15.0		6.2	赤: に赤い斑模	赤 (1mm以下の 砂粒含む)	良	

flg	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	地ナ	縫域	備考
56	10	I 区5006	石器	器	長さ 1.9	巾 1.6(曳舟)	厚さ 0.36	黒さ 1.6 g			石材：安山岩 折損している
56	11	I 区5006	石器	刮片	長さ 2.4	巾 1.2	厚さ 0.26	黒さ 0.11 g			石材：安山岩
56	12	I 区5006	石器	刮片	長さ 2.3	巾 1.2	厚さ 0.22	黒さ 1.0 g			石材：安山岩
56	13	I 区5006	石器	石鏟	長径 7.1	短径 5.7	厚さ 1.8	黒さ 83 g			石材：矽化岩系
56	14	I 区5006	石器	石鏟	長径 9.0	短径 6.5	厚さ 2.1	黒さ 167 g			石材：矽化岩系 柄部剥落部分が 括弧の方とも4.4 cmとも 考えられる
56	15	I 区5006	石器	石鏟	長径 6.3	短径 5.6	厚さ 3.2	黒さ 118 g			石材：流紋岩
56	16	I 区5006	石器	石鏟	長径 8.6	短径 5.2	厚さ 2.6	黒さ 178 g			石材：砂岩
57	1	I 区ハイカ層	調文	深鉢	26.5			外：黒	粗 (Diameterの 半分以下)		
57	2	I 区ハイカ層	調査器	高台杯			7.6	外：青灰	粗 (深めほど んど気泡な り)	良	
57	3	株十中	弥生	弦形器				外：に赤い模	粗 (底入の帶 状変化なし)	良	
57	4	株十中	土師器	深坪(坪 型)	23.8			外：灰	粗 (底入の帶 状変化なし)	良	
57	5	林上中	陶磁器	碗?	11.0			外：褐色、滑付 暗青灰	粗	良	
57	6	株十中	陶磁器	碗				外：釉、灰白	粗	良	白地
57	7	株十中	陶磁器	皿			6.7	外：灰白	粗	良	無
57	8	林上中	石器	圓筒の柄 頭が敲石	長さ 9.9	巾 4.9	厚さ 3.8	黒さ 242 g			石材：砂岩 下半欠損
60	1	II K-1 SK21	製鉄関連	模型船浮舟							
60	2	II K-1 SK21	製鉄関連	模型船浮舟							
73	1	II 区-2 SK24	調文	鉢	14.8			外：淡黄點-褐	やや粗 (1 mm 以下のものに當 る)	良	回頭大平手器 後期須恵
73	2	II K-2 SK24	調文	盤				外：暗赤	粗 (底入の帶 状変化なし)	良	
73	3	II 区-2 SK24	調文	粗製深鉢				外：に赤い模	粗 (底入の帶 状変化なし)	良	
73	4	II 区-2 SK24	調文	浅鉢?				外：に赤い模	粗 (底入の帶 状変化なし)	良	灰褐色 輪郭文
73	5	II K-2 SK24	調文	粗製深鉢				外：灰黃褐色	粗 (底入の帶 状変化なし)	良	直線文 輪郭文、刻み口文
73	6	II 区-2 SK24	調文	浅鉢			7.4	外：棕	粗 (底入の帶 状変化なし)	良	
73	7	II 区-2 SK24	調文	皿			5.2	外：灰黃褐色	粗 (底入の帶 状変化なし)	良	
73	8	II K-2 SK24	調文	粗製深鉢				外：に赤い模	粗	良	
73	9	II 区-2 SK24	調文	粗製浅鉢				外：に赤い模	粗	良	
74	1	II 区-2 SK27	古式土器	甕	17.8			外：灰褐色	やや粗 (1 mm 以下のものに當 る)	良	
74	2	II K-2 SK27	土器類	小鉢				外：淡黃褐色	やや粗 (底入の 帶状変化なし)	良	
74	3	II 区-2 SK27	調文	高坪			9.0	外：灰	粗	良	
76	1	II 区-2 SK27	製鉄関連遺物	穿孔口 (板壁型)	1.6/60 g						
76	2	II-H K-3層	製鉄関連遺物	模型船浮舟							

番号	測定地点	種別	特徴	口径(cm)	高さ(cm)	底深(cm)	色調	底土	底成	備考
76	3	II-II< 3層	製鉄廻遊遺物	塊状泥炭浮						
76	5	II-II< 3層	製鉄廻遊遺物	塊型泥炭浮						
76	6	II-II区 3層	製鉄廻遊遺物	塊型泥炭浮						
77	8	II-II区 3層	製鉄廻遊遺物							
77	7	II-II区 3層	製鉄廻遊遺物	突出孔隙or 漂浮						
77	8	II-II区 3層	製鉄廻遊遺物	突出孔隙or 漂浮						
77	9	II-II区 3層	製鉄廻遊遺物	突出孔隙or 漂浮						
77	10	II-II区 3層	製鉄廻遊遺物	突出孔隙or 漂浮						
77	11	II-II区 2層	製鉄廻遊遺物	漂浮? 塵状						
77	12	II-II< 3層	製鉄廻遊遺物	漂浮? 塵状						
77	13	II-II区 3層	製鉄廻遊遺物	塊型泥炭浮						
77	14	II-II区 3層	製鉄廻遊遺物	漂浮?						
77	15	II-II区 3層	製鉄廻遊遺物	漂浮?						
77	16	II-II< 3層	製鉄廻遊遺物	漂浮?						
81	1	II-II区 3層	褐色	縫隙			外:に赤い葉緑 内: (1mm程度の 砂粒を含む)	良	押型文+器	
81	2	II-II区 3層	褐色	粗製深縫			外:灰黃褐 内: (1mm以下 の砂粒を含む)	良		
81	3	II-II区 3層	褐色	粗製深縫			外:灰黃褐 内: (1mm以下 の砂粒を多く含 む)	良		
81	4	II-II区 3層	褐色	粗製深縫			外:に赤い葉緑 内: (2mm以下 の砂粒を多く含 む)	良		
81	5	II-II区 3層	褐色	粗製深縫			外:灰黃褐 内: (0.5mm以下 の砂粒を含む)	良		
81	6	II-II区 3層	褐色	粗製深縫?			外:黒褐 内: (1mm以下 の砂粒を多く含 む)	良		
81	7	II-II区 3層	褐色	粗製深縫			外:灰黃褐 内: (2mm以下 の砂粒を含む)	良		
81	8	II-II区 3層	褐色	粗製深縫			外:に赤い葉緑 内: (2mm以下 の砂粒を含む)	良		
81	9	II-II区 3層	褐色	粗製深縫			外:灰黃褐 内: (1mm以下 の砂粒を含む)	良		
81	10	II-II< 3層	褐色	粗製深縫			外:に赤い葉 緑、褐色 内: (3mm以下 の砂粒を含む)	良		
81	11	II-II区 3層	褐色	粗製深縫			外:灰黃褐 内: (1mm以下 の砂粒を含む)	良		
81	12	II-II区 3層	褐色	粗製深縫			外:に赤い葉緑 内: (1mm以下 の砂粒を多く含 む)	良		
81	13	II-II< 3層	褐色	粗製深縫			外:に赤い葉緑 内: (2mm以下 の砂粒を多く含 む)	良		
81	14	II-II区 3層	褐色	粗製深縫			外:に赤い葉 緑、褐色 内: (3mm以下 の砂粒を含む)	良		
81	15	II-II区 3層	褐色	粗製深縫			外:に赤い葉 緑、褐色 内: (1mm以下 の砂粒を多く含 む)	良		
81	16	II-II< 3層	褐色	粗製深縫			外:に赤い葉 緑、褐色 内: (4mm以下 の砂粒を多く含 む)	良		
81	17	II-II区 3層	褐色	粗製深縫			外:に赤い葉 緑、褐色 内: (3mm以下 の砂粒を多く含 む)	良		

行	番号	II+地点	種別	基準	10g(cm)	50g(cm)	100g(cm)	色調	評定	地版	感想
81	18	II-II区 3層	純文	粗製深鉢				外：灰黒地	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
81	19	II-II区 3層	純文	粗製深鉢				外：灰黒地	地「2mm以上 の砂粒多く含む る」	良	
81	20	II-II区 3層	純文	粗製深鉢				外：に赤い模様	地「2mm以上 の砂粒多く含む る」	良	
81	21	II-II区 3層	純文	粗製深鉢				外：に赤い模様	地「2mm以上 の砂粒多く含む る」	良	
81	22	II-II区 3層	純文	粗製深鉢				外：地灰	地「2mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	23	II-II区 3層	純文	田園文深鉢				外：に赤い黄緑	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	24	II-II区 3層	純文	浅鉢?				外：に赤い赤褐色	地「2mm以上 の砂粒多く含む る」	良	
82	25	II-II区 3層	純文	浅鉢?				外：灰黒地	地「2mm以上 の砂粒多く含む る」	良	
82	26	II-II区 3層	純文	田園文粗製 深鉢				外：に赤い褐	地「2mm以下 の砂粒多く含む る」	良	田園文系
82	27	II-II区 3層	純文	田園文粗製 浅鉢				外：灰黒地	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	田園文系
82	28	II-II区 3層	純文	田園文粗製 浅鉢				外：赤褐色	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	田園文系
82	29	II-II区 3層	純文	田園文深鉢 深鉢				外：に赤い黄緑	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	田園文系
82	30	II-II区 3層	純文	深鉢				外：に赤い黄緑	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	田園文系
82	31	II-II区 3層	純文	深鉢				外：に赤い黄緑	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	田園文系
82	32	II-II区 3層	純文	田園文深鉢				外：に赤い黄緑	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	田園文系
82	33	II-II区 3層	純文	田園文深鉢				外：に赤い黄緑	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	田園文系
82	34	II-II区 3層	純文	深鉢				外：に赤い黄緑	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	35	II-II区 3層	純文	浅鉢				外：黒地	地「2mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	36	II-II区 3層	純文	注口上器or 蓋				外：に赤い黄緑	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	37	II-II区 3層	純文	注口上器or 蓋				外：に赤い黄緑	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	38	II-II区 3層	純文	粗製深鉢田 園文				外：に赤い黄緑	地「2mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	39	II-II区 3層	純文	深鉢				外：に赤い黄緑	地「2mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	40	II-II区 3層	純文	深鉢				外：灰黒地	地「2mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	41	II-II区 3層	純文	粗製深鉢				外：に赤い黄緑	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	42	II-II区 3層	純文	田園文浅 鉢?				外：褐灰	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	43	II-II区 3層	純文	注口上器or 蓋用上器				外：灰黒地	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	店舗B2
82	44	II-II区 3層	純文	注口上器or 蓋用上器				外：暗褐色	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	45	II-II区 3層	純文	浅鉢?				外：灰黒地	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	46	II-II区 3層	純文	注口上器or 蓋用上器				外：に赤い黄緑	地「1mm以下 の砂粒多く含む る」	良	
82	47	II-II区 3層	純文	粗製深鉢				外：灰黒地	地「2mm以下の 砂粒多く含む る」	良	
82	48	II-II区 3層	純文	底鉢			5,0	外：に赤い黄緑	地「2mmの大 きな砂粒多く含む る」	良	

Fig	番号	出土地点	層別	断面	口径(cm)	高さ(cm)	直径(cm)	形状	断面	形状	備考
82	49	II-II区3層	縄文	底部			6.0	外:褐色	瓶(5mm以下の 砂粒含む)	良	No.1584
82	50	II-II区3層	縄文	底部			8.8	外:に赤い斑	瓶(2mm以下の 砂粒含む)	良	
82	51	II-II区3層	弥生?	底部			5.0	外:に赤い斑	半円筒(2mm 以下の砂粒含 む)	良	
83	52	II-II区3層	縄文	深部	27.8				瓶(2mm以下の 砂粒含む)	良	
83	53	II-II区3層	縄文	素				外:に赤い斑	瓶(3mm以下の 砂粒含む)	良	
83	54	II-II区3層	弥生?	素	16.4			外:に赤い斑	小口瓶(3mm 以下の砂粒含 む)	良	
83	55	II-II区3層	古式土器器	素	17.2			外:に赤い斑	半円筒(1mm 以下の砂粒含 む)	良	
83	56	II-II区3層	古式土器器	素	16.8			外:に赤い斑	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	
83	57	II-II区3層	古式土器器	素	18.4			外:瓶	やや歪(1mm 以下の砂粒含 む)	良	
83	58	II-II区3層	古式土器器	素	16.6			外:灰褐色	小口瓶(1mm 以下の砂粒含 む)	良	
83	59	II-II区3層	古式土器器	素	17.6			外:瓶	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	
83	60	II-II区3層	古式土器器	素	18.0			外:に赤い斑	瓶(1mm以下の 砂粒ごと少 量含む)	良	埋直あり
83	61	II-II区3層	古式土器器	素	18.0			外:灰褐色	瓶(3mm以下の 砂粒含む)	良	外面一回黒漆付 着
83	62	II-II区3層	古式土器器	素	22.2			外:に赤い斑	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	
83	63	II-II区3層	土師器	高环	16.5			外:に赤い黄褐色	瓶(1mm以下の 砂粒ごく少 量含む)	良	
83	64	II-II区3層	土師器	高环	16.2			外:に赤い黄褐色	やや歪(1mm 以下の砂粒含 む)	良	
83	65	II-II区3層	土師器	高环			23.6	外:に赤い黄褐色	小口瓶(1mm 以下の砂粒含 む)	良	
84	66	II-II区3層	土師器	高环				外:淡黄褐	瓶(1mm以下の砂 粒含む)	良	
84	67	II-II区3層	土師器	高环	22.8			外:褐	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	
84	68	II-II区3層	製造土器?					外:明黄色	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	
84	69	II-II区3層	土師器	瓶形手				外:黄褐色	瓶(2mm以下の砂 粒含む)	良	
85	70	II-II区3層	土師器	手握上唇	11.5			外:に赤い斑	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	
84	71	II-II区3層	土師器	高环	16.7			外:に赤い黄褐色	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	外, 内 凹凸ナデ
84	72	II-II区3層	土師器	鉢				外:褐	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	
84	73	II-II区3層	土師器	环(鉢脚)				外:に赤い黄褐色	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	外, ナデ 痕跡:回転余切
84	74	II-II区3層	土師器	环(鉢脚)				外:褐	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	
84	75	II-II区3層	土師器	高环				外:褐	瓶(3mm以下の 砂粒含む)	良	
84	76	II-II区3層	土師器	柱状高台				外:褐	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	底部:回転余切
84	77	II-II区3層	土師器	碗?の底部				外:褐	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	底部:ヘラおこし
84	78	II-II区3層	土師器	杯底部				外:褐	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	底部:系切り
84	79	II-II区3層	土師器	杯底部				外:褐	瓶(1mm以下の 砂粒含む)	良	外:向軸子ア ス底:系切り

Fig	番号	出土地点	種類	断面	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	色調	形状	備考
84	80	II-II区 3層	土師器	坪底器			6.6		横 (1mm以下の 砂利混入あり)	良 外:ナゲ 底部:系切り
84	81	II-II区 3層	土師器	坪底器			5.6		横 (1mm以下 の砂利少なし)	良 底部:ヘラおこし?
84	82	II-II区 3層	土師器	坪底器			6.4		横 (1mm以下 の砂利多) 凹	良 底部:系切り
84	83	II-II区 3層	土師器	坪底器			5.4		横 (1mm以下 の砂利少) 凹	良 底部:系切り
85	84	II-II区 3層	土師器	坪底器			5.4		小平 (1mm 以下の砂利多く 少なし)	良 底部:ヘラおこし?
85	85	II-II区 3層	土師器	坪底器			7.4		中平 (2mm 以下の砂利多) 凹	良 底部:系切り
85	86	II-II区 3層	土師器	坪底器			4.0		中平 (1mm 以下の砂利少) 凹	良 底部:系切り
85	87	II-II区 3層	土師器	坪			6.0		中平 (1mm 以下の砂利多) 突	良 底部:ヘラおこし?
85	88	II-II区 3層	陶文	浅鉢				外:黒褐色	底	
85	89	II-II区 3層	土師器	坪底器			6.0		横 (1mm以下 の砂利少) 凹	良 刃物ナゲ 底部:系切り
85	90	II-II区 3層	土師器	坪底器			6.0		横 (1mm以下 の砂利多く 少なし)	良 底部:系切り
85	91	II-II区 3層	土師器	坪底器			6.4		横 (1mm以下 の砂利多く 少なし)	良 底部:系切り
85	92	II-II区 3層	土師器	坪底器			3.2		横 (1mm以下 の砂利多く 少なし)	良 四輪ナゲ 底部:系切り
85	93	II-II区 3層	土師器	坪底器			7.0		横 (1mm以下 の砂利少) 凹	良 刃物ナゲ 底部:系切り
85	94	II-II区 3層	陶文	盆			6.3	外: 黄褐色	底 (2mm以下 の砂利多)	良
85	95	II-II区 3層	陶文	盆			6.3	外: にぶい黄褐色	やや横 (1mm 以下の砂利少)	良
85	96	II-II区 3層	土師器	かづらけ			7.2	外: に深い黒	横 (1mm以下 の砂利多)	良 底部: 回転系切り
85	97	II-II区 3層	土師器	塗			5.7	外: に深い黒	やや横 (1mm 以下の砂利多く 少なし)	良 底部: 回転系切り
85	98	II-II区 3層	土師器	塗			5.9	外: に深い黒褐色	やや横 (1mm 以下の砂利多く 少なし)	良 底部: 回転系切り
85	99	II-II区 3層	土師器	塗			5.4	外: に深い黒褐色	横 (1mm以下 の砂利少)	良 底部: 回転系切り
85	100	II-II区 3層	土師器	塗			5.0	外: に深い黒	横 (1mm以下 の砂利少)	良 底部: 回転系切り
86	101	II-II区 3層	土師器	塗			4.0	外: 灰	横 (1mm以下 の砂利少)	良 底部: 回転系切り
85	102	II-II区 3層	土師器	塗			6.2	外: に深い黒	今井型 (1mm 以下の砂利少)	良 底部: 回転系切り
85	103	II-II区 3層	土師器	塗			8.6	外: に深い黒	今井型 (1mm 以下の砂利少)	良 底部: 系切り
86	104	II-II区 3層	土師器	塗			6.2	外: に深い黒褐色	今井型 (1mm 以下の砂利少)	良 底部: 系切りのナゲ
85	105	II-II区 3層	土師器	塗			5.7	外: 深青褐色	今井型 (1mm 以下の砂利少)	良 底部: 系切りのナゲ
85	106	II-II区 3層	土師器	坪底器			6.4	外: 深青褐色	今井型 (1mm 以下の砂利少)	良 底部: 系切り 刃物ナゲ
85	107	II-II区 3層	土師器	坪底器			5.7	外: 深青褐色	今井型 (1mm 以下の砂利少)	良 底部: 系切り 刃物ナゲ
85	108	II-II区 3層	土師器	坪			5.5	外: に深い黒	今井型 (1mm 以下の砂利少)	良 底部: 系切り 刃物ナゲ
85	109	II-II区 3層	土師器	坪底器			6.4	外: に深い黒	今井型 (1mm 以下の砂利少)	良 底部: 系切り
85	110	II-II区 3層	土師器	坪底器			3.4	外: 深青褐色	今井型 (1mm 以下の砂利少)	良 底部: 系切り

Fig	番号	出土地点	種別	断面	口径(cm)	断面(cm)	底深(cm)	色調	形状	地質	備考
86	111	II-II区 3層	土師器	坪底器			5.2	外:淡黄褐色 内:灰白色	やや幅(1mm以下) の剥離性なし	良	底部:回転ナゲ 未切り
86	112	II-II区 3層	土師器	坪底器			5.6	外:灰白色 内:灰白色	やや幅(1mm以下) の剥離性なし	良	底部:未切り
86	113	II-II区 3層	土師器	坪底器			5.8	外:灰白色 内:灰白色	やや幅(1mm以下) の剥離性なし	良	底部:四輪ナゲ 未切り
86	114	II-II区 3層	土師器	坪底器			3.4	外:褐灰色 内:灰白色	やや幅(1mm以下) の剥離性なし	良	底部:ヘラ脚なし
86	115	II-II区 3層	土師器				7.0	外:淡黄褐色 内:灰白色	Dew假の形 状(1mm以下)	良	底部:無切り
86	116	II-II区 3層	土師器	盤	8.0	1.1	6.0	外:褐 内:灰白色	厚(1mm以上) の剥離性なし	良	よこナゲ 底部:回転未切り
86	117	II-II区 3層	土師器	盤	8.2	1.4	6.9	外:褐 内:灰白色	厚(1mm以下) の剥離性なし	良	よこナゲ 底部:回転未切り
86	118	II-II区 3層	土師器	盤	8.9	1.2	6.6	外:淡黄褐色 内:灰白色	やや幅(1mm以下) の剥離性なし	良	よこナゲ 底部:回転未切り
86	119	II-II区 3層	土師器	盤	7.9	0.9	6.5	外:淡黄褐色 内:灰白色	厚(2mm以上) の剥離性なし	良	よこナゲ 底部:回転未切り
86	120	II-II区 3層	土師器	盤	6.1	1.3	5.8	外:淡黄褐色 内:灰白色	厚(1mm以下) の剥離性なし	良	よこナゲ 底部:回転未切り
86	121	II-II区 3層	土師器	盤	7.8	1.8	7.4	外:淡黄褐色 内:灰白色	やや幅(1mm以下) の剥離性なし	良	底部:未切り
86	122	II-II区 3層	土師器	かわらけ (皿)	16.8	4.3	8.4	外:褐 内:灰白色	厚(2mm以上) の剥離性なし	良	底部:未切り
86	123	II-II区 3層	土師器	坪	11.4	3.6	8.0	外:灰褐色 内:灰白色	厚(1mm以下) の剥離性なし	良	付けめ ハラ調整
86	124	II-II区 3層	土師器	盤			5.4	外:にふい黄褐色 内:灰白色	厚(2mm以下) の剥離性なし	良	底部:未切り
86	125	II-II区 3層	土師器	坪	12.6	3.2	8.3	外:灰 内:灰白色	厚(1mm以下) の剥離性なし	良	外:へう調整
86	126	II-II区 3層	土師器	坪	10.8	3.3	7.1	外:灰褐色 内:灰白色	やや幅(1mm以下) の剥離性なし	良	底部:未切り
86	127	II-II区 3層	土師器	坪底器			6.9	外:灰褐色 内:灰白色	やや幅(1mm以下) の剥離性なし	良	
86	128	II-II区 3層	土師器	坪	13.0	2.4	6.6	外:にふい褐 内:灰白色	厚(1mm以下) の剥離性なし	良	内外面に黒斑あり
86	129	II-II区 3層	土師器	盤			13.0	外:褐色 内:灰白色	やや幅(2mm以上) の剥離性なし	良	保存者
86	130	II-II区 3層	須恵器	可骨	11.2			外:灰 内:灰白色	厚(1mm以下) の剥離性なし	良	
86	131	II-II区 3層	須恵器	高杯				外:灰 内:灰白色	厚(1mm以下) の剥離性なし	良	透かしあり
86	132	II-II区 3層	須恵器	高杯				外:灰 内:灰白色	厚(1mm以下) の剥離性なし	良	上方凹凸かしあり 底
86	133	II-II区 3層	須恵器	高杯			8.3	外:灰 内:灰白色	厚(1mm以下) の剥離性なし	良	円柱ナゲ
86	134	II-II区 3層	須恵器	坪脚器			5.8	外:灰 内:灰白色	厚(1mm以下) の剥離性なし	良	
87	135	II-II区 3層	須恵器	坪	11.4	5.6	8.5	外:青灰 内:灰白色	厚(1mm以下) の剥離性なし	良	回転ナゲ
87	136	II-II区 3層	須恵器	盤	11.4			外:灰オリーブ 内:灰白色	厚	良	
87	137	II-II区 3層	須恵器	底部			7.2	外:褐灰 内:灰白色	厚	良	底部:未切り
87	138	II-II区 3層	須恵器	高台坪			10.8	外:灰 内:灰白色	厚	良	
87	139	II-II区 3層	土師質上器	盆鉢			13.6	外:褐 内:灰白色	厚 Chamfered (1mm以下) の剥離性なし	良	ケズリ 底脚丸
87	140	II-II区 3層	陶器器	碗	11.2	3.1	6.3	外:灰白色 内:灰白色	厚	良	白磁 内:外回転ナゲ
87	141	II-II区 3層	陶器器	碗	16.8	7.2	7.6	外:灰オリーブ 内:灰白色	厚	良	

fig	番号	出土地点	種別	岩種	口径(cm)	芯筒(cm)	芯筒(cm)	色調	粒度	成成	備考
87	142	II-II区 3層	石壁	刃部	長さ 5.8	巾 2.0	厚さ 1.6	黒さ 9g			石材：黒曜石
87	143	II-II区 3層	石壁		長さ 5.1	巾 1.9	厚さ 0.65				石材：安山岩
87	144	II-II区 3層	石壁	キリ (未成品)	長さ 4.1	巾 0.7	厚さ 0.4	黒さ 0.8g			石材：安山岩
87	145	II-II区 3層	石壁	石標	長さ 1.6	巾 1.6	厚さ 0.4	黒さ 10g			石材：安山岩
87	146	II-II区 3層	石壁	壁	長さ 1.88	巾 1.18	厚さ 0.3	黒さ 6g			石材：安山岩
88	147	II-II区 3層	石壁	スクレーパー (4; 8g)	長さ 4.6	巾 5.8	厚さ 0.7	黒さ 21g			石材：黒曜石(未成品)
88	148	II-II区 3層	石壁	石標	長さ 7.7	巾 4.1	厚さ 2.1	黒さ 110g			石材：河原石
88	149	II-II区 3層	石壁	石測	長さ 6.1	巾 3.4	厚さ 2.36	黒さ 66g			石材：河原石
88	150	II-II区 3層	石壁	石壁	長さ 7.35	巾 6.6	厚さ 2.53	黒さ 40g			石材：河原石
88	151	II-II区 3層	石壁	石標	長さ 7.8	巾 5.6	厚さ 2.5	黒さ 151g			石材：粘板岩
88	152	II-II区 3層	石壁	(刃部片) 黒曜石片	長さ 5.3	巾 4.4	厚さ 1.4	黒さ 66g			
88	153	II-II区 3層	古鏡	鏡柄は不明	長さ 2.6	巾 2.6	厚さ 0.4 (3枚 合計)	黒さ 4g			鏡は3枚重なっている 鏡柄は鏽、風化のため 不明
88	154	II-II区 3層	製鉄関連遺物	鍛錬、たが Tuer<タゲ>							
88	155	II-II区 3層	製鉄関連遺物	刀の剣							90.181と同一個体

写 真 図 版



御崎遺跡 全景（北西から） 上：調査前 下：調査後



T2 斷面写真



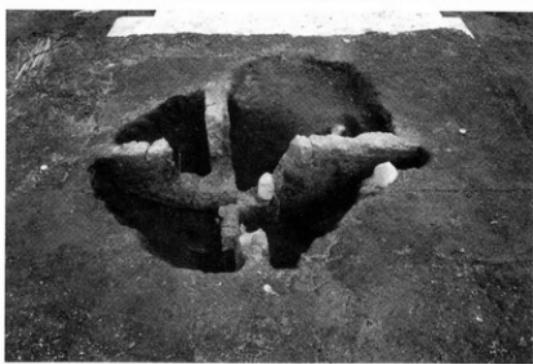
T8 斷面写真



SK01



SK02



SK03

图版 4



SK04・SX12 集石状況



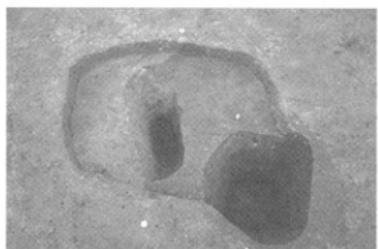
SK04・SX12 完掘状況



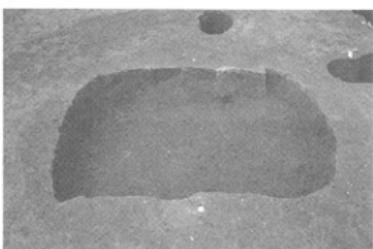
SK05 完掘状況



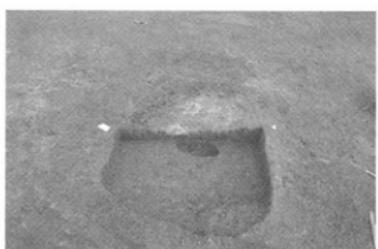
SK26 検出状況



SK14 完掘状況



SK15 完掘状況



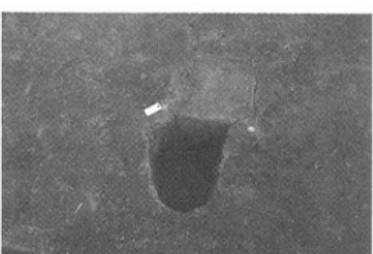
SK16 半裁状況



SK17 完掘状況



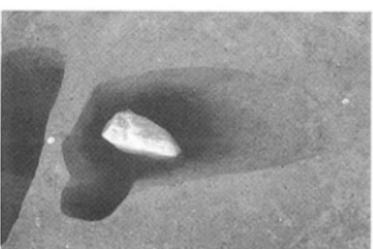
SK18 完掘状況



SX38 半裁状況



SX39 半裁状況



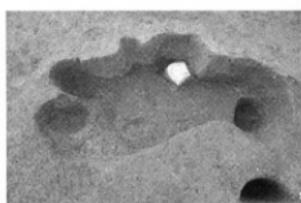
SX40 完掘状況



SB07 完掘状況



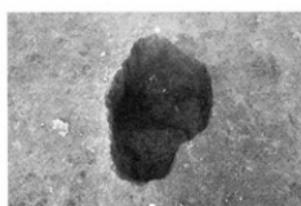
SX41 完掘状況



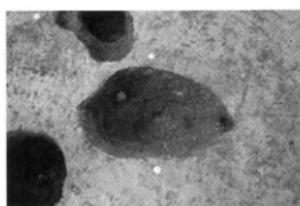
SX42 完掘状況



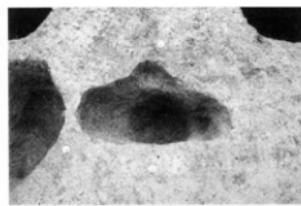
SX43 半裁状況



SX44 完掘状況



SX46 完掘状況



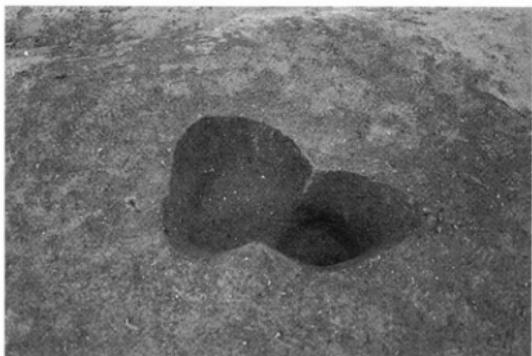
SX47 完掘状況



SX48 完掘状況



SX49 完掘状況



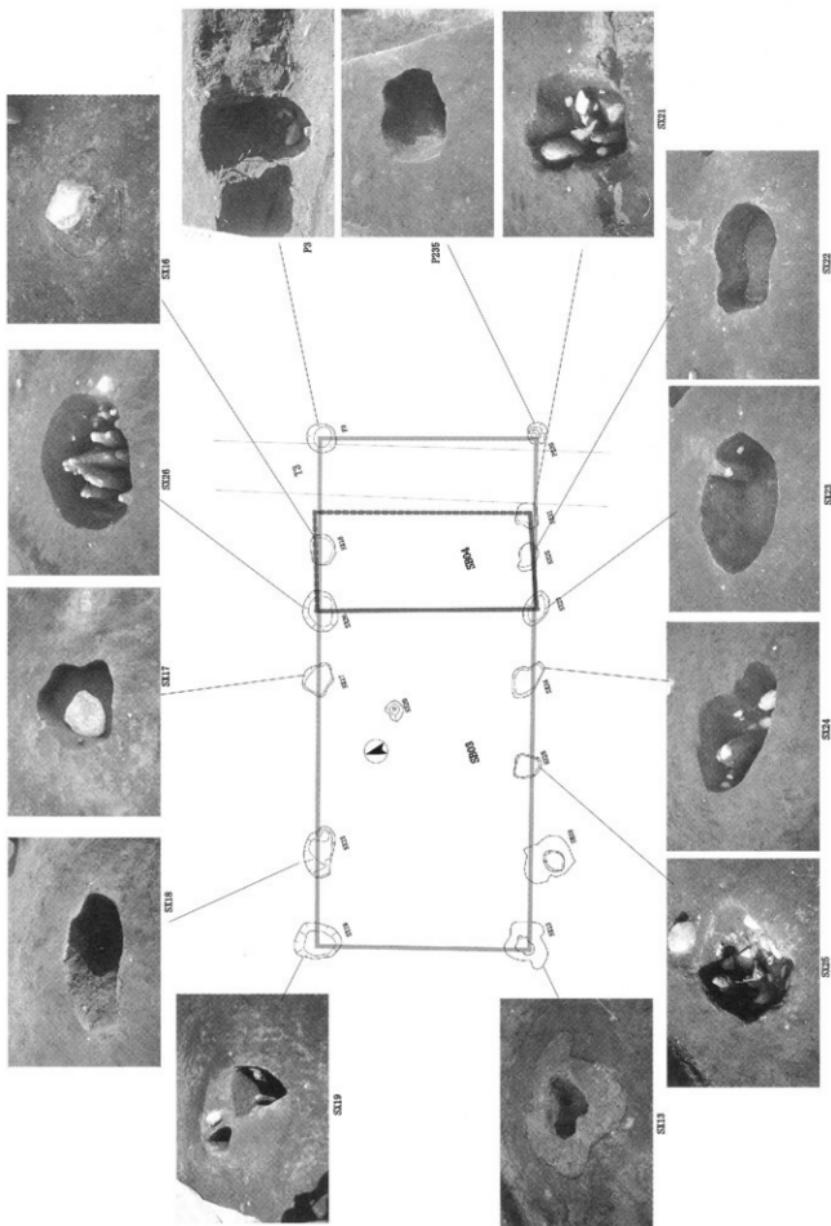
SX51 完掘状況



SB01 完掘状況



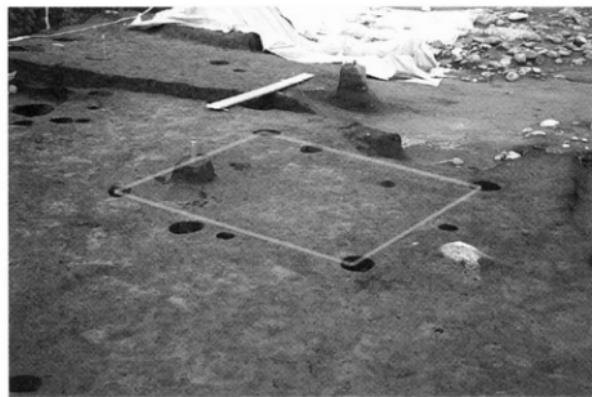
SB02 完掘状況



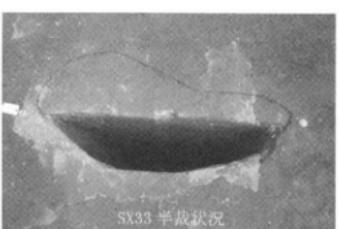
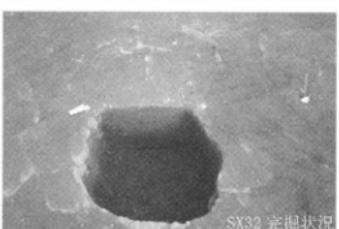
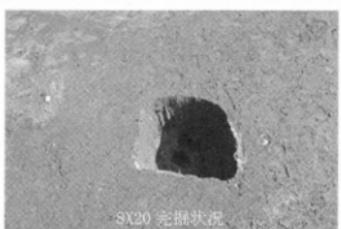
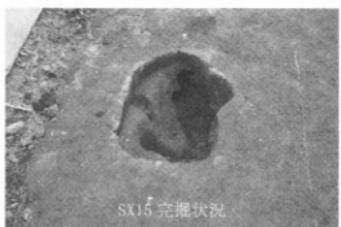
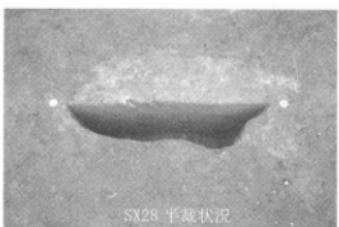
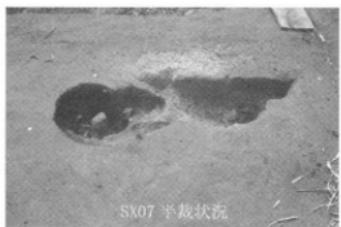
SB03 SB04 完掘状況



SB05 完掘状況



SB06 完掘状況





SK06 石出土状况



SK07 石出土状况



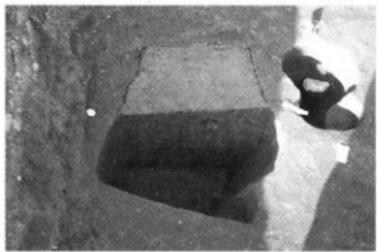
SK08 完掘状况



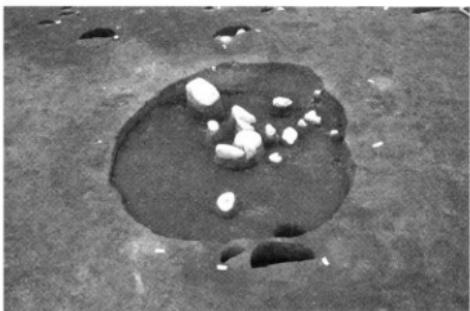
SK10 完掘状况



SK09 半裁状况



SK13 半裁状況



SK11 石出土状況



SK12 石出土状況



土器群Ⅰ検出状況

図版 14



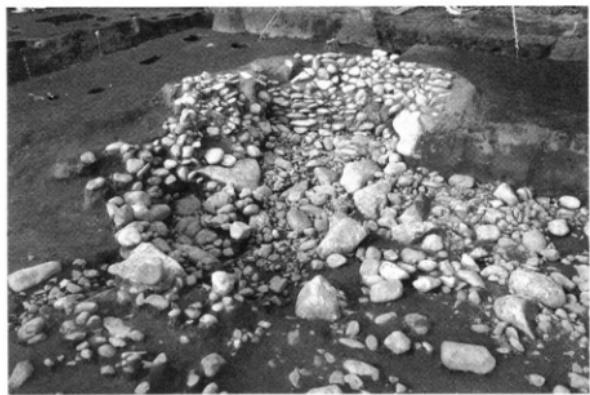
SG01 完掘状況（北側から）

SG01 出土遺物



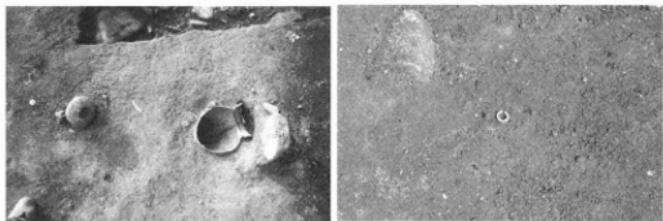
SG01 出土遺物

SG01 完掘状況（南東から）





SD01 檢出状況



SD01 出土遺物



SD01 完掘状況



SD02 檢出狀況



SD02 遺物出土狀況



SD02 遺物出土狀況



SD02 完掘狀況



SD06 検出状況



SD06 遺物出土状況



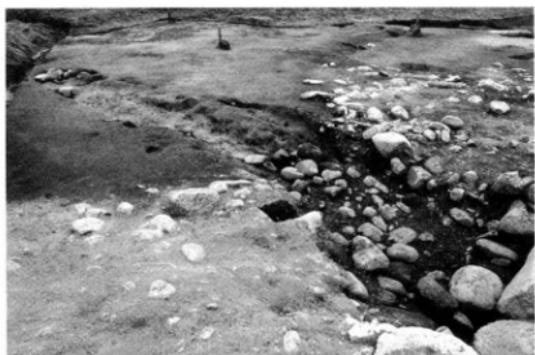
SD06 完掘状況



SD06 遺物出土状況



SK21・SK22



SX53



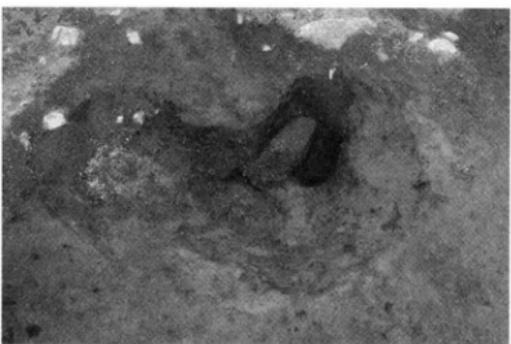
SK20



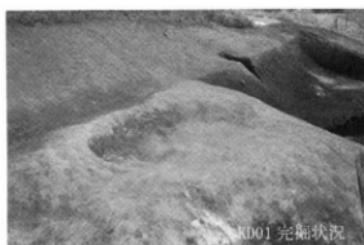
SK19 半裁状況



SD03 検出状況



SX52 完掘状況





SK24 遺物出土状況



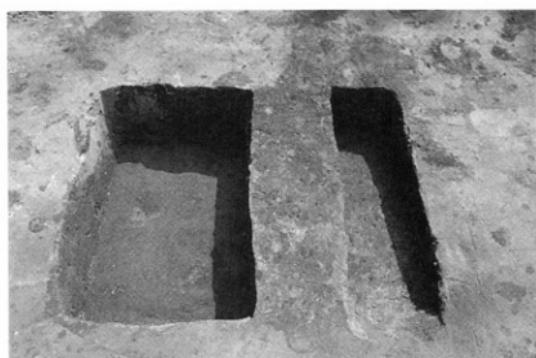
SK24 遺物出土状況



排汽場跡検出状況



羽口出土状況



SX57 半裁状况



SX58(SI01 柱穴) 完掘状况



SX59 完掘状况



調査指導



体験学習



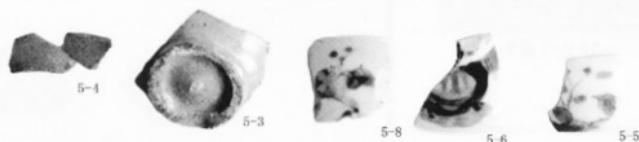
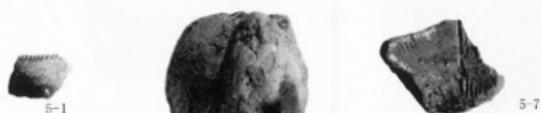
作業風景

II-1 区完掘状况



II-2 区完掘状况





1層出土遺物



7-2



7-3



7-2の底部

SK01出土遺物



7-5

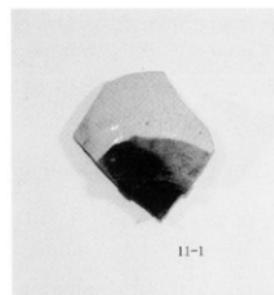


7-4



7-6

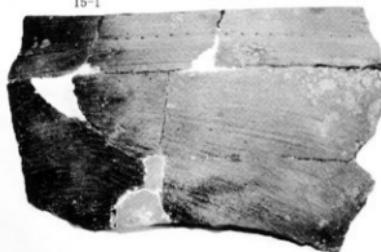
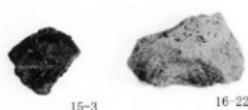
SK05出土遺物



SK15 出土遗物



SK17·18 出土遗物



15-8

15-9

I 区 2 层出土遗物 (1)



16-38

I区2層出土遺物(2)

SX07出土遗物



24-2



24-1



29-6



29-7



29-1



29-4



29-2



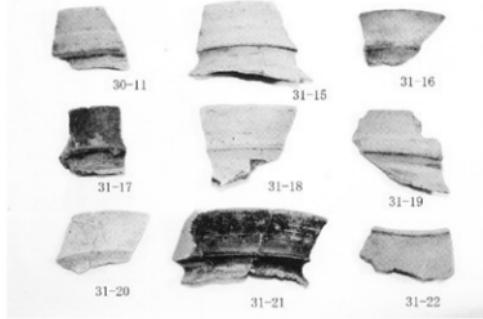
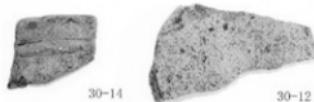
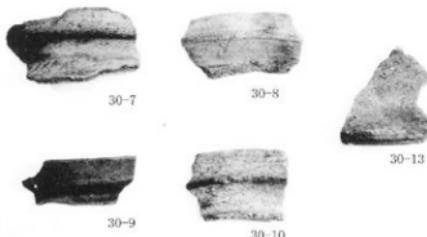
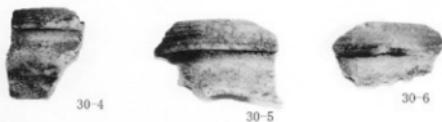
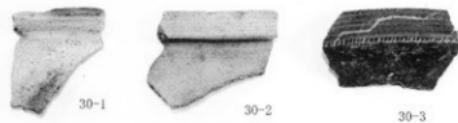
29-3



29-5

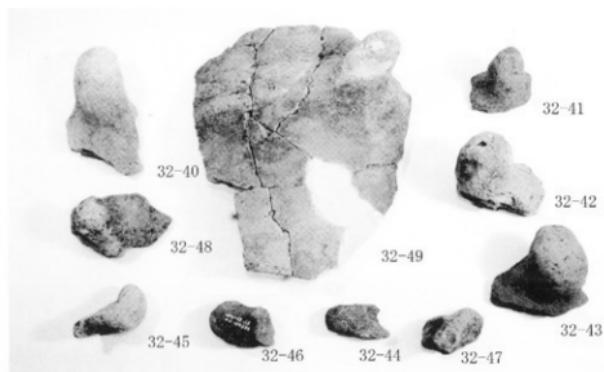
SB05出土遗物



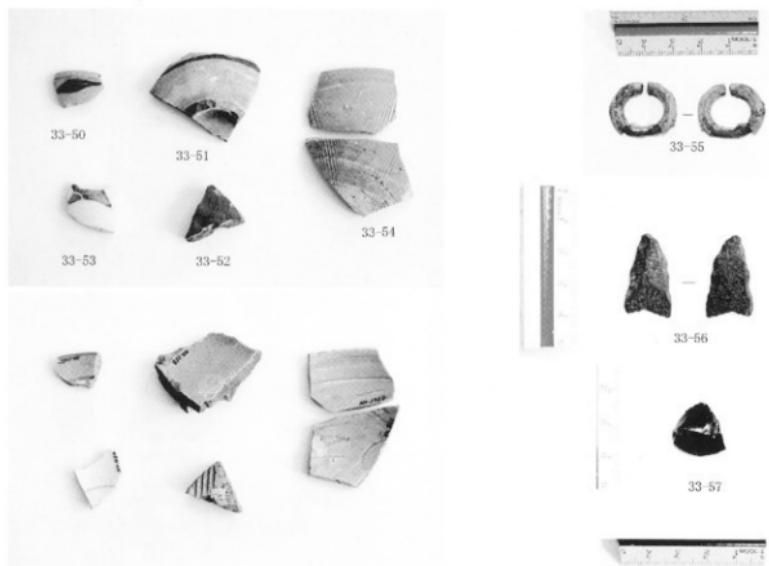


I区3層出土遺物(1)

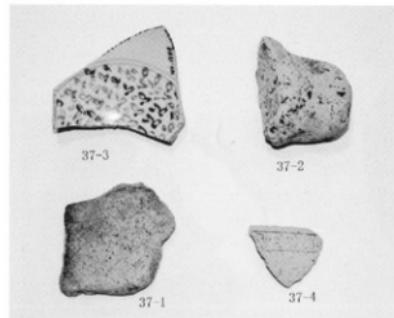
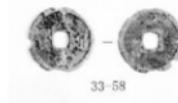
图版 30



I 区3 层(2)・土器群1 出土遺物



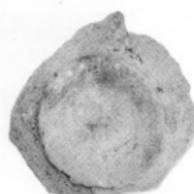
I区3層出土遺物 (3)



SG01 出土遺物



37-5



49-1



49-2



49-3



49-4



49-5



49-7



49-6

49-8

49-11

49-9

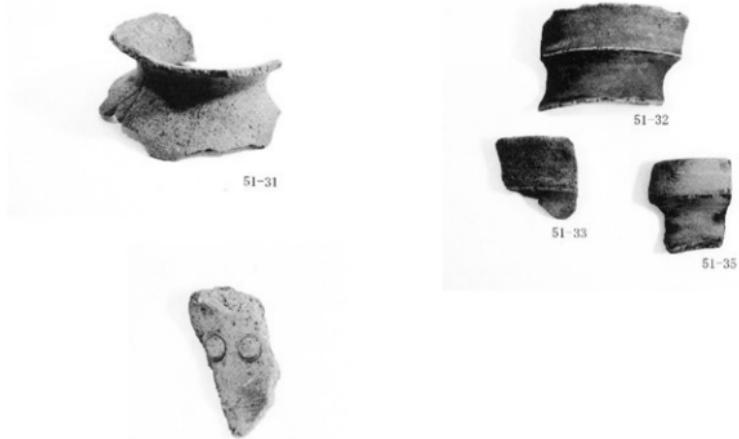
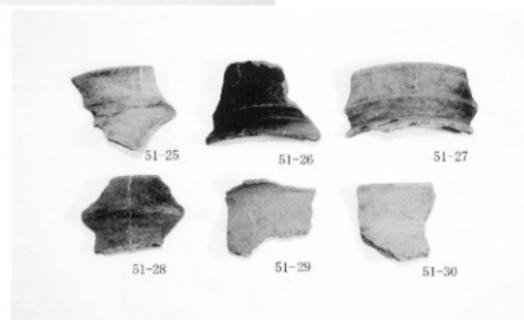
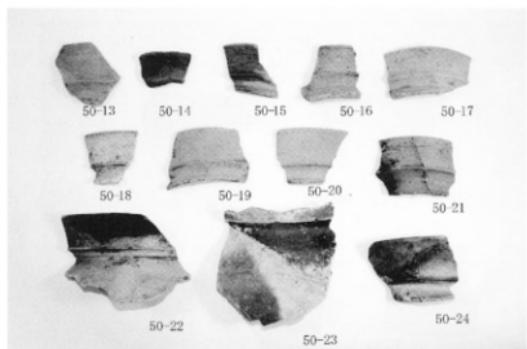
49-12



49-10

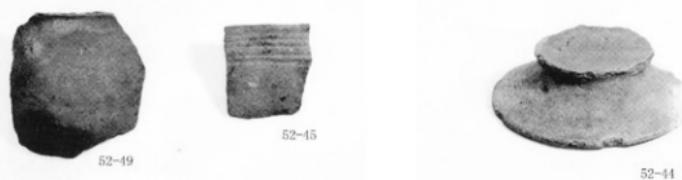
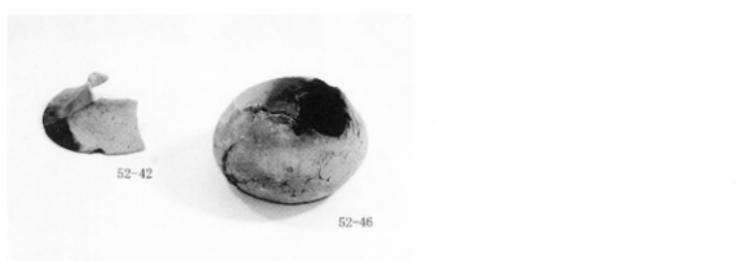
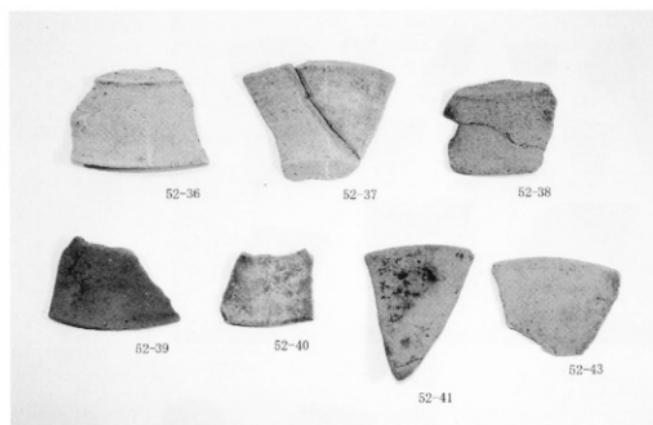


49-10 底部

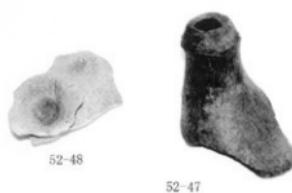


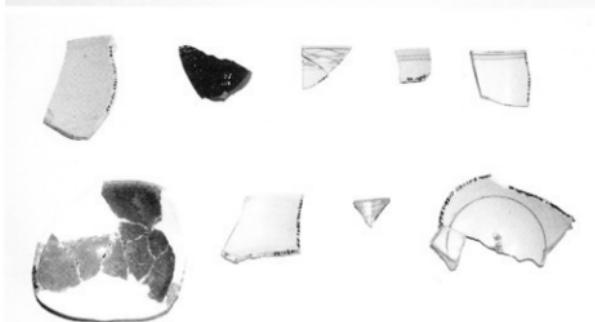
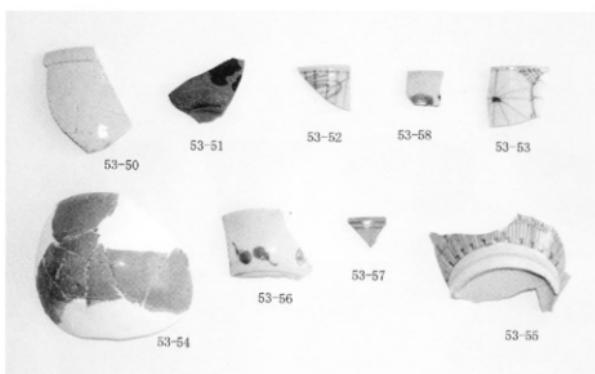
51-34

SD01 出土遺物 (2)



SD01 出土遺物 (3)





同上

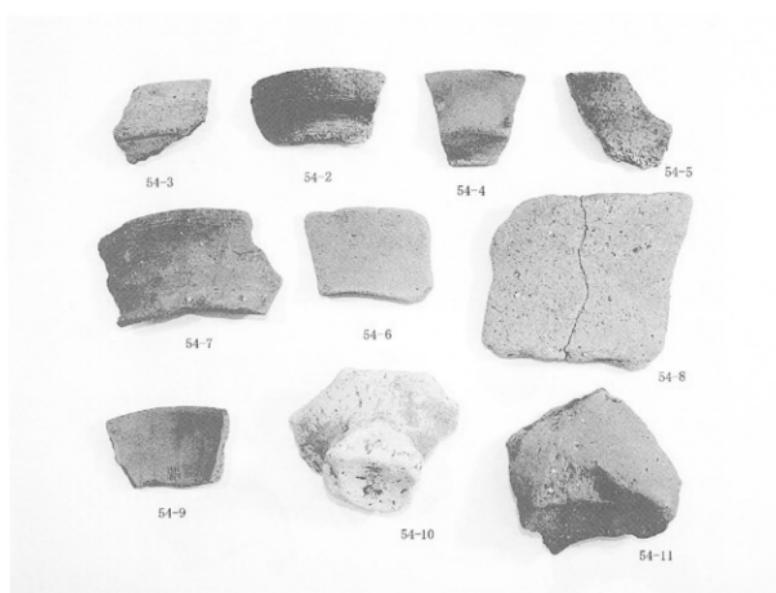


53-59

53-60



53-61



54-1



55-12



55-13



55-14



55-17



55-15



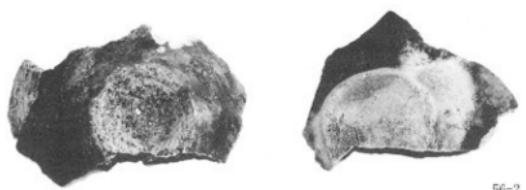
55-16



55-18

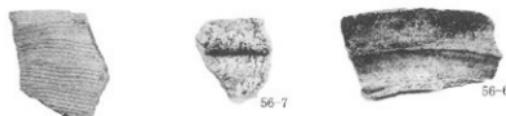


SD02出土遺物 (2)



56-1

56-2



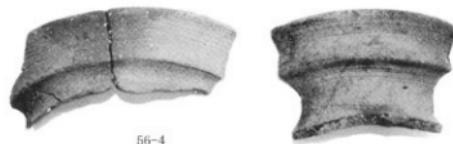
56-7

56-8

56-6



56-3

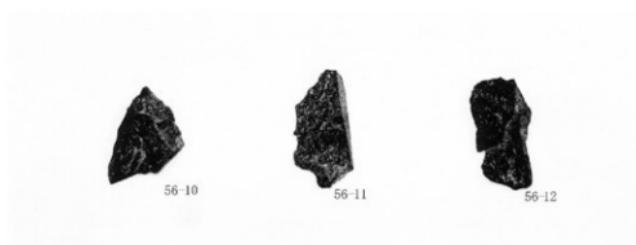


56-4

56-5



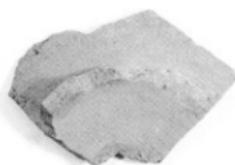
56-9



SD06 出土遺物 (2)



57-1



57-2

ハイカ層出土遺物



57-4



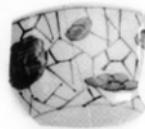
57-6



57-8



57-3

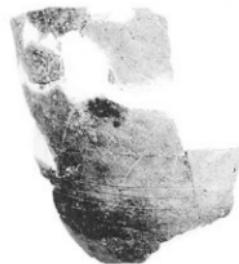


57-5



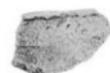
57-7

排土中出土遺物



SK21 出土遺物

8



SK24 出土遺物



73-9



74-1

74-2

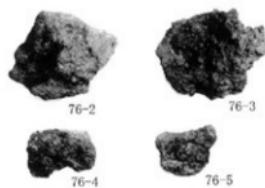
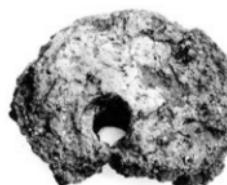


74-3

SD07 出土遺物



76-1



76-2

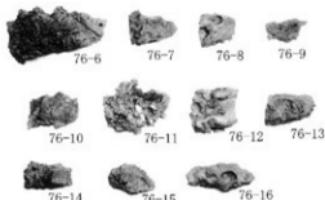
76-3



76-4



76-5



76-6

76-7

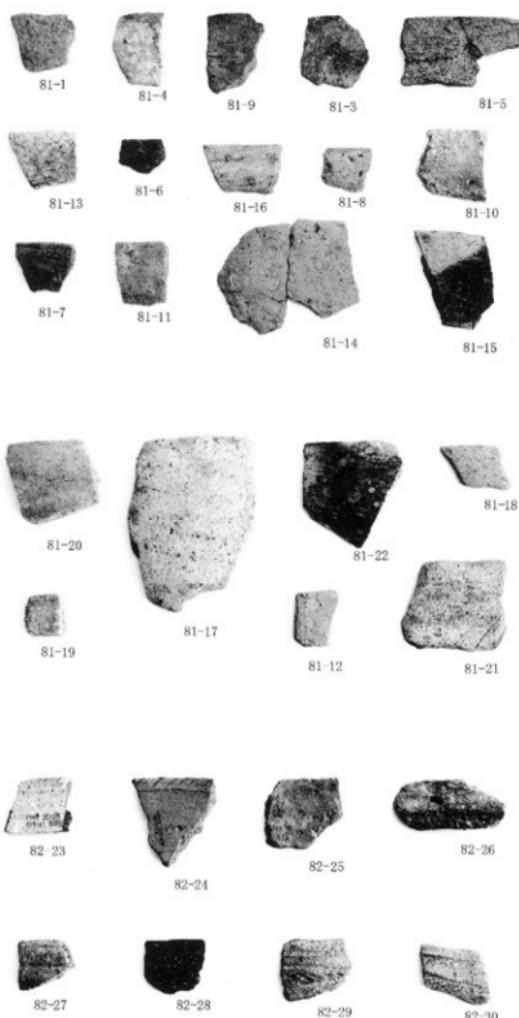


76-14

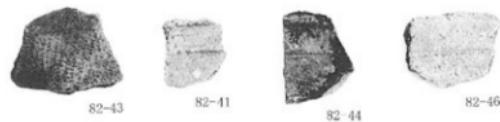
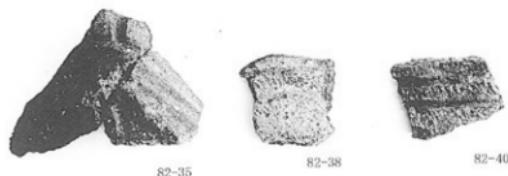
76-15

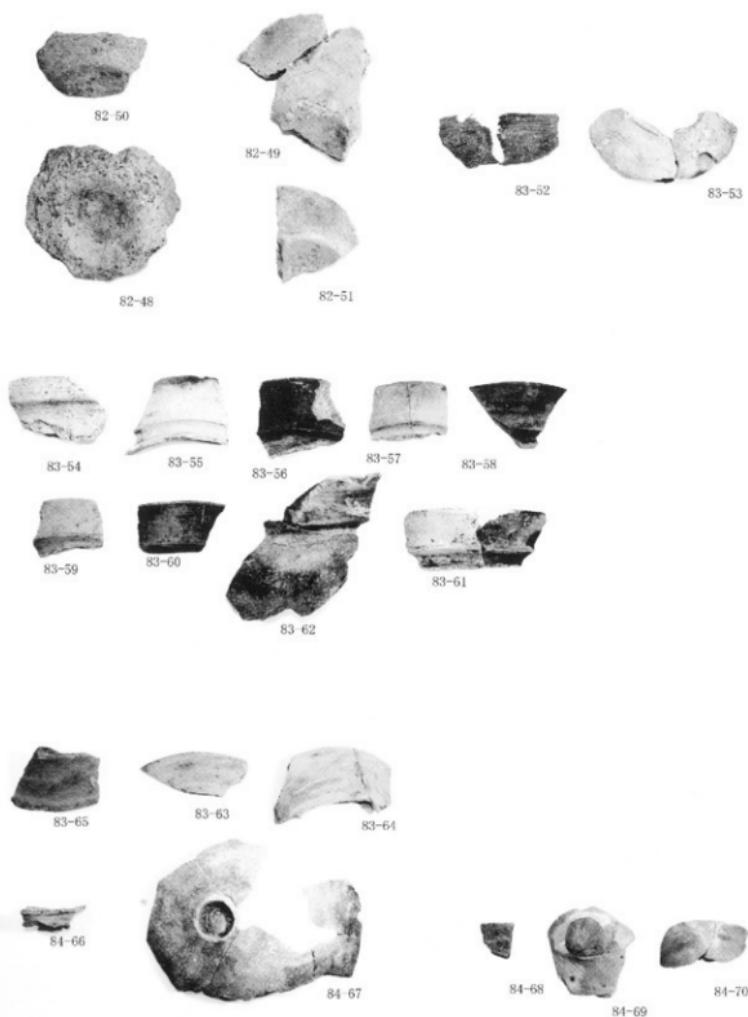


排滓場跡出土遺物

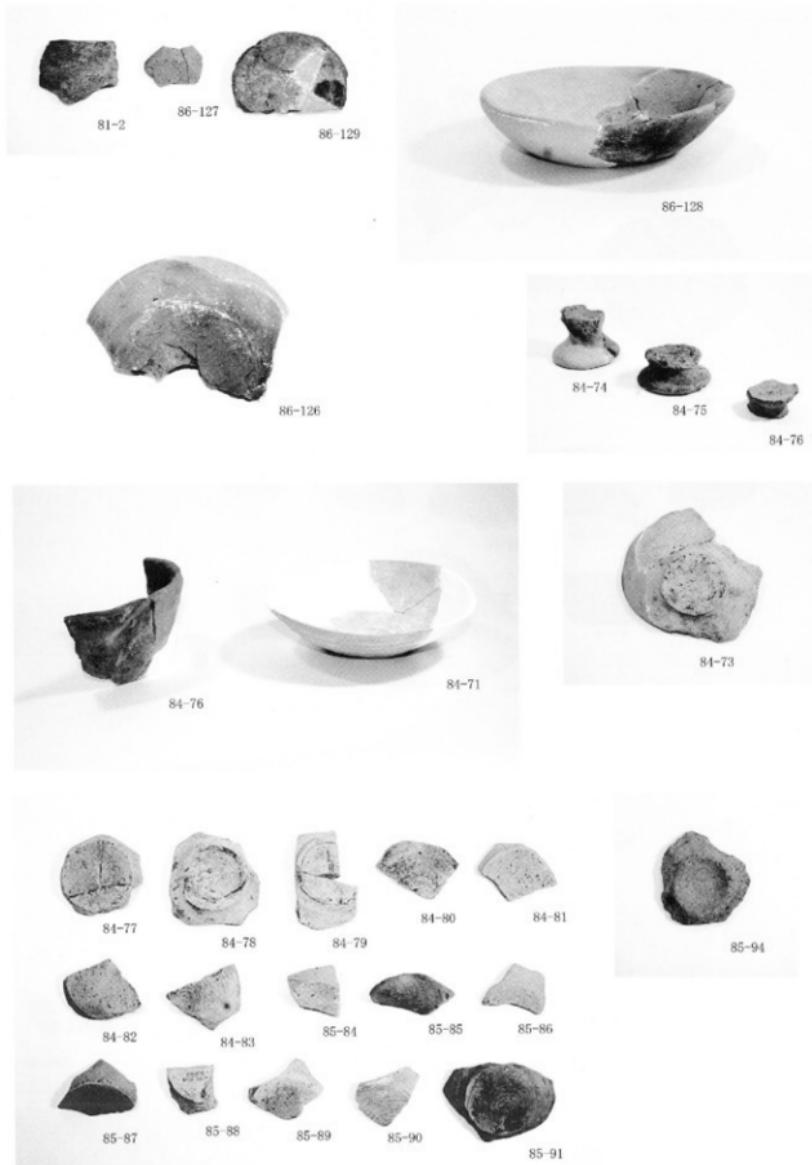


II-2区3層土出土遺物(1)

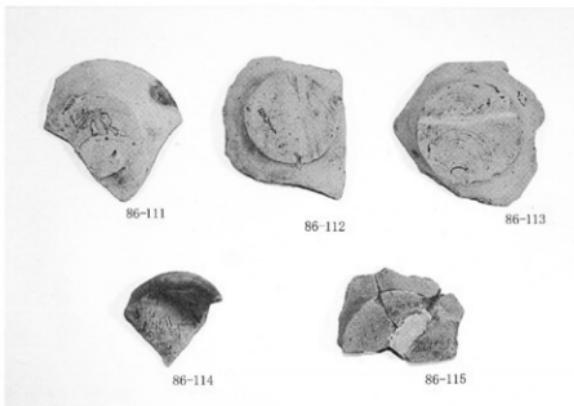
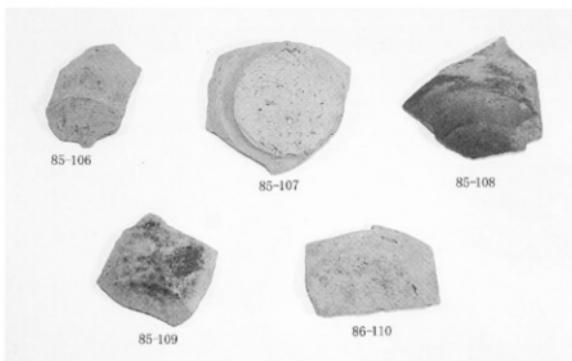
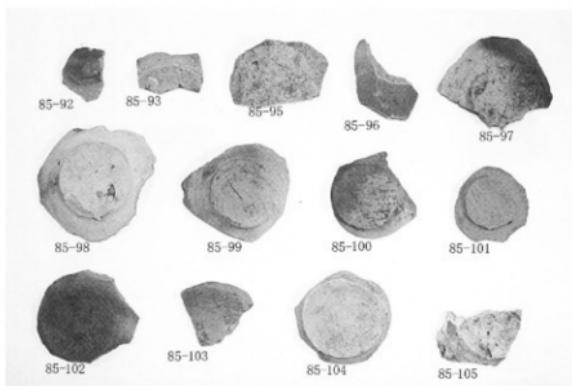




II-2区3層土出土遺物 (3)



II-2&3層土出土遺物 (4)



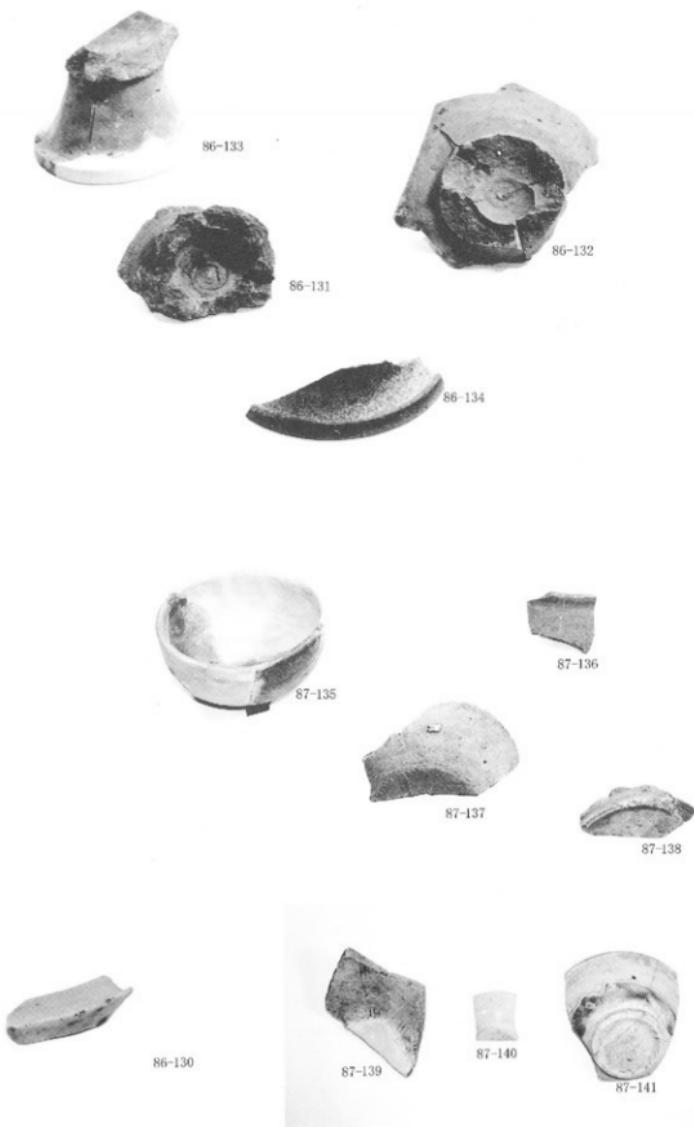
II-2区3層出土遺物(5)



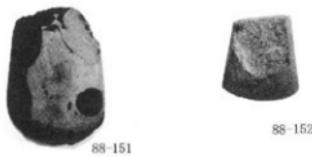
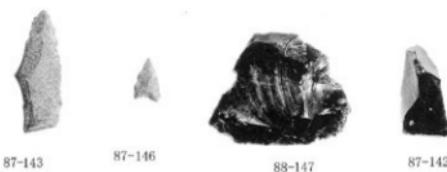
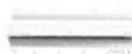
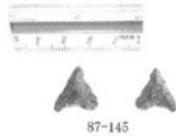
同上 裏面



II-2区3層出土遺物 (6)



II-2区3層出土遺物 (7)



II-2区3層出土遺物(8)



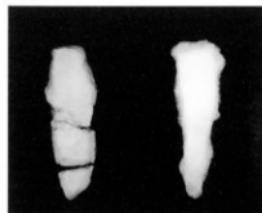
88-153



88-154



88-154



88-155

II-2区3層出土遺物 (9)

報告書抄録

フリガナ 書名	ミサキイセキ 御崎遺跡							
シリーズ名	尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	Ⅳ							
編集者	野津 旭 福田市子 舟木千晴							
編集機関	奥出雲町教育委員会(埋蔵文化財調査室)							
所在地	〒 699-1832	島根県仁多郡奥出雲町横田1037番地			Tel 0854-52-2680			
発行年月日	西暦 2009年3月							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因	調査面積
ミサキイセキ 御崎遺跡	シマネケンニタグン 島根県仁多郡 オタイイズキテヨリ 奥出雲町 ミナリ ホホ 三成777-1他	32341	N149	35° 12' 04"	133° 00' 10"	20070514 20080717	ダム建設	3300m ²
御崎遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	散布地	縄文時代	自然河道		縄文粗製土器			
	住居跡	弥生時代～古墳時代	竪穴建物跡 溝状遺構		弥生後半～古墳前半の土器 古墳後半の須恵器、耳環			
	生産遺構	中近世	排溝塗跡 堀立柱建物跡		板型羽口、楕形鋸治溝 中世土師器		炉本体は存在しなかつたが、精錬鋸治炉が想定される	
	集落付随施設		池状遺構 土坑		陶磁器			
要約	本書は、H19・20年度に実施した御崎遺跡の調査成果を報告したものである。遺跡は斐伊川右岸、矢谷集落南端の水田と畑地、標高221～228mに位置し、縄文時代～中近世にわたり営まれた複合遺跡である。縄文時代では早期押型文土器を、弥生時代後半～古墳時代前半では竪穴建物跡、溝状遺構を検出した。中世では精錬鋸治炉に伴うと考えられる排溝塗跡、羽口、楕形鋸治溝等を見つかっている。また中世末の池状遺構も検出している。池状遺構周辺で、中近世と考えられる堀立柱建物跡、粘土貼土坑、集石土坑等が見つかっている。							

御崎遺跡

尾原ダム建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書VII

発行 2009(平成21)年3月
発行者 国土交通省中国地方整備局
奥出雲町教育委員会
編集 奥出雲町教育委員会
〒699-1832 島根県仁多郡奥出雲町横田1037
電話 0854-52-2680
印刷 (有)植田軽印刷所

MISAKI SITE

Excavation Report

March, 2009

Okuzuno Town Board Of Education

